
勇者 = 三毛猫？？

もんかる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者＝三毛猫??

【Zマーク】

Z3072H

【作者名】

もんかる

【あらすじ】

勇者を召喚したはずがそこにはいたのは三毛猫（雄）だった？！自分勝手でマイペースな猫視点からお送りする心のせまいファンタジー！なにこれ、ギャグじゃん。
一話がたつたの1000～
2000文字！すぐに読めちゃうぜ

1・なにこれ、召喚されたし（前書き）

『』で表記されている言葉は、猫の言葉として読んでください。人間には通じていません。

1・なにこれ、召喚されたし

現実世界から異世界へ飛ばされるのは、なにも人間だけに限ったことじゃない。

人間だけに限らせてているのは、ただの先入観つてやつだ。

『意味わからんね。なにこれ』

俺は呟く。

周りには多くの人間がいて、なにやらざわついている。

「あ、あなたが勇者様でしようか?」

意味わかんね。なにコイツ。

なんか変な色の髪をした女の人が俺を見下しながら、しかもなんか動搖しながら話しかけてきた。

『うつせー。飯よこせや』

俺がそう言つと、周りがさらにざわつき始めた。

なにこれ。ってかうわつ、俺人間の言葉わかるんですけど。

「えつと……失敗?」

俺を見て失敗とは何事だ。失礼にもほどがある。周りを囲んでいた人たちも次々に帰りだした。

「ねこちゃんだー』

幼女が俺の元へ駆け寄ってきた。

「ねいじゅりん、ねいじゅりん」

「ひつひつひつひつ」

俺は世にも珍しい三毛猫の雄だ。もつと崇めろってんだ。

俺はずっとその場に座っていたが、結局その場に残ったのは一番最初に言葉を放った変な色の髪をした女だけだった。

「な、なぜ失敗なんをしてしまったのでしょうか・・・」

女は今にも泣きそうな顔をしている。泣きそうな顔で、俺の顔をのぞきこんできた。

「それとも、あなたがこのバッゼルディア王国を、いや世界を救つてくれるのでしょうか？」

マジで意味わかんねコイツ。寝言は寝て言えし。

「あひと・・・あひとそうに違いないわ

「コレビの宗教団体? あーお腹すいたわあ。なんか漁りに行こうかな。

「私の名前はミフリス。この王国の筆頭魔術師です。あなたは違う世界から呼ばれた勇者です・・・たぶん。どうか我々を魔王の手から御救いください」

あ、良い匂いしてきた。なにこれ、焼き魚っぽい。ちょっと行ってみよ。

俺は立ち上がり、ゆっくりと匂いの方へ歩き出した。

「あつーそ、そっちの方角は魔王がいるとされている北のアンスピカ山脈の方角。やっぱりあなたは勇者なのですね？」

俺の後を女がついてくる。

後ろに立たれるのすつゞい嫌なんですけど。

「勇者様。どうか魔王を倒してください！」

女が頭を下げる間に、俺は匂いの家を見つけて、その庭で焼いていた焼き魚をもらいに庭の中へと侵入していた。

「え、消えた？ もしかして・・・」

もしかしない。お腹すいただけだから。

庭にはおっさん一人で三匹の魚を焼いていた。

「お、三毛猫じゃねえか。なんだ、ほしいのか？」

話のわかるおっさんじゃねえか。

俺は甘い声でみやーっと鳴き、おっさんの足元にくつこった。

「しょうがねえなあ。今日は大漁だつたからな、一匹くらい分けてやうあ！」

景気の良い話だ。

俺の目の前に無造作に地面に焼き魚が置かれ、俺は焼き魚に食いついた。

まあしかし俺は猫舌なもので、噛みついて身をほぐしたらすぐにな

ペツと吐いてを繰り返して、冷ましながら食べた。

『ハツカツあん』

それだけ言つて、俺は庭をあとにした。

つてかここ日本じゃねえじゃん。なんか今気付いた。全然建物の種類が違う。匂いも違うし、地面が固いコンクリートじゃない。いつも通りに塀の上を歩こうと思つてたら、歩けるような塀とかねえし。

眠い。飯食つたら眠いわ。

とりあえず、適当なところで俺は寝ることにした。

詰まるところ、ここが日本でも異世界でもなんでも良かった。飯が食べて、眠れて、退屈さえ凌げれば。

ただ、そんな甘い考えは起きた時こなすつかり忘れてしまつことを、俺はまだ知るよしもなく、深い眠りについた。

1 - なにこれ、召喚されたし（後書き）

「メテイ小説を書くのが初めてなもので、何かアドバイスや感想など頂けたら嬉しいです。

後先考えず書き出してる感が若干滲んでますが・・・・・がんばりますw

追記

この作品は猫視点、猫思考で描かれているため、極端に描写説明が不足します。

どうか、勝手にご想像して読んでいただけますと助かります。

2・なにこれ、捕まつとい

なにこれ。なんか知らん間にケージの中ここんんですナビ。
しかも揺れてるし。馬の歩く音と、車輪の音もする。

「そもそもだな、魔法ってもんは考えるもんじやねえ。感じるもの
なんだよ。んで、あとはイメージするだけ」

タバコの臭いがする。それと図太い親父の声。

「でも、どうしてもつかへできないんだけど・・・」

あと女の子の声。

「だから、お前は集中力が足りねえんだって。もつといつの身体の一
か所に集中してみる。それを解き放つ瞬間に、イメージするんだよ
なにやら魔法について女の子が親父に教わっているようだナビ、
俺には関係なさそうだ。」

「とにかくここせまつーぎつ、おつら転でさるくらーのスペースだし。
なんで俺今まで気付かずここここるんだろ。」

「それにしてもおとなしいなあ。死んでんじゃねえのか?」

親父が言つや否や、女の子が俺のケージを覗き込んできた。

「あ、生きてるよ」

起きてるよ、の間違いだよ。

「三毛猫の雄は高く売れるからな。ほんとコレックキーだったぜ」

ああ、俺つてば売られるわけだ。

「寝てるとこりだつて、猫だし捕獲は難しいんだけどな。今回は馬鹿猫でよかつたぜ」

そんなに動物を並べてもこことなによ。

「猫さん売つちやつのは？」

「って俺売られのかつ！？ やべつ、起きて間もなくて頭が回つてなかつたわ。

「なんだよ、飼いたいってのか？」

「うん」

えつと、どうじょひ。

「それはやめたまつがこいと呪つ

なんとなく、俺は口に出していた。

「あ？」
「え？」

「ん？」

「今、リュカが喋ったわけじゃないよな？」

「うん

あれ？

「つて」とはだ・・・

なにこれ、俺人間の言葉喋ったし。きもつー。
親父は絶句していた。

「すつ」――――――――――――

一人、猛烈に感動してる子がいるし。
俺が自分自身にめっちゃ引いてるのこ、こいつだけ食いついてき
やがった。

「ねえねえ、猫さん。お名前は？」

「ほつ」といてくれ。

「ねえつてばー！」

「ない」

ほんとに入間の言葉だ。この世界に来てから、言葉を理解するこ
とは出来てたけど、まさか喋れるようになつてるとは思わなかつた。

「じゃあ私が考えてあげるね
「だいじりついで十分だろ」

親父の横やり。それは嫌だ。

「パパさあ、センスないよねえ」

娘だつたんだね。つてか親父ちょっととかわいそなぐらい哀れな目で見られてるんですけど。

「むう・・・・・商品に名前なんていらねえんだよつ！」

「売るの嫌だ！」

「喋る猫で三毛猫の雄。もう一気に超金持ちになれるぞ？」

「じゃあ売る」

「売るのつ？！」

やつぱり商人の娘は商人なのね。お金が絡むとあつさりなのね。

「ちょうど次の町は商業都市だ。オークションにでも賭ければ儲けられそうだな」

「そうだね、パパ」

「この親子嫌いだわ。つてか商人嫌いだわ。

「ご飯あげていい？」

「ああ、いいぞ」

でもちよつと好きかも。

2・なにこれ、捕まつたる（後書き）

肝心の三毛猫の名前がまだ決まっていないというwww
このままだと「ミケ」になりそつて焦つてます。なんて安易な・・・
。

3・なにこれ、買われたし

馬車の上よりも、人に持つて歩かれるほうが気持ち悪い。

「ちよ・・・酔った」

けど無視された。
すうげえ腹立たしい。

「こちらの猫が商品でござりますね？」

「ああ」

「ほう、二毛猫の雄でござりますか」

「人間の言葉も喋れるって言つたりひとつあるへ。」

「ふむ？」

なにやらオークション会場なる場所へ連れてこられたらしい。
俺のケージの周りには金ぴかな宝石やら絵画やらが置かれている。
あ、あの絵のざらつき感は爪を磨ぐのに良さそう。

「 続きまして、世にも珍しい二毛猫の雄の登場でござります」

会場がざわつく。

「 しかもーこの猫なんと人間の言葉を話すとか」

せりふをわづく。

「 では実際に喋つていただきましょー」

会場が一気に静まり、ケージの中にいる俺に視線が集まつた。すげえ視聴率にちょっと興奮したが、俺は何も喋らなかつた。さつき無視されたのをまだ俺が引きずつっていたから。

「…………あれ？」

会場がまた少しずつざわつき始めた。

「で、では一〇二二ドルから始めましょ。喋らなくとも二毛猫の雄は貴重ですか？」

慌てた司会者だったが、なんとかオークションを開かせた。

「存外安かったな」

「うん」

商人の親子は結局一〇二二ドルで売れた俺に対してひどい言ことやうだつた。

やつぱこいつら親子嫌いだわ。

でも、確かに安いとか言われるのはちょっと切ない。この値段の伸びの悪さときたら……。

どうせならすっぴん饒舌に喋つて、10倍くらい高く買われば良かったかも。

まあ、そうは言つても、親父たちの話じゃあ一〇二二ドルあれば2年は食えるらしい。

俺つてばやっぱりすっぴん存在なんじやね？

「君の名前は今日からミケレイド・ダルシアム・メディゲジャネスだ！」

ニ毛猫だるだるメスじやねえ？

オーラクションで置つたのはこの辺でも有名な貴族の子息らしい。
マジで名前のセンスねえ。もつ忘れたし。だいいじゆつの方が10
0倍マシだわ。

「じゃあね、猫さん」

商人の娘が俺に別れを告げた。結局お前は俺に名前を付けてくれなかつたな。

ケージに入れられて数分、なんか超でかい建物の中に俺はいた。黒い首輪を付けられて、プレートにさつきのなんとかって名前が入っている。

え、これって俺の一生の名前になるの？まじで？

「——ねえ、アーリア、アーリア！」

やべっ、なにこれ。変な動きしてるし。超気になる！
でもやっぱりそれよりも名前の方が気になるわ。

「あのぉ、この名前ちょっと嫌なんすナビ・・・・・」

もう我慢できなくなつて、俺はつい口走つてしまつた。

「……………」

なんかどうか行つたし。

この隙に俺もどつか行こう。

あー、この首輪どうにかして外せないかなー。

3・なごり、買われたし（後書き）

すつゝこどりでもいい補足なんですが、三毛猫の雄つて実際めちゃくちゃ値が張るよつです。いろんな説がありますが、億単位といつ噂も・・。

4・なにこれ、魔法？

なんか窓開いてたから外に出ちゃった。
庭広いし。迷子になりそう。

「ミケー？ビニー？？？」

少年が探しに来てる。
それよりもどうにかしてこの首輪を外せないかな。
ん？待てよ？あの商人の親父の言っていたことを思い出す。

「集中・・・・・？」

自分の額に集中する。
それを開放する瞬間に首輪が外れるイメージをする。

「ロロンロロン・・・。

なにこれ、マジ簡単に取れたし。
ってか俺魔法使つたっぽい。
やっぱ俺天才じやん。

「ビニー――――――？」

うん、逃げよう。

買ってくれた少年には感謝してるよ。

ただ、自分の名前を覚えきれないってのが致命的だった。
バカでかい壙に上り、俺は屋敷の外に出た。
外で見た景色は、一番最初の町よりも日本に近い気がする。

あ、ご飯食べてからくれば良かつたし。
つかこれからどうじよつ。

ん？ 良い匂いする。ちょっと行つてみよつ。
とある建物に入る。そこはすごいぶん活気があつて、すいぶんたく
ましい人達が大勢いた。

「なんだあコイツ。迷い猫か？」

ハゲのおっさんが俺を睨む。
「えー。つてか筋肉どんだけついてんのこのマッチョ。
あ、なんかあつちで女人の人々が飯食つてるじやん。
そそくせがみに行く。

「お、二毛猫だ。なになに？」

「」飯をくださー。

「ああ、そう？ そんなに私つて美人？ よく言われ……」
「ちげーし」

思わずツツツを入れてしまつた。

「うおっ、喋るの君？」

もううびひつよつもないからコクンと頷く。

「ふーん、高く売れそうね？」

みんな同じ発想にたどりつくんですね。

「「」飯くださー」

「いいよ」

「売らないでくださー」

「・・・・・いいよ」

間があるんですねー。

とつあえず俺はなんかパンみたいなものをもらつた。
なにこれ、意外とうまいし。

「そだつー私と組まない?」

「いやだ」

「ストレートだねえ。ちょっとへこむよ」

と言いつつも笑つてこる。

「じゃあさーとつあえず私の仕事を見てみてよ。君には何かただならぬものを感じじるんだよね」

なにコトバ。また勇者とか言つてしまふな流れ。

「まあまあ、とつあえずついておこづつて

週刊誌になるかな?

5・なにこれ、兄弟ぼつばい

「あのや、 知乗るの忘れてたんだけど、 私セリーヌね
「くえ」

「ほら、 こいつの見た目でしょ？ 名前にぴったりで、 いつか、 やっぱり
美人とし・・・・・・」

「俺にも名前くれ」

もういちいち自分の世界を持つてるなあ。

「名前ないの？」

「ミケなんとかかんとかメスじやねえ」

「それ名前？」

「いや、 だいじゅうひ」

「ほんとに？」

「だから新しくつけてくれ」

納得したらしげ。

「じゃあ簡単よ。 朝は今日から口口」

「H口？」

「口口」

人間の言葉で初めてボケたのにスルーされたし。 ちょっとへこむ。

「なんで？」

「三毛はしろ、 くわ、 ちゃいひつて全部『る』が入ってるじゃない」

「そしたら口口口じやね？」

「それだとキモいじやん」

うん、キモいよね。

なにこれ、すっげえ簡単にふつつの名前が決まった。

名前の話しながら歩いてたら、二つの間にか町の外の森に來ていた。

話しながらだつたからあんまり意識しなかつたけど、この世界に来て一番歩いたかもしない。

もう疲れたんですけど。

「 もう少し歩くからね」

なにが？

「 せ、2回」

確かに変な気配がある。

そう感じたと同時に2回の変なのが現れた。
見たことない・・・変なの。

「 これがジャッキーっていつ猫科のモンスターよ」

「 もしかしてわ・・・倒すの？」

「 へ? もしかしながら倒すけど」

「 ああ兄弟・・・」

あいつは全く兄弟なんて思ってくれてなきゃうなほじ殺飯にみな
がりてる。

「 ほりほりボーッとしてると食われるよー。」

すでに戦闘モードに入ったセリースは、自身の武器であるソル

『』を構えていた。

なんかこの戦闘の雰囲気についていけないんですけど。

「てい」

しゅぱつ！

うわっ、痛そつ。

矢がジャッコの腹部に刺さっている。

「あのね、本来『』はも敵に見つかる前に先制する』ことが一番いいんだけどさ」

なに『』、頼んでないのに自分の武器の利点を喋りだしたし。

「パーティ組んでたら話は別なんだよね」

パーティー？誕生日？クリスマス？いや、両方知らない行事だけ
どさ・・・。

「パーティってのは一緒に組んで狩りする仲間の『』ね」

心を読まれてる？！

つてか、ジャッコがさ、完全に俺のこと無視してるんですけど。
切ない。

「『』はもうとや、一匹相手にしてる間にもつ一匹こやりねちやうん
だよね」

とか言いつつやられてないじやん。
めっちゃ身のこなし早いし。猫並じやんお前。

「それでさ・・・」

۲۷

「口も座つて毛繕いしてないで戦つてほしいんだけど・・・」

「ご指名いただきましたー。」

「私一人でもなんとか大丈夫なんだけどさ。口口つてさ、魔力を感じるんだよね」

魔力って感じられるの?」

すつげ、今ジャッコに飛び付かれたのに、なんなくかわしたよ。

「そだよ。例えば火や水をイメージして」らん。それでこのジャッ「を倒すイメージ」

火か水なら火の方が好きだなあ。火は暖かいし、水は濡れるし。

「ん？あ、俺が倒すの？だからずっと攻撃避けてたの？」
・・・・・うん

全然察してなかつた。すつげえ順調に毛繕いしながら観戦してた
し。

むかつて
・
・
・
。

「！せいで」

なにこれ、すっげえの出た。

直径10cmくらいの火の球が30個くらい出たんですけど。
ってかジャッコ燃えとる。

「うそ・・・・」

セリーヌも予想だにしてなかつたのか、めっちゃ燃えとるジャッコを見てドン引きしている。

一番引いてるのは俺自身だけど

「キモいほど火が出たんですけど」

「口口すつー！君やっぱりただ者じゃなかつたね！」

そつか、やつぱり俺つて天才だつたのかあ。

5・なにこれ、兄弟ぼつばい（後書き）

てきとーな戦闘ですみません。

これからはもうちょっと丁寧に書きます・・・たぶん。

あと、結局三毛猫の名前は安易なたたちに決定してしまいました。

ミケよりは・・・いいですよね？

6・なごれ、はやつー

「あのね、魔法って全部イメージだから、基本的になんでもアリなんだよね」

魔物を倒した帰り道、セリーヌが俺に色々と説明をしてくれていた。

「例えば、自分の足が速くなるイメージをすれば、自身のスピードを速くすることが可能」

猫なんで十分速いんで。

「あとは攻撃力というか、攻撃する自身の部位を頑丈にしたりもできる」

敵に近付くのとか怖すぎて無理。

「UJの世界の魔法使いは、たいてい遠近両方の戦闘をこなせるのよ

え？ なに？ 僕になんの期待してるの？

「あ、でも、魔力には個人差があつて、イメージが強すぎると具現化できない場合があるから気をつけてね」

そのイメージが湧かない人のために教科書とかあるんだって。つてかみんなある程度の基礎は学校で学ぶんだって。

学校ってなんですか？

「うちたら本能のみで生きてきたんで、理解するのが難しいんですけど

よね。

「いいですよねー、人間様は」
「なんでこきなり悲観的発言なのや?」
「いえ、一度野良の世界にいらっしゃったらわかると思こますナビ」
「ふーん」

興味ないよね。うん、俺も基本的に人間に興味ないもん。

「さ、それで本題だけど」
「あ、お腹すいた」
「口口、私と組んで狩りしない?」
「ちよつとトイレ」
「つて聞いてよー」
やつとつひこまれた。

「うそ、ちよつと待つて。ほんとに漏れそつだから」

茂みに隠れて用をたして、砂で隠す。

「で?」
「組もうー」
「お腹すいたつてば」
「私と組めば、好きな時に好きなだけ」飯を食べられぬよ~。
「次は何を狩るのでしょつか?」

早くそれを言えし。

「現金なヤツ」

「愚問。猫だもん」

「なるほど」

つか歩くの疲れた。

あ、さつき教えてくれた魔法使ってみよう。
なんだっけ。自分の足に集中するんだっけ。

「はやつー。」

なにこれ、普通の速足のはずなのに激はやつー！

「うわっキモッ！走つなーのこめつちや速いし。つかなんで急に魔法使ったの？」

セリーヌを中心こ、その辺を歩きまわつてゐが全然疲れない。

「なんとなく疲れたから」

「うつとうつといんだナビ」

自分でもそう思つんだけど・・・。

なにこれ、だんだん快感になつてしまつた。

「うおー」

楽しさなつてきたとこで急にスピードが落ちた。

「あ、よしやく切れたわね」

うわっ、急にすつじこ疲労感が・・・。

足元がふらふらする。

「魔法で強化すると、肉体で感じるものは後からどうとくるから気をつけたほうがいいわよ」

なにコイツ、先に言えし。

6・なごれ、はやつー（後書き）

ただの魔法の説明の話です。

説明は必ず必要なので、説明をつまく話に盛り込める人を尊敬します。

7・なにこれ、もひがよつと

「どうやら、初めてセリーヌに会った場所は、ギルドと呼ばれている場所らしい。」

「つまり、野良猫集会所みたいなものか？」

「いや、知らないけど……」

なに「マイツ、まさか野良猫集会を知らないヤツがいるなんて……。

よつは、依頼をこなせば報酬がもらえるシステムだつて。

「あ、これにしよ

セリーヌは掲示板に張り出されている紙の中から一枚取つて俺に見せた。

「いや、見せられても文字わからんし」「ですよねー」

あれあれ、馬鹿にされてる?

「名付け化け猫のプリシア討伐」「なんでもまた兄弟……」

絶対にわざだと想つ。

「名付きてなに?」

「モンスターの中には、同じ種族でも特筆して強いものが混ざつて

「このことがあるの」

俺みたいなヤツね。

「一度の討伐で倒せなかつた筆頭株には名前が付けられて、報酬がガクツとアップするのよ」

報酬とか俺には関係ないけどね。

俺はこのギルド内居酒屋で一番安い焼き魚定食が食べられれば満足だし。

「んじゃ、行きますか」

「遠い?」

「…………ソシナコトナイヨ」

人間の何倍歩くか知つてる?遠いの嫌なんですけど。

しかも舗装されてない山道でしょ。枝とか石とか落ちてて歩きにくいし、雨とか降つたらぬかるむし、全く良いことがない。

「疲れたら美人でナイスバディーな私が抱っこしてあげるわよ」「それはいいや」

なんかムカツクからノリで断つた。

「んじゃ、てきとーに道具揃えたら出発ね」

ソレにして化け猫退治に出発したのだが……。

「疲れた」

「もうちょっとだから」

「やのもつむつとつてー4回田なんだナビ」「もうちょっとだとけば」

なにこれ、人間の言葉つてすつゞい難しんですけど。結局、化け猫のいる西の森アドルーンくは一週間かかった。ちなみにセリーヌの「もうちょっと」は三回田から言い出して、途中から多すきて数えられなくなつた。

信じられた。

「ほりほり、森に着いたし、やるやる田へかもよ。」

おひやうせで喋つてこる割に、どうか緊張感が俺にまで伝わつてくる。

どうせ俺なんどどんなモンスターにも無視されるんで、緊張とか関係ないから。

だつてこの一週間、何回かモンスターに出くわしたけど、一度も攻撃されなかつたもん。田すら合図してくれなかつたもん。あいつら俺がただの愛玩動物だと思いすぎだし。すげえ腹立つたからめつちゃ燃やしたし。

「ねえ、なに拗ねてんのよ」

「べつに」

瞬間、眼前の茂みからなにかが飛び出しつきた。
あ、猫じゃん。

7・なにれ、もひかと（後書き）

野良猫集会とかその辺のネタを外伝っぽく書いてみたりました。
きっとこの小説と同じようにグダグダになるんでしょうね。

8・なごれ、初恋？その1

「あの、今度お茶でもどうですか？」

「あら、『じめんなさい』

「がーんっ！……！」

いきなりフラれた。しかも思わず口で効果音言っちゃったよ。田の前に飛び出してきた猫は、とんでもなく美人！あ、美猫！ついつい声を掛けちゃったけど、もつショックで立ち直れそうにない。

「ドンマイ」

笑いを堪えながらセリーヌが言った。
「うざい。」

ん？あれ？そういえば今「『じめんなさい』」って聞こえたよね。

「プリシアー！」

咄嗟にセリーヌが矢を射る。

鋭く放たれたはずだったが、いつも簡単に避けられてしまつてい
た。

「え、この子が？」

「そう。上位モンスターは人間の言葉を話せるようになるらしいわ

ああ、俺みたいにね。

「あら、ハンター狩人ハンターだつたの？」

プリシアは不敵に笑い、俺も含めて強い殺氣を放ってきた。
それにしてもかわいい。殺氣すごいけどかわいい。
無理。かわいすぎてこの子に手をあげるとか絶対に無理だわ。

「俺は君を傷つけない」

「何言つてんの色ボケ猫！」

なんか戦闘中のセリーヌさんって怖いです。

「どうやらあなたも特別みたいね」

俺？そだよ。よくわかってるじやん。

「人間と猫、どちらがおいしかしら？」

あ、食べちゃう系ですか。生ですよね？生なら・・・

「人間です！」

自信を持つて発言できたと思う。

そんなことを言つてる中、すでにセリーヌは何本も矢を射つて攻撃している。その攻撃はどれ一つとしてプリシアをかすめる」とはなかった。

「思つた以上に強いかも」

さすがのセリーヌにも余裕がなくなつてきている表情。
あ、次のボケとか考へてる空気じゃないね。

最近のモンスターとの戦闘で、俺は手加減というものを覚えてき

た。

額に集中して、イメージを膨らませる。

「にー ゃー！」

どうしてもこの掛声が出てしまう。

声と同時に三つの火の玉がプリシアを襲った。

「あらあら」

そう言って、なんなく後退してかわす。その着地を狙つてセリーヌの矢が飛んできた。

「いたつ」

恐らく額を狙つたであろう矢は、プリシアの頬をかすめるだけに終わつた。それでも初めてダメージを負わせたことになる。かわいいし強いし、なんて理想的な猫なんだらう。

「もう！大事な顔に傷をつけるなんて・・・」

言葉を言い終わるか終わらないかの瞬間、プリシアの身体は普通の猫の10倍はあるであろう化け猫へと変身していた。

「許さない！」

なにこれ、詐欺じやん。

かわいくて強いプリシアはどうへ行ったの？

8・なごみれ、初恋？その一（後書き）

プリシア戦は一話に分けて書くことにしました。
次話ではロロの本気が見られますよ。
戦闘にギャグを盛り込むのって難しいですね・・・。

9・なにこれ、初恋？その2

そこにはただ強いだけの化け猫が構えていた。

「ああ、プリシア・・・・・・」

ありえない。俺の10倍の体格じゃ、さすがにあ付き合には無理だよ。

過去一番のショックを隠しきれない。せりに、化け猫と呼称される事実を理解した。

するどい爪が俺を襲う。

「うづつ」

変な声出た！

ぎりぎり後退して攻撃をかわすものの、今のスピードではつらい。

「セリーヌ！作戦会議！」

「がんばるー終わりーー！」

すごいわかりやすい作戦だね。結構セリーヌって本能で戦うタイプなのかな？

とりあえず俺は自分の足に補助魔法をかけた。
思考する。たった30グラムの脳をフル回転させる。
その間にも容赦なくプリシアの攻撃がくる。

ブウウンーー！

風の魔法がセリーヌを襲つた。

服が裂け、肌を切る。

「もつーおーこーの服だつたのにー！」

肌を裂かれたことより服の方が大事なんだね。
どうにかして足を止めさせたい。

「いやー！」

火の球を一発だけ飛ばす。もちろん当たってくれるはずがない。
プリシアは飛び退く。そこにセリーヌの矢が飛んでくる。ここまで
はさつきと同じパターン。

「いやー！」

今度は標的が大きくなつたにも関わらず、セリーヌの矢もかわさ
れてしまつた。
実は読み通りだつたりするんだよね。
着地直後の回避行動で、プリシアのバランスは大きく崩れていた。
そこへ俺が飛びこむ。

「これがほんとのネコパンチ！ー！」

と言いつつも爪を精一杯伸ばして切り裂くだけ。パンチじゃない
よ。

爪がプリシアの皮膚へ刺さつて、俺はプリシアの背中に掴まつた
状態になる。

「いやあー！」

必至すぎてもうまく言えなかつたし。

ゼロ距離で火の魔法を使い、すぐに離れた。

「ああああああ……！」

全身から火が燃え立つプリシアの悲痛な叫びが木靈する。

「プリシア…………！」めんね」

心から思つた。

「うううう、な、なにを？」

瞬間、僅かであるが、プリシアの真上から冷水が降つてきた。

ぱあああああん！……！

プリシアを中心に小さな爆発が起きる。

「なにが……起きたの？」

セリーヌが啞然としている。

「小さな水蒸気爆発だよ」

「へ？」

「プリシアの皮下脂肪に火をつけて、冷たい水をかけただけ

「なんで爆発するのよ？」

「油から出た火に水をかけると危ないって教わらなかつた？」

いや、俺自身は当然教わつたことないんだけどさ。

つてか俺天才すぎてやばい。

疲労感ありすぎてやばい。

なんか色々やばい。

「水はいつの間に？」

「最近、補助魔法の時は掛声いらないことに気付いたんだよね」

「うん」

「結局セリーヌの矢を避けてから一歩も動いてないでしょ？」

「牽制の後にプリシアの真上に水を飛ばしたの？」

「うん」

「この世界に来て初めて本気出したし。

野良の世界にいた時のことを思い出すわあ。

意外と頭脳戦が得意だったのさー！

「あれ、 口口？」

「ん？あ？え？」

「つまー。」

なにこれ、俺の体が透けとるー

9・なごみれ、初恋？その2（後書き）

まず初めに、化学とかに詳しい人なら思つと思つただけで、たぶん（実際にやつてないからわからないが）あの程度の火では水蒸気爆発なんて起きません（笑）

もつと色々な条件が必要になると思います。

まあ、ほらファンタジーだから許してください。

あと、セリーヌが全然役立てなかつたのが悔しいとこ書いた後の愚痴です（笑）

ほんとはもつと強いんだと思つんですが・・・。

10・なにこれ、話なげえ

視界がぼやけた。

そう思つたら、もうすでに田の前の景色は違つていた。

「なにこれ」

死んだ?

俺死んじゃったの?

なにこれ、ここ天国?

俺が地獄に行くはずはないから・・・・・・やっぱり天国か。

「君は勇者?」

天国つてこんなに薄暗いとこなんかなあ。

「それともただの野良猫?」

いや、地獄つぽいけど、裏をついて天国でしょ。

「ねえ、どつち?」

つと見せかけての地獄?

「どつちつてば!?」

「いや?」

なんか呼ばれてた。全然気にしてなかつたわ。
絶対俺にじやないつて思つたもん。

「勇者？」

「ノー」

「野良猫？」

「ノー」

「じゃあ何？」

「にゃー」

「殺すよ？」

あ、空気が凍った。

これはこれ以上ボケたらやばい雰囲気のパターンだわ。

「通りすがりの天才です」

「僕がここに召喚したのに、通りすがりって・・・」

「いや、なんか知らないけど飛んできただけなんで」

「君、プリシアを倒したね？」

「イエス」

「僕のペットだつたんだけど」

「俺の初恋だつたんだけど」

「君が倒したんだよね？」

「初恋を断ち切つて倒したつてかつこよくねえ？」

うわっ、眩しい！

目の前にスポットライトの「ごとく明かりがついた。

そこには一人の童顔の男が立っていた。

っていうか子供じやん。^{ガキ}

「僕は魔王。魔王ベネル」

「魔物の王様？人間なのに？」

「そう。僕は魔王。君は勇者。猫なのに」

「なるほど」

なんか今まで一番納得した。

「プリシアには魔法を掛けてあつたんだ。倒されたら、倒したもの
を僕の元へ転移するように」

「透けたから焦つた」

「君は僕を倒さなければいけない」

「興味ない」

「じゃあなぜプリシアを倒した？初恋だつたのに」

「焼き魚定食のため」

「性欲より食欲か・・・」

「あれ、知らないの？二毛猫の雄には生殖機能なんて^{はな}初からついて
ないんだぜ？」

まあ特別俺はあるけどね。

「知らないようだから教えてあげよ！」

「いいです」

「・・・・・勇者と魔王は常に共存している」

無視して続けやがった。

「勇者誕生と同時に魔王も誕生するシステムになつてているんだ」「意味ないじやん」

「そう。意味なんてない。元々、魔王なんてものは存在しなかつた。魔王は人間が勝手に作り出した虚像でしかない。では、なぜ具現化したか？」

「その話長くなる？」

「・・・・・勇者といつ英雄を召喚するシステムを作り出した。

だが、そのシステムは不完全だった

「俺の話は聞いてくれないの？」

「…………そもそも、魔物という存在は人間が作りだしたんだ。人間はね、勇者を作る過程で多くの実験をしていたんだ。それが魔法科学による勇者鍊成実験」

あ、やべっ、今ちょっと寝てたかも。

なにコイツ、完全に自分の世界に入っちゃったよ。

「勇者鍊成実験は、生身の人間、各種動物を使って、遺伝子コントロールなどをして勇者を誕生させようという実験だった。でもね、結果は全て失敗に終わった」

「うがつ！あ、いや寝てないっす。ちょっと頭を床に打つただけっす」

「…………その失敗作が今この世にはびこっている魔物の正体なんだよ」

「…………」

「人間はね、それでも勇者を諦めなかつた。ついには異世界より別の人間を召喚する術を手に入れたんだ」

「…………」

「異世界の人間は、こちらの世界に来ると常人をはるかに凌ぐ力を手に入れるらしい。時空の波を超えてくる時の産物と推察されている。ところが、このシステムにも欠点があつた。」

「…………」

「このシステムは、必ず一人の人間を召喚してしまうものだつたんだ。でもね、勇者は一人も必要なかつたんだよ。だからもう片方は魔王として、この北の地に召喚されるように設計されたんだ」

「…………はうつ！」

「魔王はね、勇者の副産物なんだよ。今ではもうその事実を知る人間はないけどね」

「…………だよね」

「では、なぜ今でも勇者を召喚する儀式を行っているのか知ってるかい？」

「…………だよね」

「…………予言書というかね、昔の人が書いたメモがあるんだ。この魔方陣は、百年に一度使用しなければ効果を失うとね」

「…………だよね」

「勇者を失いたくない人間は、百年おきに勇者誕生の儀式を行っていたんだよ」

「…………あ、よだれ垂れちつた」

「そして今、どうやら魔王が僕で勇者が君のようだ。…………」

本当に君が？」

結構寝ちゃつてた。

なんか話終わつたみたいだし、そろそろ帰ろう。
出口どこかなあ。

10・なにこれ、話なげえ（後書き）

割とこの世界の核心部分を出してみた話だったと思います。きっと、いずれもっと細かく説明があると思います。

今回で魔王＝話長いつて口口は思つたよりです。

またどうでもいい補足ですが、世界で三毛猫の雄に生殖機能がついている例はたつたの3例しかないというです。

11・なにこれ、指名手配

あ、空氣の流れを感じる。
きつと出口はあつちだわ。

「もつ行つてしまつのかい？」

「うん」

「名前を聞いてなかつた」

「名乗るほゞでも・・・」

魔王ベネルは俺を止める氣も倒す氣もないらしい。
きつと俺がただの愛玩動物だつて思つたんだりう。むかつく。

「名は？」

「ロロ」

「覚えておくよ」

「きつと忘れるよ。俺が」

魔王ベネルとか覚えてらんないよ。

さつて、外に出たらご飯を食べたいな。

空氣を感じて出口を見つけた。

なにこれ、すっげえ吹雪

つてかさむつ！

なんあの建物の中はあんなに暖かかったの？暖房全開？

「なにこれ、鼻水凍つたし」

犬じゃないんだからこの寒さはNGだよ。
どうしよ、建物に戻ろうかな。

でも魔王になんて顔して戻ればいいのかわからぬ。ってか恥ずい
し。

あ、魔法。

そうじゃん。補助魔法を使えばよかつたんじゃん。

体を温かくして、足を速くする。

一気に駆け抜けばいいんじゃん。

なんか草とか木とか全くない雪原だから、きっと迷子になるけど、
とりあえずまっすぐ走ろう。勘でなんとなるつしょ。
もう夜で、でもまだ吹雪は止んでなかつた。

「あ、あれ町っぽい」

しばらく走ると町の明かりが見えてきた。

町には人影がなく、どうやらみんな家の中にこもっているようだ。
雪をどつさりかぶつた掲示板がある。

「なにこれ、俺？」

そこには、俺の似顔絵が描いてある張り紙が一枚貼つてあった。
つてか全然似てねえし。こんな不細工じやねえし。

「お、野良猫か？珍しいな」

突然掲示板の横の扉が開いて、髭の濃いおっさんが出てきた。
いきなりだつたからめっちゃびっくりしたわ。思わずその場で跳
ねたもん。

「中に入れ」

手招きをするおっさんに従い、俺は家の中に入った。

あつたけえ！！

「凍傷寸前じやねえか。大人しく！」のお湯に浸かってる」

濡れるの嫌なんですけど。

おっさんは俺を小さな桶に張った湯の中へ放り込んだ。

「いやつはー！」

思わず声が出たが、ぎりぎり猫だったと思う。ほんとこぎりぎり。
あ、温かくて気持ちいい。

なにこれ、新発見。お湯つてこんなに気持ちいいの？

「といひでお願前」

おっさんが湯船から俺を取り出し、タオルで拭いてくれている。

「掲示板の猫だよな？」

なんか意味深。

「猫を発見したものには、2//コドルの報酬が得られるんだってよ

あれ、一気に空気が悪くなつたぞ？

「つまり、俺はこのままお前をギルドに突き出せば、報酬がも「うえ
るわけだ」

さつて、次はど「に行こうかなあ。

「いやあ、大人しくて助かつたぜ」

咄嗟におりさん的手から俺は逃げ出した。

「こやー。」

家のドアを開け、補助魔法をかけ、外へと飛び出した。
さむつ！

吹雪は止んでいたが、地面の雪が手足を凍らせる。
とりあえず俺は、来た方向とは別の町の出口から外に出た。
辺りは暗かつたが、雪をかぶつておじきしている木々が目立つ氣
がする。

なんか森っぽい。

お腹すいた。疲れた。死にそう……。

あ、なんか目が回ってきたし。きっと今度こそ天国だなあ……。

12・なにこれ、嫌われ者？

意識が朦朧とする。

気持ち悪い。けどなんか心地良い雰囲気が俺を包んでる。

「あ、起きた？」

なんて綺麗な声。なんて素敵なぬくもり。

「君、大丈夫？」

俺はすっごい美人の腕の中で眠っていたようだ。

「お腹すいてない？」

「すいた！」

あ、本能が働いた。

「あ、あら、喋れるの？」

「う、うん」

「氣まずいよ。

「飯もらいえなくなつたらビーフシチュー・・・。

「とにかく、これをお食べ」

俺の口元に木の実のようなものを差し出す。

なにこれ、超うまい！

なんかチョコっぽい感じ。

「おいしい？」

「クンと頷いておく。

「私はメリル。君は？」

「口口」

「どうして森で倒れていたの？」

「お腹がすいて・・・」

「うー、どうだかわかる？」

辺りを見渡す。

蝶々が飛んでる。花が咲いてる。なんか全体的に青緑っぽい雰囲
気。

「わかんね」

「ここは妖精の森よ」

「うせー？ 幼生？

「妖精ってなに？」

「私たちの種族のこと。私たちは魔法を生み出し種族と言われて
いるわ」

「へえ」

「ただ、その、すぐ言いくらいんだけど・・・」

「ん？」

実は男です、とかのパターン？

「うーの森の者たちは、すぐ猫を嫌ってるの

「え」

「だから、しばらくここに隠れていてね」

「メリルは嫌いじゃないの？」

「私は嫌いじゃないわ」

「ちょっと大妖精様のところに行かないといけないから、待つてね」

「わかった」

なんで俺って美人に素直なんだろう。

なんかこの人、人間とは違う雰囲気をしている。
大妖精様ってどんなヤツかな。めっちゃでかいのかな。
あ、また蝶々だ。ひらひらしてゐる。
・・・・・超氣になる！

「てい！」

あれ、取れなかつた。

「こやふ！」

あれ？取れないぞ。
蝶々が逃げていく。
逃がすものか。

「でやつ！」

パチン！と蝶々をよつやく捕まえた。

「なによつ？！」

あれ、リリビー。

「もしや……猫?！」

急に周りがざわつき始めた。

「な、なんで来ちゃったの……」

あ、メリルがいる。

つていうかなんかすっごい美人だらけだ。

なのに険悪な雰囲気全開。

「メリル！あなたが連れ込んだの？」

「あ・・・大妖精様・・・・・・」

「そうなのね？」

大妖精全然でかくなかった。

普通サイズ。ちょっと胸が周りの人よりも大きいくらい。
よく見ると、みんな耳がとがってる。

俺と一緒にやん。

でもよく見るとつすら羽がある気がする。
もしかして飛べちゃうのかな。

「あ・・・はい、そのとおりです」

「すぐに追い出しなさい!」

「つづ」い剣幕。そんなに俺のこと嫌いなのか。

「南の森に捨ててきなさい!」

もはや物扱いか。

心臓も動いてるし、息もしてゐるのに切ない。

「メリルは俺を助けてくれただけだよ

思わず言葉を発していた。

「さらに喋る化け猫とは・・・・メリル、過去に何があつたか知らないわけじゃないわね？」

「は、はい」

化け猫って・・・。

確かに珍しい三毛猫の雄だけどさ、化け猫って傷つくし。

「でも、南の森は・・・」

「問答無用！」

「は、はい・・・」

メリルは俺の元に来て、俺を抱き上げる。

周りの視線が痛かった。「猫に触てるわよ」とか「猫を助けるなんてバチ当たりね」とか聞こえてきた。

「ごめんね」

小さい声で、俺の耳元で囁いた。

「メリルは悪くないし

「ごめんね・・・」

南の森が相当危険なところとこりのほうはもう雰囲気で察した。

「大丈夫」

「森の巨人バビリーには気をつけて。私たちも困つてゐるほど凶暴な
巨人よ」

妖精の森と南の森との境界までやつてきた。

メリル、心配しなくて大丈夫だし。

俺が「巨人」とき倒してやる。

「とにかく逃げるのよ」

メリルはそれを言うなり俺を下ろした。

「巨人倒したら、また帰つてくるから。あの木の実をまたちょうどだ
いね」

「え・・・」

「ばいびー」

俺は天才だもん。

不可能という文字は俺の辞書にはない！そもそも辞書がない！

12・なにこれ、嫌われ者？（後書き）

妖精の森は「ゼ・ダの伝説」のイメージです。なんか、勝手に連れてこられたのに、すぐ追い出されてってかわいそうな口口ですね。

13・なにこれ、でかすき その1

メリルがなんで心配してたのかすつ“いわかった。

「魔物だらけ・・・」

さつきから次から次へと魔物が俺の匂いを嗅ぎつけて、襲っていく。
そのたびに逃げる。

だつて怖いし、俺平和主義だし。
あ、そうだ、匂いとか気配とか消せないかな。

「集中っと」

補助魔法をかける。

たぶんこれでしばらく見つからないと思つ。

ドンッ！ドンッ！ドンッ！

地響きと共にすゞい音が俺の耳を襲う。

「な、なに？もしかして・・・」

もしかした。

噂の森の巨人バビリーの登場。

「ちょっと待つて。巨人って2メートルくらいだと思ってたし」

（この木々は背が高い。普通の森に比べたら、三倍くらいの高さ

を誇つてゐるだろつ。

普段木登りをする俺でも登らつと思わないくらい高いもん。

巨人はその木々の半分くらいの大きさはある。

2メートルじゃなくて20メートルの間違い。

そりや歩けば地鳴りがするわ。

幸いにも俺には気付いていないようで、他の魔物を狩つてゐるみたい。

なんか鹿っぽいのを手掴みでむしゃむしゃ食つてるしつてかあのこん棒なんだし。でかすぎでしょ。

「ねみいー

巨人の声。でかすぎ。

そんなん啖かなくていいから勝手に寝ねりよ。

つていうかどうやつて口レ倒すの？

核弾頭とか必要じやない？

そもそも俺のこと見えるかな。

「ぐーーーーーーーーーーーー

寝てるのにうつせー。

寝てる時くらい静かにしろし。

ん？今チャンスなんじゃね？

特大の魔法をぶつけたら勝てちゃつたり？

よし！

たまには思い切つてやつてみよー。

自分で最大級の魔法を考える。

意識をいつもよりも集中させ、時間をかける。

「へやああーーーーー

普段よりも気合いを込めた一撃。

寝てる巨人を中心四本の火柱が立ち、そこからドーム型に火が
巨人を覆っていく。

「うお、あちい！」

巨人が目を覚ます。

そりや熱いでしょ。あんた火の中にいるんだから。

ぶうううん！！！！！

内側からこん棒を一振り。

火のドームはいとも簡単に消されていった。

「だれだあ！！！！」

なにこれ、全然効かなかつたし。

あ、これは死ぬパターンのやつだわ。

13・なにこれ、でかすぎ　その1（後書き）

とりあえず巨人バビリー戦一話目です。

猫対巨人。

はつきり言って無謀ですね。

ちなみに話の中での炎の魔法は上級魔法です。なかなか高度でかっこいい魔法なのです。それでも火傷だけって・・・。

14・なにこれ、でかすぎ その2

もう無理。

あれで無傷なら絶対に無理。

「ビーハーモニカー。」

まだ見つかっていない。

きっと馬鹿なんだろうなあ。

でも、それも時間の問題だろう。

「ああ、短い人生だった・・・」

こん棒が風切り音と共に振り回される。

木に当たると木が簡単に倒れる。

いやいやいやいや、倒れちゃうの？ 50メートル以上ある木だよ？
一本の倒れた木が、俺の方向へ倒れてきた。

「ちょっ！」

木の太さ、長さ、倒れる速度、全部含めて避けきれない。
補助魔法を使う暇さえない。

とにかく走った。もう死ぬとわかつていながら走った。

「うげっ」

石につまづく。猫なのに石で口ケた。

すんごい恥ずかしい。

こんなに恥ずかしい死に方をするのか・・・。

「オオオオーン！！！」

木が完全に倒れた。

「あー、これはさすがに死んじゃったわ」

呟いたのは俺。

「ん？あれ、生きてるし。」

「うお、なんだこれ。」

「ケた際に地面のくぼみに落ちたみたいで、上を見たら木の幹が
こんなにちぢまってる。」

なんかラッキーすぎて笑いが出てくるわ。
なんとかくぼみから這いずり出す。

「ビリーリーリー。」

せっかく全く同じことを言つてこる。しかもまだ見つかっていない。
い。

でもこんな棒でそこいら中を叩いてこる。

地面が歪な形にえぐれていく。

闇雲にやっている分、当たる気はないけど、気は抜けない。

とつあえず集中。

「二十九。」

初めて使つ土の魔法。

巨人の片足の地面を急激に盛り上げてみた。

ドゴン――

仰向けに巨人が豪快に倒れる。

「 いてえ！」

頭を打つたようだが、特にダメージはないよつた。こんな小細工じや全然ダメか・・・。
どんだけ防御に優れてるんだし。この防御馬鹿が。

「レモン」

仰向けに横になりながらこん棒を持つていなし手が空に向かつて突き出された。

ねり始めた。

” ” ” ” ” ! ! ! ! !

なんか気持ち悪い地震。

揺れで木は倒れ、石や岩は転がり、自然災害が俺を襲う。足元がおぼつかず、よろけて倒れている木とかに体をぶつける。次第に、体勢を低くしてると大丈夫なことに気付いた。変な揺れで酔つたし。

「これ勝てねえよ」

揺れば収まつたものの、もう俺の中には諦めムードが広がつてい
た。

だつて、攻撃効かないし、あつちの攻撃怖いし・・・。
唯一の利点は見つかっていないということ。

今のは逃げよつかない。

15・なにこれ、でかすぎ わの3

「つめたつ！」

本気で逃げよつと諦めかけた次の瞬間、雨が降り出した。
まるで俺の心を映すような・・・。

巨人を見る。
ん？ 様子が変？

「うう・・・」

雨を嫌がってる。
水がダメなのかな？
いや、俺も濡れるのすっごい嫌だけどね。

「力が抜ける・・・」

なんで？濡れただけで力が出なくなるの？
これはチャンス！
でも、あの防御の固い巨人になんのダメージを『えられるんだろ
う。

考える。考え尽くす。

「とりあえず牽制するしかないかあ

水の魔法をイメージする。雨の中というのもあって、イメージし
やすく、具現化しやすかった。

「二二一！」

水を圧縮させた水弾をぶつける。

「うーひー！」

効いてる。けどいま一つ。

あ、目が合った。

完全に今日があつたよこれ。

「猫？ 猫に攻撃されていたといつのか？」

フハハハハと笑い出した。

あれあれ、馬鹿にされてるねえ。

所詮愛玩動物だつて思われたよねえ。

絶対に許せないよねえ。

「いやー！」

逃げるという選択肢を完全に消す。

巨人は立ち上がり、俺の放った水弾を片手を振つてかき消した。

「なにこれ、やっぱり死亡フラグ？」

えつと、なんて言えば許してもらえるかな。
なんて考えていると、こん棒が落ちてくる。

ドオオオオン！ー！

地面がえぐれる。
紙一重でかわしたけど、あれくらつたら紙になるわ。

「ごめんなさい」

「ダメ」

ですよねー。

雨で体が重くなる。

きっと巨人もそう思つてるだろうな。
水を圧縮した水弾ではダメだった。
じゃあ何なら体を通るだろう。

こう、スクリューみたいで一点集中で・・・。
あ、ウォーターカッターっぽい感じで・・・。
よくわかんなど、とりあえずイメージが固まつた。
とにかく集中する。

魔力を溜めないとダメだ。

「であー！」

こん棒が振り回される。

なにこれ、もう森じやねえし。

俺と巨人の周りにはもう木がないし。
すつごいこん棒を自由に使えるてる。

巨人の足元を走る。

馬鹿そなだから自分を攻撃しないかと思つて、巨人を登つてみる。
腕とかめっちゃ振り回してるけど、俺には当たらない。
鼻をかじつてもひつかいても、蚊に刺された程度らしい。
だいぶ魔力が溜まってきた。

俺はいつたん巨人から離れ、体勢を整え直す。
もうやるしかない！

「ちょこまかとつ！」

「いや！」

水が超高密度に凝縮して一本の筋を成す。ピストルの弾丸のようなスクリュー回転。それが龍のごとく巨人の胸へと飛んでいく。同時に巨人も土の魔法を使つたようだ。

あ、すんごいのが来てる。

地面が俺にむかって一直線に盛り上がりしていく。たぶんコレくらつたら死ぬわ。

「ふん！」

巨人はこん棒でガード。

でもこん棒なんて軽く貫く。でかいこん棒に小さな穴が開く。大きな魔法の反動で俺は動けない。あとはどっちの攻撃が早く当たるかどうか。

すごい勢いで地面が俺を襲おうとしている。本当に微妙なタイミング。

目の前まで来た。

もう避けることを完全に諦め、俺は眼を閉じた。

ドスン！！

そして・・・巨人はこん棒を落とした。

「あ・・・」

巨人の胸に小さな穴が貫通していた。

「俺の・・・勝ち？」

ズシィイン！――――

倒れる音もまた豪快だった。
なにこれ、壁じゃん。

地面の盛り上がりは、俺の鼻先2cmのところで止まっていた。
なんだか鼻がプレッシャーでむずがゆくなる。
運も実力のうち・・だよね?
なんか俺強くなってる気がするわ。

15 - なにこれ、でかすき その3（後書き）

巨人戦に決着です。

だんだん戦闘にも熱をこめてるつもりなんんですけど・・・。
運の要素が大きすぎますね。

16・なにこれ、手のひら返し

打撲だけですんだのはマジで奇跡かも。妖精の森と南の森の境界へ戻る。

「メリル！」
「口口！」

メリルは待つていてくれた。

お別れしてから数時間しか経つてないのに、ものすごい疲労感。

「すごい地鳴りが続いてたけど・・・。
なんとかなった」

信じられないといった表情。
まあ、俺も信じられないけど。

メリルは俺を抱いて、大妖精のところへ走った。

「大妖精様！」
「まだ捨てていなかつたのか？」
「いえ、この者が巨人バビリーを討伐いたしました」
「誰がそんなウソを信じるというのだ」

確かにウソにしか聞こえないわ。
うん、こればっかりはしようがない。

「ウソではありません。今斥候を送つて状況を調べさせております」

小さな光が俺の周りをまわる。

なにこれ、超常現象？！

「お姉ちゃん、ほんとここの子が？ウソでしょ？」

「ハハ、本当よ」

小さな光はよくよく見ると妖精だった。

飛んでるーってかちっちやーい！

金髪で着せ替え人形みたいなフワフワな服を身にまとっている。

「大妖精様、ご報告いたします」

どうやら戻候が帰つてきましたよつだ。

「南の森では木々が倒れ、地面はガタガタになり、そして・・・人が倒れていました」

「ふむ」

「大規模な戦闘があつたと思われます」

「それで三毛猫」

「口口だ」

「口口、お前がやつたという証拠は？」

「ない！」

自信を持つてこの言葉をお届けします。
そんな証拠とかあるわけないし。

「じゃあさ、逆に誰が倒したと思うの？」

「ふむ、勇者・・・か」

「」でも勇者の単語が出てきたし。

「よからう、信じてやろう」

何を思つたか、大妖精は俺を許してくれた。

「過去、この妖精の森は一匹の化け猫に壊滅的ダメージを『え』られたことがある」

聞いてないのに昔話が始まつたし。

「その化け猫の名前はプリシア」

「え！？」

そんなに強かつたつけ？

「傷ついた野良猫を拾つてきた一人の少女がいた。それがそこに飛んでいる妖精、ミラ」

「・・・・・・・・・・・・

ミラはふわふわ飛びながら何も言わなかつた。

「プリシアの目的は、最初からこの妖精の森だつた。普段、結界で守られているこの森に侵入する手段は、森の妖精に触れていることだつた。プリシアはミラの善意を利用して、森の家を焼き、木々を倒し、妖精たちを切り刻んだ」

大妖精の声が震えている。

「ミラはね、この森で最も優秀な魔法使いだつた。自分のしたことの責任を負い、ミラは禁断の封印術をプリシアにかけた」

「・・・・・・・・・・

「プリシアの力は十分の一程度まで抑え込まれ、その代償としてミラはこの姿になった」

「…………」

「結局プリシアは逃げた。我々は追わなかつた。いや、追えなかつた。とにかく森の回復や仲間の手当を優先したのだ」

だから俺でも倒せたの？

「あたしの身体はもう一度と元には戻れない。でも、全部あたしの責任だから……」

ミラの声が切ない。

「本当は……誰も、お前のことなど責めていない」「でもっ！」

「今回、メリルもロロを拾つてきた。やっぱりお前たちは姉妹なんだな。でも今回は違つた。ロロは私たちの脅威であつた巨人を倒してくれた。まさに勇者だ」

また勇者説かあ。

「勇者……」

「ミラ、勇者について行きなさい」

「え？」

「ロロはいざれ魔王を倒すでしょ。その力になりなさい」

倒さないし。無理。

たぶんあの魔王相当強いもん。見た田子供だつたけど、雰囲気異常だつたし。

つていうか何その根拠のない予言。急に手のひら返しで俺を褒め

だしたし。

「無理だし」

「口口」

「ん?」

「魔王を倒したら、なんでも好きなだけ褒美をとらせる」

うわあ、買収する気だよ。

普通勇者を買収しようとするかなあ。

「ノッた」

と即答はしとくけどね。

「口口、//アを・・・私の妹をよろしくね」

メリルの言葉に強く頷く。

なんかすごい真面目な話だつたからボケる暇がなかつたし。不覚・

16・なにこれ、手のひら返し（後書き）

全然ボケを入れられなかつたです・・・。

とりあえず小さな妖精のミラが仲間になりました！

ミラに関しては不明な部分がかなり多いので、後々語れるとこを
作る予定です。

17・なにこれ、いーい?よべない

「いーい、口口?東の街に行くわよ」

いきなりめっちゃ仕切られてるんだけど。

「東の闘神の都口ニアリアス。名の通り武術の盛んな街で、なんどね、もつすぐなんでもありの武術大会があるのよ」

すつしむおしゃべりなんだけど。

「妖精の森からならそれほど遠くないから、ゆづくつ行きまじゅう」

しかも頭上で、耳の側で話されるからいつもたまらん。

「それからね・・・」

「ちょっとといい?」

「ん?なによ?」

「なんでミラはそんなん喋れるの? ついにうかそうこうキャラなの?

「いーい、口口?あたしはあなたを本物の勇者と認めたわけじゃないのよ」

「俺も本物の勇者だなんて思つたことないけど」

「大妖精様がついていけつて言つからつけてくるだけなの」

「別についてこなくともいいよ」

「あら、やつこいつ」と言つんだ? 大妖精様から「褒美もられなくなつちやうぢよ?」

なんだろ? 足元見られてる気がするよ。

つていうかそもそも魔王は倒すつもりないからね。

「まあ、森の巨人バビリーを倒してくれたことには感謝してるのよ」

「何回死ぬと思ったことか・・・ほんとに」

「バビリーはいつの間にか妖精の南の森に住み着いたの。南の森には木の実や薬草がたくさんあるところで、あたしたちにとつては重要な森だったの。そしたらバカでかいのが現れて、一気に我が物顔。バビリーの防御力は妖精にとつて脅威だったわ」

あー、またはじまつたよ。

「妖精は支援補助魔法は得意だけど、攻撃魔法は苦手なのよねえ」

耳元でつぶさに。

「結界とか、封印とか・・・いーい、口口?ちゃんと聞いてる?」

「キイテマス」

そんなこんなで俺の頭に乗つているミラは楽しそうだった。

ロデリアスには三日歩いて到着した。

今回はゆっくりとマイペースに歩いたから、楽ちんだった。

「うお、すつじい建物があるー。」

ものすつじい大きい。

歪な形をしたドーム。

なにこれ、どら焼きみたい。

「これが闘技場よ。まあ口口には関係のない場所だけだね」

「だね

そもそも戦いとか好きじゃないからね。
超平和主義なんで。

闘技場の入り口の方がやけに騒がしい。

「あれ、なんか人だかりがあるわよ? 見に行こうよ」
「えー・・・つてててて!」

めっちゃ頭の毛ひっぱられてるんですけど。

そもそも人間のことをそこまで好きじゃないのに、なんであえて
人がいっぱいいるところに行かなきゃいけないの・・・。
なんでかミラに逆らえない俺は、しぶしぶ人だかりの方へと歩い
ていった。
あー、めんどい。

17・なにこれ、いーい?よべない(後書き)

リカの性格を少し出してみたお話です。
図々しくておしゃべりだけではダメないキャラクターを意識したいと想ってます

18・なにこれ、勇者じやん

「勇者様…サインください…」

もちろん俺にじやないよ。

「もちろん、ほら、順番だからね」

騒ぎの中心になっていたのは勇者と呼ばれた一人の男。イケメン。金髪。白い鎧。赤のマント。なにより、人間。

「ん？ 猫さんもサインがほしいのかな？」

いらぬえよボケが。

「勇者様は猫にも優しいのですね！」

周りにいる大衆はそれだけでキャラーキャー大騒ぎ。俺が騒ぎのネタになつているというのがなんとも心地悪い。どいつもこいつも愛玩動物つて思いやがつて。

「これが本物の勇者なのかな？」

ミラが耳元で囁く。

知らないよ。

「猫さん、僕の名前はシェルヴィ。南の王都の王より勇者の称号を『えられてこの地へ参つた』

へえ。

「それでは、また会えるといいね。猫さんと小さな妖精さん

いや、断る。

もう会いたくないから。

勇者は颯爽とその場をあとにした。

「なにあれ？」

「さあ？ 勇者様だつてよ。口ロのライバルじゃない

いや、断る。

「せつて、どつかで食糧調達しないと」

「ああ、それなら・・・」

俺は飲食店を探した。

「あら、おこしあうな香りがするわね

そのまま店を素通り。

「入るんじゃないの？」

そして路地裏へ。

「もしかして…・・・

「もしかするよ」

「おや、リビなど」「いやで・・・」

「ああ、リの姫さ。

「奇遇じやないか」

勇者め。

本当に奇遇なのか?

お前みたいな綺麗なやつの来るといひじやなこだらひよ。しかもつこわつかれ合つたばつかりだろ。

「君、ギルドからお尋ね者になつてゐるよね?」

ああ、やつこえはそつだつたかも。

「まあ、そのことせびりドモいこいんだだけビナ。僕はやつらの妖精さんも氣になるんだよね」

「ふーん」

「ハハ、やつぱつ話せるごじやなー」

「そりゃやうよ」

「この猫さんの名前は?..」

「ロロよ。私は//ロ」

「ロロ・・・わやん?..」

「男だつとの」

思わずつづけむ。「こつムカつべ。

「おや、君も喋れるのか。それじゃあ今までの会話も全部わかつて

るね？改めて、僕はシェルヴィー

「興味ない」

「僕は君たちに興味ある」

「口口、行こう？」

初めてミラフと意見が合った。

「口口くん、もっと自分の魔力を隠した方がいいと思うよ

「は？」

「武術大会、楽しみにしてるからね」

そう言って、去る。

もう一度と会いたくない。

「なんかさあ、あの言い方つてまるで口口が大会に出るみたいな感じじゃなかつた？」

「嫌です」

人間って好きじゃない。

男つて嫌い。

勇者は大つ嫌い。

18・なにこれ、勇者じゃん（後書き）

もう一人の勇者（人間）の登場です。

コテコテな勇者です。

モテモテな勇者です。

・・・うらやましくなんかないですから。

19・なにこれ、猫缶？

「もうすぐ試合が始まるね？」

だから興味ないつつ。

「ほらあ、行こうよ？」

「一人で行つたらいいじゃん」

「そういうこと言つわけ？ 私一人じゃ色々危ないのよ」

「俺と一緒にでもさほど状況は変わらないでしょ？」

「だれもこんな汚い三毛猫には近づかないわ」

「うわあ、すつ！」こひどいと罵られた！

「つてのは[冗談だけど、ほら行こ]」

「やだー」

「逃げるの？」

「いや、意味わかんね」

「勇者に楽しみにしてるつて言われたじゃない」

「コントリーとかしてないから」

「優勝賞品・・・」

「ん？」

「優勝賞品・・・猫缶つて言つたひびきあるへえーへー」

「いやいやいや、絶対ウソでしょ。」

「武術大会の優勝賞品が猫缶つておかしいもん。」

「あー、口口つたらなんにも知らないの？」

「絶対ウソじゃん」

「ウソじゃなわよ」

「ウソだ！」

「ウソじゃない！」

「ウソウソウソ！」

「そんなに言うなら確かめに行きましょひ？」

「いいよ！行つてやんよ！」

あれ？いいのか？

まあ、いつか。

会場は異様な熱気に包まれていた。

「どいで賞品なんて確かめられるのせ？」

「あいつどこでちよ」

//に案内されて観客席へと降りていぐ。

「あれえ、おつかしいわねえ」

多くの客が中央に視線を置いている。

まだ誰も登場していないのに。

最前列まで来たけどなんにもない。

あるのは闘技会場のみ。

へえ、ここで試合するのかあ。

「つづいてのカードはああああ……！」

「ふるさつ！」

なんか急いでつかい声が響いてきたし。

「爆力のデルジン！雷光のセガル！双魔のヘネユミア！そしてええ！」

なにこれ、人の名前言つてるだけじゃん。

「三毛猫の口口オ！！！！！」

ん
?
へ
え
?

「一回戦第五試合はこの三人と一匹の前代未聞のカードとなりました！さあ、一体誰がこのバトルロワイヤルを勝ち上がるのでしょうかか！？」

一一
匹?

あ、俺のこと？

「いせしむら」

あれえ、ミラがにんまり笑顔だぞお？

「いっ てきまーす。なんて 言つが！」

「じゃあ行つてきなさい

命令形になつたあ。

ମୁଦ୍ରଣ କାର୍ଯ୍ୟାଳୟ

ମୁଦ୍ରଣ

なんにもわからんねえ。
もう帰りたい
・・・。

20・なにこれ、ほぼ不戦勝

しぶしぶ会場へと下りる。

つか結局ミラ一人で大丈夫なんじゃん。
あの子の狙いはなんなの?
もしかして猫缶?

「レディー！」

いかつい野郎どもが構える。

「ファイトッ！…」

とりあえずうつむき。

この声と同時に三人の戦士たちは戦い始めた。
俺を完全にシカトして。

「おらあ！」

爆力のデルジンって紹介されてたやつは、二つの通り筋肉馬鹿
つて感じ。でっかい斧を振り回している。巨人に比べたらかわいい
もんだわ。

雷光のセガルは魔法剣士かな。自分に補助をかけて、魔法で牽制

しつつ片手剣で攻撃をしてる。

双魔のヘネコミアは赤いローブを着てて、フードをかぶつてたか
らてつきり男だと思つてたけど、どうやら女っぽい。詠唱魔法の声
が女だった。完全に距離をとつて、魔法を打ちまくつてる。

「三毛猫の口口を除く三選手の熱いバトルだあ…！」

実況とかいいから。

どうせ俺は愛玩動物ですよ。コンパニオンペットってやつですよ。
てめーらまとめてアニマルセラピーしてやんぞ？

「ファイヤーウォール！」

肉弾戦をやつてるデルジンとセガルをまとめて炎が包み込む。
ヘネコニアさん、なかなかうまい作戦じやん。

俺も詠唱魔法使おうかなあ。

詠唱魔法つてイメージする内容が詠唱で簡略化されてるから、下級魔法の連射に向いてるんだよね。

教科書で一番オススメな魔法つてセリーヌが言つてたなあ。

「これしきー！」

セガルが水の魔法で炎を消す。

その隙を見てデルジンの斧が横薙ぎにセガルの脇腹をとらえた。
おお、よく飛ぶねえ。

セガルはそのまま会場の観客席際のフェンスにぶつかって気を失つた。

「おーっと、ここでセガルがダウンだあ！！！」

「あとはお譲りやんだけだなあ」

いやいや、俺もいるからね。

「サンダーbolt！」

ヘネコニアの魔法がデルジンの足元へ雷光一閃。

セガルが使うべきだつた魔法じやね？

つてか雷の魔法つて初めて見たわ。なるほどねえ。
直線的な速度は申し分ない。使いやすそな魔法だ。

「魔法は嫌いなんじやー！」

そう言い放つてデルジンは懐から小型のナイフを取り出しヘネコニアに投げつけた。

「あやつー！」

ナイフは綺麗にヘネコニアのふとももに刺さり、そのまま崩れ落ちる。

ゆっくつとデルジンは近づいていく。

「なかなかの魔法だつた。だがコントロールがまだまだだな」

偉そうに言つて斧を振りかぶる。

「うう・・・参つた」

「ここへネコニアが降参を宣言したつーー！」

振りかぶるのをやめたデルジンは笑顔で観客に片手を突き上げてポーズをとつた。

まだ終わつてないつつの。

俺は自分に補助魔法をかける。

「さあ、残つたのは爆力のデルジンと毛猫のロロー」「ぐはははー動物虐待になつまつぞお？」

言い終わるか終わらないかの瞬間、俺はデルジンの鼻に噛みつき、顔面を引っ掻いていた。

「つざや ああああ！」

あつけない。

巨人に比べたら本当に雑魚だわ。これだけで倒せるなんて。顔面傷だらけになり、顔を抑え込んでその場にうずくまつた。

「ここで大番狂わせだあああ……！ デルジンがダウൺ…よつて、一回戦第五試合は三毛猫のロロの勝利い！！！」

会場がざわつく。

普通なら歓声が起きるはずなのに、全然歓迎されていない。中には野次を飛ばすやつまでいる。俺は全てを気にせずに観客席へ戻った。

「おつづー」

なんだし、コイツ。

まったくミラはいい気なものだ。
もう成り行きだからしうがない。

とりあえず・・・猫缶のためつてことで。

20・なにこれ、ほほ不戦勝（後書き）

ついに20話です。

ネタが・・・（笑）

でも、先のことは考へてあるんですよ。

ただ、どうにも笑いを盛り込むのが難しいですね。

21・なにこれ、//リの狙い？

「で、//あると/or。」

人気のなごと/orドリフを睨みつける。

「なんのこと?」

「まだすつじほかの//リがHントリーしたんでしょ?」

「違うわよ」

即答。

「うやつやー」

「ほんとに違うんだりじば」

「でも何か知ってるでしょ?」

「・・・勇者よ」

「は?」

なんでこじで勇者の単語?

「賞品に興味があつて、口口が寝てる時に会場に行つたの。そしたらあの白い勇者に会つて、挑発されたからついカツとなつて、エントリーしてもひつたの」

「俺を?」

「うん」

なんて勝手な・・・。

「じゃあに?俺は勇者を倒せばこいつはこじ?」

「やつこつ」と

なんてめんどくせー・・・。

まあ、まだ話は終わっていないんだけど。

「あのや」

「ん?」「ん?

「それだけじゃないでしょ?」

「え?」「え?」

「優勝賞品や、さつき見てきたんだけど猫缶じゃなかつたし」

「バレた?」「バレた?」

「あらあら!」「あらあら!

「んで、優勝賞品は南のリゾートで有名なアスバルチーム五泊六日の旅だつて」

「うんうん」「うんうん

「まあ、これはフヨイクでしょ? 準優勝の賞品が赤い魔石だったんだ。リリの狙いは「ツチなんじやない?」

間があぐ。

「口口すじこなあ。 なんでわかったの?」

「うわあ、あつけなく認めたよ。」

「そもそもこの町に来る理由つて特になかつたじやん。元々この魔石が賞品として出ることを知つてたんじやないの?」

「あははー。とりあえずさ、もう一回戦始まるからがんばつてきてよ」

「俺、ベスト4でわざと負けるかもよ?」

「まあ、バレちゃったんだからしょうがないわ。口元の口元にしていいわよ」

あれ、意外と素直。

なんか気持ち悪いなあ。

「それではあーーー回戦第二試合の始まりですーーー」

俺さあ、ほんとにこの実況嫌いだわ。
つるわすぎ。

さつとまだミリは何かを隠してるんだね？ けど、とりあえずベス
ト4までは頑張ろう。
猫缶のために・・・。

21 - なにこれ、//の狙い？（後書き）

最も短い話です（笑）

口口が猫缶を手に入れたところで、いつたいどりやつて食べるんで
しうね。

22・なにこれ、打たれ弱いドS

「三毛猫の口口対、魅了のウホンティーーー！」

めっちゃ美人で、胸元が広いセクシーな服を着た女人が鞭を持つてここにこしてゐる。

どうやら一回戦からはタイマン勝負になるみたい。

「あらあ仔猫ちゃんじゃない。いたぶつちやつて大丈夫かしら?」

ああ、そっちのお仕事の人?

鞭で叩きたくてしようがないって曰してゐるよ。

「ファイトッ！－！」

始まつたと同時に鞭が空気を裂いて飛んでくる。

パチン！－！

地面には痛々しい傷が残る。

牽制のつもりだったのだろう。初撃は避けることが容易かつた。ひつそりと補助魔法を掛ける。

「あら、すばしっこいのね仔猫ちゃん」

ヒュンヒュン音を鳴らして鞭が右往左往。

「当たつてくれないと、肉の感触がわからないじゃない」

うわあ、めっちゃ悪趣味だよこの人。

ここまでサディスティックな人も珍しいんじゃない?
だんだん軌道がわかるようになつてきた。

少しづつ距離を詰める。

「」のつー。」

鋭い一撃が一閃、俺の上空から落ちてきた。

それをギリギリで横にかわし、隙のできたウェンディの足元へ一

気に詰め寄る。

避けられると思つてなかつたのか、鞭の動きが鈍る。

「いたつー。」

決して戦闘向きとは思えないような高いハイヒールを履いている
足首に思いつきしかぶりついた。

「いたいー」

その場に崩れ落ちる。

サディスティックなだけに、自分に対するダメージには極端に

弱いらしい。

なにこれ、弱すぎ。。。

「もうやだあ。帰るー。」

そう言って泣き叫ぶ。

うつわあ、めんどくさい女だなあ。

しかも会場からは男の声で大ブーイング。
なにこれ、俺超悪役じゃん。

「で、ウソティがリタイヤを宣言ー。ロロの勝ちだあーー。」

こんなで勝負が決まっちゃつたし。
よく一回戦勝ち上がつたなあ。

ブー ブー ! ! !

なんか、むしろ俺が帰りたいよ。

起立「三」な窮屈氣で、と総くねば、

俺の予想じゃ、ウエンティイが倍率1・3くらい。俺に賭けてるやつなんて、頭のイカれたおっさんぐらうなものだよきっと。

うん、いい。

「あ、お帰りなさい」

三ノ河川の水害とその対策

「よくあんな鞭を避けれたわね」

「えっと…リトルと500ジャム…あ」

氣まずそつな顔。

「い、いーい口口? だつて、お金つて大事だと思わなイ?」

「わざわざ」

「もつ」三箱漁りとかやりたくないんだもん」

「 もう嫌い」

もう知らんし。

「わあわあ、ほんとこめんつてばーねえ、口口つたり。」「知らないしー」

もう今田は試合がない。
//はそのお金でどうやってか知らないけどかわいい赤い小銭入
れと首輪を貰つてきた。

「ほひ、これで全部口口のものだよ?」

勝手に首輪をつけて、それに小銭入れをぶら下げる。
中には数枚のお札と小銭が入っていた。

「あのや、首に付けてたらわ・・・」「うん?」「俺どうやって取り出すん?」「ああ、無理だね」

もうどうか行けし。

「明日もよろしくね

全然反省してないじゃん。

ああ、もうどうでもよくなってきたわ。

明日は三回戦と準決勝。

テキトーに勝ち残つて、猫缶だけもうとじよつ。

22・なにこれ、打たれ弱いドS（後書き）

足を噛んだだけで負けるって、書いてて弱すぎたりつづきました
(笑)

まあ、まだ一回戦なんですね。
ただ三回戦とかになつたからつづいて、「こ戦闘が待つてるとは限りませんけどね。

あと、猫がお財布持つても本当に意味ないです。
これぞほんとの猫に小判つて。
・・・すみませんでした。

23・なにこれ、悪夢

夢を見た。

そりや猫だつて夢を見る。

そこには魔王がいて、そこには勇者がいた。

全然知らない魔王と、全然知らない勇者がいた。

なんとか魔王と勇者だとこいつことだけはわかつた。

「助けてくれ」

「たすけてくれ」

「タスケテクレ」

二人の声が、不協和音となつて耳に響く。

なにから?

どうやって?

どうして?

「俺達を開放してくれ」

さつぱり意味がわからん。

勝手に開放される。

「この呪縛を壊してくれ」

呪縛なのに解くんじゃなくて壊すの?

「お前は特別だ」

そういうわけたくはないらしい。

俺が特別だなんてことは生まれた時からわかってる。

「帰りたい」

俺の言葉だから。

お前らが使うなし。

「勇気を持て」

愛と勇気で世界が救えるなら何千回つて救つてやんよ。

「真実を見る。気づけ」

猫の目は全てを見つめる。
俺の目は全てを見透かす。
気付いてないんじゃない。
気付かないフリをしてるだけ。

「一本の道を歩け」

嫌だ。

俺は道でないとこりだつて歩く。
だつて猫だもん。
道しか歩かないのは人間の悪い癖だろ。
勝手に同じ生き物にしないで。

「助けてくれ」

繰り返し。

壊れたテープレコーダーのよう。

ただひたすらに助けてほしいらしい。

他人に頼るな。

他人に頼つてちや、野良の世界じや簡単に死ぬよ。

自分でなんとかする努力をしろ。

「信じてる」

勝手にしてくれ。

俺は関係ない。

なんで魔王を助ける必要があるのさ。

魔王に信じられる義理もないし。

お願いなのか指図なのかはつきりしてくれ。

どっちであつても関係なく答えは決まってるけど。

「残念、お断りー」

それだけを言つて、目が覚めた。

「なにが?」

目の前にはミラガいる。

ここは試合会場の人影少ない日陰の昼寝スポット。

ああ、そつか。寝てたんだね。

三回戦が始まるまで寝てようつて自分で決めたんだわ。
なにこれ、肉球に汗かいてる。

「え?」

「なにがお断りなの?」

うわ、声に出てたんだあ。

なんか恥ずかしいな。

「ああ・・・なんだつけ?」

「もひ。ほり、変な夢見てないでそれから試合だよ。勝つんでしょ?
?」

溜息と同時に俺を鼓舞する。

「めんどうなあ」

あんまり覚えてないけど、もつ一度と見たくない夢だった気がする。

お願いだから、俺を巻き込まないでくれ・・・。

23・なにこれ、悪夢（後書き）

連載から初めて一日間隔を空けての投稿になつてしましました。
これからもなるだけ間隔空けないで連載しようと思ひます。

今回は息抜き的なお話でした。

いや、ある意味ではすごく大事なのかな。
笑いのネタ的には皆無に等しい内容で、申し訳ないです。

24・なにこれ、アフロ

「まあ…。二回戦第一試合…。毛猫の口口対、サウスパーのガバルティ…！」

色黒でアフロ。

つてか左利きつてのが一つ名づけられたなの？
いや、俺はもつと言えない立場だけどさあ。

「レディーファイトッ！」

左手に片手剣。

アフロがゆせねや。

見てるだけでうつとおじいな。

「ユーはストロング？」「

ごめん。何を言つてゐるのか全然わからんないや。

「オウ、ユーはキャットじやなーー」

どうやつて倒せうかな。

「ユーのリズムについてこられるかな？」

相手が動いた。

不思議なステップ。

近づいたと思つたら遠くこいて、遠くこいてると想つたらこいつの間にか近づいてる。

「ノッてきたよーー。」

知らないよー。

ああ、なんで変な感じがしたかわかつたわ。
歩幅を常に変えてるから気持ち悪かったんだ。
とりあえず、座ってる体勢から戦闘する低い姿勢に変える。
捕らえにくそだから魔法を使っちゃうのもありかな。

「へーへーへーへーー。」

ほいほいほいほい。

足に補助魔法をかけて一気に近寄る。
思ったとおり、防衛反応で剣を振ってきた。
なかなかの剣速の袈裟切りだったけど、あたりきやしじつがない。
左に避け、着地の一歩で飛びつく。
猫つて本当に便利だと思つ。
だって、人間よりもワンテンポ早く次の動作ができるんだもん。

「シットー。」

嫉妬？ 猫に？

顔面をひつかこづとするが、剣で遮られてしまった。

「なんていう凶暴なキャットだ」

キャットって俺のこと？

俺口口だけど。

変なあだ名とか付けるなし。

「イヒイ！」

変な掛け声と共に剣を大きく薙ぎ払う。

ぶううん！－

見えない刃、かまいたちが俺を襲つた。
あ、正確に言えば、俺には見えてるんだけどね。
だって空気の動きなんて簡単に感じられるもん。
ってわけで、たやすく避ける。

「ワツト？－」

なんで避けられたのか疑問つて顔して
続けるかまいたちを二連撃。
なんなくかわす。

「シット！－」

また嫉妬？かまいたちが見える俺に嫉妬してんの?
別に言葉で言わなくても。
初めて見たもん。嫉妬してる相手に対しても嫉妬！つて言つ人。
かまいたちを繰り出す動作は隙が大きい。
ここを狙うしかない。

「今度こそキル！」

切られないよ。
かまいたちに向かつて走り出し、体をひねつて避ける。
そのままの勢いで顔面をひっかく。

「ノオオオオオ！……！」

そのまま相手の頭に着地。
うお、アフロって沈むんだ。
すげー、神祕の世界だし。

アフロで思わず爪を研ぐつと爪を伸ばした。

ぶぢぶぢー

「あああああああー！……！」

あ、抜けた。

うん、抜けたわ。

華麗に地面に着地し、爪に引っ掛けた髪の毛を一瞬に落とした。

「勝者、二毛猫の口口ー！……！」

おもしろい相手だつたなあ。

結局左利きの意味つてなんだつたんだりつね。

24・なにこれ、アフロ（後書き）

この世界も右利きが多いみたいですね。
だから左利きの人は戦闘でも有利だったりするんですね、人間相手なら。

25・なにこれ、ミスつたし

「準決勝第一試合！三毛猫の口口対、白銀のイデアーーー！」

本日一試合は女の子との対決らしい。

長くない剣を片手に、白く長い髪の毛を揺らしながら俺を睨む。ちょっと・・・怖いかも。

動物の本能的に、目の奥からすごい殺氣を感じる。

「お前・・・・何者だ？」

呟くよつこ。

答えるべきかな？

なんか喋れるつてことがバレてそうだし。

「・・・人形？誰かが操っているのか？」

あれー。意外と何もわかつてないんじやん。
さすがに人形ってのはないっしょ。

「・・・かわいい」

この風貌でかわいいもの好きかあ。

まあ、俺のことをかわいいと思うなんて最高のセンスの持ち主ってことだけは確かだな。

「レディーファイトッ！ー！」

見たところ魔法剣士かな。しかも素早い攻撃を主体とする感じ。

ある意味俺と似てるかも。

イデアが何も持っていない左手を俺にむけてのばす。
やばっ！

思った瞬間、俺よりも大きなファイヤーボールが飛んでくる。
思いつきり後ろに飛び退く。
同時に俺に詰めてくる。

本当に俺と戦い方が似てる。

「ふつ」

息を吐き出しながら剣を振り下ろす。
華奢な体からは想像もつかないほどの剣速。
たぶん補助魔法で強化してるんだろう。
つか、この人全部無詠唱なんですけど。
左手が常に俺をむいてる。

足に補助をかけていても微妙。

「・・・・・思つたより速い」

ボソッと言。

君の方が思つたより速いから。

この相手に呪文なしで勝つことはたぶん不可能かも。
ああ、本当は使いたくないけど・・・。

「・・・・・決着つけるよ」

え、もう？ そんなに速攻で決めちゃうの？
つてか結構独り言多いよね？
まあ、大きいのがくるなら都合がいいかも。
左手がこっちを向いてる。

全力で俺はイデアへ詰め寄った。

「はっ！」

うお、結構大きい声も出るのね。
なにこれ、氷の魔法？
イデアを中心に氷がドームを生していく。
闘技場の観客席と完全に隔離される。
攻撃魔法とばかり思つてたから、狙いがなんのかは全くわから
ない。

「ふふつ、二人つきりだね」

あれえ、急に饒舌になつたよ？

「ほーら、ねーしゃん。いつかおいでね」

甘つたれた声で俺を手招く。

つてかここ寒いし。いろいろな意味で寒いし。

「そつちにいかないじゃ

甘つたれた声でお返し、と同時に無数のかまいたちを繰り出す。

驚きを見せた時にはすでに体に傷ができていた。
衝撃で氷のドームにひびが入る。

「え？..」

「しゃ、喋れたの・・・？」

「うん

ダメージで倒れたのか、ショックで倒れたのか、心がキュンとして倒れたのかはわかんないけど、とりあえず勝った。

氷のドームが崩れる。

下敷きにならないようこ、破片をかわす。

「なんと現れたのは三毛猫の口口の勝利！――！」

あ――

どうしよう――――！

猫缶はここで負けないといけなかつたんだつた・・・。
うわあ、うわあ、負けたことにつきないかな。

「三毛猫の口口の勝利！――！」

「うむせー。

負けさせてくれー。

決勝とかほんとに興味なかつたのに・・・。

あのキモい勇者と戦いたくないよ。

ああ、ミスつた。

25・なにこれ、ミスつたし（後書き）

イデアはただのかわいいもの好きな女の子です。
つていうかただのアホです。

そもそもこのお話の登場人物の八割くらいアホだと思います。

26・なにこれ、かつこつけめ

「うふふ、結局決勝じゃない」

半ば思い通りで気分のいいミラが俺に囁く。

「うつさい。だつてあの女の気持ち悪かつたんだもん」

「綺麗な人だつたじやん?」

「氷のドーム中で俺とじやれよつとしたんだよ? 試合を忘れて・・・

「おもしろい人じやん」

「変な人つていうんだよ」

決勝は次の日だ。

「ああ、やついえばや」

「ん?」

「なんか勇者負けてたよ」

「うえ?」

思わず口にくわえてたパンを吐き出したし。
うわあ、やまーみるー。

「常闇のゲートつて人」

「ほんと人になの?」

「知らない」

「ミラもそんなに情報持つてるわけじゃないんだね」「だつて、興味なかつたんだもん」

だつて勝つたら一位の賞品が取れないもんね。
だから情報とか極力俺には伝えないよね。
すゞい近くに敵がいたわ。

「もうわ、ビッグな優勝するからね？」

「ダメー···じやなくて」

「え？」

「いや、ダメージはもう抜けてる?って聞いたの

うわあ、無理やりまかしてきた。

無理ありすぎてちよつとひくじ。

もう狙いがバレバレなのに。

「いーい、口口~ひやんと休養して、疲れをとらなこと明日勝てる
いよ?」

「ダメージ受けてないもん」

「だから、早く寝ないとダメだよって言いつてるの」

コツンコツンと足音が聞こえる。

「やあ、こんなところにいたのか

勇者のおでましかよ。

呼んでないし。

「まさかこんな廃墟の屋敷の中で寝泊まつしてたとはね

「野良猫なんでねー」

「私は普通に泊まりたかったけどねー」

リラがベッドで寝たいという意見を取り入れた上での廃屋敷だか

「やつしょくは負けたんだって？ 勇者様」

「まあ・・・ね」

なにコイツ、なんで偉そなん。
かつしょくと言えばいいってもんじゃねえぞ。

「次の相手は気をつけた方がいい」

「なめこのケーキだつけ？」

「常闇のゲートだ。あれはもしかしたら人間じゃないかもしない」

「それじゃあ魔物つてことかしら？」

「もしかしたら・・・な」

だからかつしょくと言えばいいってもんじゃないから。

「つてかさ、勇者様弱いのね」

「ふつ、なんとも歯がゆいね」

もはや勇者の強さとかどうでもいいし。

魔物相手とかさ、ふつうに俺怪我したくないから。

つてことは怪我をしないようにしたら自然と勝つやつやつひと

だよね。

うん、それでいいや。

27 - なにこれ、闇病み止み その1

不気味な霧囲気が体にまとわりつく。

この相手と対峙した時から嫌な予感かしてならない。

「ついに決勝戦です！——体口テリアスの武神が微笑むのはどちらの選手なのか！？」

どつねでじこよ。

「三毛猫のロロー！そして常闇のゲート！両選手の入場です！－」

もう入場してましたけどね。

一
てたじのふじ
八

どんな応援じゃ。

まあ、罵声から声援に変わったのは嬉しいけど。よっぽどゲートって人が人気ないんだろうなあ。

そりき、勇者倒したやついるしね

「さあ、試合開始のゴングが鳴り響きます！」

今までの試合で一度もゴングとか鳴らなかつたから。全部あんたのうつさい声で始まつてたでしょ。

「レディーファイトッ!!」

ほひ。

ゴング鳴らないじゃん。

「ロロス」

わあい、どうやら危ない人みたいですよ！
女人なのに女人の匂いがしない。
どこか腐臭というか、物理的に感じられない匂いがある。
ゲートは手を左右に広げた。
空でも飛ぶおつもりですか。

「雷電」

一言つぶやいた。

途端に無数の電撃が俺を襲った。
無論、足には補助がかかつていたため、なんなく避けることはできた。

それにして強力な魔法をいとも簡単に使ってくれる。

「氷結」

地面が勢い良く凍つっていく。

綺麗な円を作りだしたと思ったら、凍つた地面からひびきのよう
に氷が突出してきた。

逆つらう？

俺はすでに出ていたひらりの先端を切って、そこに着地した。
なんか、全然闇の魔法を使ってこないんですけど。
なめられてる？
やっぱり猫だからって決勝でもなめられてるわけ？

「炎舞」

せつかく凍つていた地面は全て溶けてしまった。

炎が俺を包む。

あちい。

火が踊るように俺にまとわりついてくる。

それを丁寧にかわして、少しずつゲートに近付いていった。

「水砲」

まるで消防車のホースから出てる水。

勢いよく俺を追っかけまわすが、火も消してくれるし、俺には当たらないし。

まつたくもって良いところなしの魔法だった。

地面は水浸し。

だからといって移動力が落ちるわけでもない。はつきりいつて初期の状態とほぼ変わらない。

「暗灯」

ついに出た。

これが闇の魔法。

小さな黒い球体が俺の方へゅつくりと近づいてくる。

なにこれ、おそっ！

こんなん絶対当たんないじゃん。

油断して球体の接近を許してしまった。

だがそれがいけなかつた。

球体は急に大きくなり、俺を一飲みした。

あらあらあらあら、やつてもうたよ！

暗闇が見える。暗闇しか見えない。

俺の毛色が一色になつた。

そして五感が奪われた。

なにもない。

無気力だけが俺を襲う。

ああ、このまま闇に溶けたい・・・。

27・なにこれ、闇病み止み その1（後書き）

実況の声なんですが、この作品は基本的にロロの五感をたよりに書かれています。

1回戦以外、ロロは試合中に実況の声を無視していました。
なので実況の声が描写として描かれないのです。

それだけロロが集中しているのです。

ただ作者が実況の声を書くのをめんどくさがっているわけじゃありませんから！

決してそういうわけじゃありませんから！

ほ、本当にですから！

「うそだわ！」

喋つてゐるのに自分の耳に届かない。
ひんやりしてゐる氣がするけど、それともないかもしない。
なにこれ、なんにもわからぬ。
もうどうでもよくなつてへるよ。

「ゆづりや闇の世界へ」

頭に直接響く声。

「ワタシの世界。ワタシの場所。ビリバ。」

ビリバ・ビリヤねえし。

全然居心地悪いし、そもそもなんにもわからぬかい。

「君はそのままワタシの世界で永遠に生き続けるの」

断る。

なら死ぬし。

なんとなくわかつてきた。
直接頭に響く声と回じことをやつておればいいだけのことだ。

「 むづ飽きたから出るよ~」

感覚的に、自分の頭に響かせるだけじゃなく、声の相手の心を想像する。

「な、なにを？」

ああ、どうやら声が届いたみたい。

「だから、もう飽きた」

五感はないけど、思考はできる。
光の魔法なんて使ったことも見たこともないけど、なんとなく想像してみる。

「いやー。」

物理的な声じゃないけど、呪文発動には十分な合図。
目の前に光が現われ、闇が溶けるようになくなっていく。

「なんだとー？」

真っ白な視界が一瞬よぎり、そして会場の風景が戻ってきた。

「くつ」

いやあ、天才ですいませんねえ。
もう「イツには手加減しない。
魔力を貯め、集中して、相手を凝視する。

「闇円舞」

無数の漆黒の剣が俺にむかって飛んできた。

「いやー」

同時に魔法を使う。

無数の光の剣が漆黒の剣にむかって飛んでいく。
場内騒然。

猫が魔法を使つてゐるなんて誰が信じられるだろう。
全ての漆黒の剣を打ち落とし、さらに光の剣はゲートにむかつて
飛んでいく。

「ちつ」

舌打ちをしながら、片手を突き出す。

光の剣はあっさりと打ち消されてしまった。
ゲート本人が光に弱いというわけじゃないらしい。
結構頑張つて作つた魔法だつたのに・・・。

「遊びは終わりにする」

精神異常者だつてことはわかつてたけど、この展開は予想してなかつた。

服が裂けた。
巨大化した。
つてか人じゃなくなつた。
目の前には、巨人くらい大きな黒いドラゴンが姿を現わした。
終わつた。
こりや無理だ。
会場は大騒ぎ。逃げ惑う人々。

「な、なんなんだこれはああ????!!!!」

実況も意味不明。

もう大会とかそんなの関係なくなってる。

「ロロー。」

「//が飛んできた。

「手伝おうか?..」

「・・・え? やめるの?..。」

逃げる気満々だった俺に//はやめやめる気満々。

「僕も手伝うよ」

「お前はいいや」

勇者の親切を踏みこじって、俺はドリードンと対峙した。

28・なにこれ、闇病み止み その2（後書き）

忙しくて書けない日々が続いております。
ネタがなくて書けないわけじゃないです。
ほ、本当ですよ？

ゆくべつと息を吐く。

「どうやって勝つの?」

巨人戦は運で勝ったようなものだし……。

「いーい、ロロ? ブラックデラゴンの弱点は物理攻撃よ
「ふえ?」

すつとんきょうな声が出た。

いやいや、絶対嘘だね。めちゃくちゃ堅そうな皮膚してるものん。

「あの外皮の下はすべすべ柔らかいの。外皮さえ貫けば、相当なダメージを与えるはずよ」

////はふわふわ飛びながら俺にむかって両手をかざした。

「フォース!」

詠唱するやいなや、俺の髭がむずむずする。
なにこれ、髭がめっちゃ伸びたんですけど。
きもつ! アンバランスすぎでしょ。田で見える位置で髭がゅらゆ
らしててるもん。

「髭伸ばす魔法とか掛けられても……」

「大丈夫。今口の髭に触れたら私なんて真っ一つになっちゃうわ
よ」

つまり、刃の様な髪になつたわけ？

なんかさ、もつと爪とか歯とかいろいろ強化できるといひつてあつたよね？

あえて髪？ヒゲ？ひげ？

「ほり、ボーッとしてたらやられぬよー。」

見上げるとゲートの口から黒い息が漏れている。
絶対、光線がくる！

「ライトシールドー！」

勇者が俺の前に立つ。

「あんた、変身前の『こつこやられてるんでしょ？』

「ふつ、ま、いろいろと事情があるのさ」

かつこよくなえつづうの。

ゲートが首を上へあげ、勢いをつける。そして次の瞬間光線が・・
ではなく黒い霧が辺りを覆つた。

「シールドの意味ねえじやん

「・・・・・ふつ」

小さい声で今言つたし。

霧によつて全く視界がなくなつてしまつた。

右から気配がする。

瞬時に後ろに飛び退く。すると、今いた所から、地面が碎かれる
音が耳を貫いた。

「大丈夫？」

ミラの声はすぐ左側から聞こえてきた。

「フィールド・ウイングー！」

一瞬で黒い霧が晴れる。勇者が風を巻き起こしたらしい。晴れ渡った瞬間、ゲートの右腕が飛んできた。風で鼻が利かなく、音も察知するのが遅れた。

「うぐっ…」

爪が体にかかる。

それだけで血が滲んだ。

勇者のせいで、この世界に来て初めて直接ダメージ食らったし…。

「こやー。」

傷は浅いため気にせず牽制魔法を撃つ。

撃つと同時に懷に飛び込んだ。

そしてそのまま左腕の横を通った。

ズシン！

ブラックドラゴンの左腕が落ちる。

うわあ、俺の髪やべえ。

ってかミラの補助強すぎ。

だけど、動くことできずかと傷が痛む。

「ヒールポイントー！」

ミラの魔法。俺の傷がみるみる治つていぐ。
なにこれ、反則じやん。

「『めんね口口。それ代謝を良くして治す魔法だから、寿命縮まつたかも』」

半笑いで言つことじやねえじやん。

反則じやなかつたし。充分リスクあつたし。
まあ、この分なら勝てそうだね。

30・なにこれ、闇病み止み その4

翼が広がる。

漆黒の鱗を身にまとい、重そうなその体が地面から離れた。

「それはするー」

思わずつぶやく。

だって、俺は飛べないもん。

絶対あの翼は飾りだと思つてたし。

「大きいのが来そうですね」

勇者の言つこととか、もはや信頼できないから。

一際大きく翼を打つた。

どでかいがまいたちが会場全体を襲つた。

「ぐつ」

かまいたちは誰も傷つけなかつた。

「うわあ、勇者さんすごいんだねえ」

ミラが感嘆をこぼす。

見事に勇者は結界を張り、かまいたちをガードした。いい加減、上を向くのがめんどくさくなつてきた。見下されてる感じもすごく嫌だ。

「いやー」

牽制の意味を込めて、光の矢を光速で放つ。
しかし、ゲートには届かずに、ゲートの作り出した結界によつて
撃ち落とされた。

「あいつも結界とかずるくね？」

「いや、戦闘にざるいとかないでしょ」

「へえ」

ミリに教わった。

「ミリ」

「なに？」

「俺も飛びたい」

「え？」

「飛ばせてよ」

「いーーー、口口？ 猫は空を飛ばないわ」

「猫は言葉も喋らないぜ？」

「大体なんで私に言うのよ」

「だつて、補助とか得意なんでしょう？ サツキの髪とかす」 かつたじ
やん

「・・・まあ、あんなの当然だけね？ うん、できるよ。 口口を飛
ばすこととか余裕」

「うわあ、褒めたら墮ちた。

「でも、結構高度な魔法だから、ちょっと時間稼ぎしてよね

「あい」

また光の矢を放つ。

「ねえ」

「なんだい？」

「あの結界つてどうにかなんない？」

「それはなかなか難しい問題だね」

「勇者のくせにしょぼいね」

「・・・できないなんて一言も僕は言つてないよ？」

「うわあ、けなしたら墮ちた。

「ただ、遠距離ではビリにもならないから、タイミングを見計らわせてくれないか？」

「あい」

もう一本光の矢を放つ。
ゲートは大きく口を開けた。

「あ」

みんなやばいって思つたと思つ。

「いやー。」

ゲートの口から高密度の魔力が溜められていた。

そして、一気に開放する。

一直線に俺にむかって光線が飛んできた。

俺も瞬時に高密度に魔力を凝縮し、上空に向けて一気に開放した。

ドゴオオオン！――――――！

音だけは、とりあえずすこかつた。

なんとか相殺できたらしい。

予想以上に魔力を消費してしまった。

きっとあんなのをいくらでも放つてくれるんだね！

「フライングウイング！－！－！」

急に体が軽くなつた。

なにこれ、羽が生えてる。

翼じゃなくて羽。

足が地面から離れる。

「つお」

うまくバランスが取れなかつたが、なんとか尻尾を振つて、バランスを保つてみる。

「これでどう？」

ミラのどや顔に対しても大きく頷いた。
髭がまた伸びる。

その感覚を研ぎ澄まし、髭に魔力を集中させた。

一気にゲートとの距離を詰める。

ゲートは右手の爪に魔力を溜めている。

体が大きい分、動作が鈍いのが、唯一の突破口かもしれない。

「シールドファイールド！－！－！」

勇者の声が聞こえる。

しかし、なにも起こらない。

もうゲートとの距離は間近になつていた。

そのままでは相手の結界に弾き飛ばされる。

それでも行くしか道は残つてないんだから嫌になつてくる。

「二やあ……。」

一気に加速する。

ゲートが右腕を振り上げる。

無音。

そのまま俺はゲートを通り過ぎる。
ん？通り過ぎた。

「ぐおおおおお……。」

断末魔。

ゲートの叫びが闘技場に響き渡つた。
ん？

あれ？

勝つた？

30・なにこれ、闇病み止み その4（後書き）

ずいぶん間が空いてしまいました・・・。

忙しさを言い訳にはしたくないのですが・・・。

余談ですが、猫の髭は絶対に伸びたり縮んだりしちゃいけないものです。w

猫が自分の体の大きさを測るものなので、狭いところとかに入る時に役に立っている、いわゆる触角なのです。

一説には平衡感覚も含んでいるとかいないとか。

まあ、ファンタジーなので、なんでもあります。w

31・なにこれ、賞品泥棒

着地と同時に羽が消えた。

髪も元に戻った。

ものすじく息の切れたミリツと、ものすじく汗の光る勇者がそこに
はいた。

後者はすじくさきもい。

「勝つた」

一喝せざる。

「ふざけるなあ……！」

鼓膜を破るような声。

墜落したゲートは四つん這いの状態で、俺を睨みつけてくる。殺氣だけはとんでもない。空気がびりびりして、気持ち悪い。

「お前たちは……必ず後悔する」と……なるだらつ……
「…………」
「い……つか……ふくしゅ……」
「いや」

言い終わる前にどごめを刺した。

脳天に一撃。

だつてうつさいんだもん。

「結局闘技大会の勝者って誰なの？」

〃の疑問に、俺は即答した。

「そりゃもちろん俺つしょ」

「いや、僕かもしない」

お前負けたくせに何寝ぼけたことを言ひてやがる。

「意外と大穴で私がも」

参加もしどらんだる。

とにかく静まり返つた闘技場。

人は逃げても賞品は逃げなかつたらしい。

「うん、もうつていじ?」

その一言を皮切りに、俺達は欲しい賞品を手に会場を後にした。

「結局ゲートつて何者だつたんだり?」

「しらねー」

「恐らく、魔王の手先だろ?」

そりゃ そりでしょ。

そこが疑問なんじゃなくて、何が目的だつたのかつてことを聞いてるんでしょ。

「どうでもいいよ。次どー行く?」

「南に行こ?」

あれ?

さつきからだいぶおかしいことがある。

なんか、勇者がついてきてる。

なにこれ、ストーカー？

つかお前に描画されたのつておかしくね？

「南つていいかも！」

ああ、ミラがつちやつた。

もうこれは決まつちやつたよ。

そりやね、暖かいところの方がいいし、魔王との距離も離れるしね。

ちなみに賞品の分配だけビ、俺は猫缶を頂きました。

ミラは赤い魔石。

勇者は一位の旅行券。

なんで勇者が一位の賞品もつけてきてるんだじ。ちやっかりしそうだ。

「よし、僕につこういで」

むづコマイシじりむー。

3.1 - なにこれ、賞品泥棒（後書き）

作者が諸事情により、家にいなかつたため更新が大幅に遅くなつてしましました。

内容もぐだぐだでごめんなさい。

ゲートの真意とか色々謎を残してますけど、あんまり考えてないです。
・・・嘘です。たぶん。
がんばりますwww

32・なにこれ、次の町

南に行くにつれて、だんだんと暖かくなってきた。
やつぱりね、暖かいほうがいいね。

「君たち、次の町にはとても大きな湖があるんだ
なんか勇者が独り言もらしてるし。

「へえ」

//も面倒くさがり。

「その湖を渡るために船に乗るのぞ」

もはや相槌すら打たなくなつた。

「その船つていうのがまた素晴らしい。湖の景色を堪能できること
はもうろん・・・」

始まつたので、ほつとくことにする。
肉眼で町を確認できるところまで来た。
道中は順調そのもの。
おもしろいこともなにもなかつた。
つか勇者がうざかつた。いや、暑苦しかつた。

「サンベンプール」

なにこれ、くらつ！

町中が暗い雰囲気を出している。

まあ実際問題、町の雰囲気とかどうでもいいからね。俺は南に行ければそれでいいし。

湖畔の港へ行くと、人だかりができていた。

「なんで船を出してくれねえんだよ！」

つるわく品のない怒声が響く。

「申し訳ありません。申し訳ありません！」

人だかりの中心には、冴えないおっさん。

「湖に潜む魔物が活性化いたしまして、皆様を無事にお送り届けることができないです」

「っく・・・・・・」

別段腕に自信のない人たちのようで、みんな散々になる。

「僕たちが倒すといふのはどうかな？」

「えー、めんどこ」

とりあえず勇者の提案を即却下する。

「あー！猫さん！」

突然、後ろの方から女の子の声が聞こえた。

「ひっそしふりー」

その女の子は、俺がこの世界にきてオーケーションに突き出した商人の親子の娘だ。

「私リュカだよ。覚えてる?
「まあ、そりや」

そりや覚えてますよ。名前は覚えてなかつたけど。

「ねえ、湖渡りたいの?」「やあ、レディー。口口くんの知り合いかい?」「お前は黙つとけ」「わあ、かつこいいねこの人。猫さんは口口つて名前になつたんだ?」「まあ」「ねえ、商談しましょ?」

さすがは商人の娘。挨拶とお世辞の次に出でくる言葉は商いの話だ。

「私たちの船の護衛を依頼したいの」「俺に?」「そつちのかつこいい人が強そつなんだもの。猫さんはなにもしないでいいわよ」

そうですよね。所詮猫ですもんね。

「報酬はきちんと払うわ」

「僕の力を必要としてゐのなら、断る理由はないね」

はいはい、その気になつちゃつたね。

「さあ、みんな！船に乗り込むんだ！」

ついあえず一泊してから行く」と云ひ。

33・なにこれ、空氣読め

やべー。

船酔いしたわあ。

町で一泊し、夜明けと共に出港した。

船はゆらゆら揺れて、湖をゆっくりと前進していた。

「つまー」

猫つて船酔いするんだね。

乗つたことないから初めて知つたし。

「口口だいじょぶ?」

ミラが心配してくれる。

心配してくれるなら、治る魔法をかけてくれ。

向こう側では、リュカと勇者が雑談している。

「へえ、お兄さんつて勇者なんだあ」

「ははつ、まあね。僕にかかれば大抵の魔物は相手じゃないぞ」

「大した魔物にや負けてたけどね」

ボソッと付け足してあげる。

「南の王都つて、魔法都市ソルビートールでしょ？商売の匂いがするのよね」

「その通りだよ。魔法の研究では大陸随一と言われているんだ」

「意外と生活必需品とかが足りてなかつたりするのよね」

「高貴な魔法使いたちが優雅に暮らしているからね」

なんとなく会話が噛み合つてないし。
まあ、どうでもいいけどね。
とにかく思つうことが一つある。

「全然安全じゃん」

船が出港してから数時間、何かが起つたの気配が何もしない。

「ナニコレ」と言つてると出でてくるのよ、なにかが・・・」

「//の一晩に、思わず納得してしまい、生睡をゴクリと飲んでしまひ。

「またまたそういうこと言わないでよ//リウ たり」

あははは、と笑つてると勇者が船の後ろの方を見て静かに言つた。

「やうやく、そんなことを話しているから、ほら、船の後ろに巨大なタコがくつついでいるじゃないか」

わあ、ほんとだー。大きなタコだねー。珍しいねー。おいしいのかなー。

つて、なんでそんなに落ち着いていられるのこの勇者！
タコにしがみつかれた船が大きく揺れた。木が軋む音がする。

「ねえ、この船がもしも壊れたら、もちろん湖に落とされて、もちろん泳がないといけなくなるんだよね？」

「そりゃそうよ。まあ私は飛べるけどね」

「…………俺ヤ、泳げないんだよねー」

もつ笑えません。

「ふむ、安心したまえ」

お、なんか勇者が誇らしげだわ。

なんか泳げるようになるような魔法でもあるのかな。

「僕も泳げな」のや」

ダメだつたー。

やつぱりコイツはダメだつたんだね。
少しでも期待した俺がむしろ悪かつたよ。

今は泳げない同盟とか組んでる場合じやないから。
空氣読めよー」のタマ勇士めー。

「とにかくヤ、このタマをゼリヒテかしようー。あ、勇者の」とじやないからね

半ば涙田で俺は船のブリッジを後ろへ走った。

33・なにこれ、空氣読め（後書き）

勇者のウザさに書いててイラだつてたりwww

とにかく執筆時間がほしいです。

こんなに秋が忙しくなるとは思つてなかつた作者でした。

34・なにこれ、タツ勇者 その1

そもそもを、根本的なことを言ひやがうよ？

タツって海の生き物じゃね？

これって言葉にしていいのかな。

これ言って、そこには言わない約束だろ？がつて空氣になつたらどうしよう。

「どうしたのロロ？」

ミラが何かを察した。

そんなに考え込んだ顔してたんかなあ。

まあ、気になることだから一応言つかな。

「いや、大したことじやないんだけど・・・」

「じゃあ今はいいよね」

切り出したのに、切り出し方をミスった。

気にしたら負けなの？ そうなの？

ぐらぐら揺れる船と俺の心が悲鳴をあげている。

「水には電氣系の魔法がセオリー や。僕の魔法で仕留めてみせるよ」

勇者がいきり始めた。

俺はね、この後、どうにう結果になるのか知ってるよ。

「ライジングサン！」

魔法の名前に電氣関係なかつたし。

え、あ、もしかして、雷神と掛けてるの？むしろ、ある意味で高
度な魔法だよね。

電気を凝縮したような球状の光がタコに直撃する。
そして、大方の予想通り、ほとんどダメージがなかつた。

「ふつ、さすがだな」

もうスルーするね。

とりあえず電気系はマイマイみたいだから、別の魔法でいい。

「いやー！」

先の闘技大会で覚えた光の矢を雨のように降らせる。
タコの体に矢が接触した瞬間、魔法が粉々に消え去つた。
魔法がきらめきながら分解されている。
厳密にいうなら、接触する直前で分解されている。
もしかしたらこのタコには魔法が効かないのかも。

「魔法が・・・」

そう言つただけでミリヤには伝わつたようだ。
俺の方を見て口クリと頷いた。

「光もダメなら、炎で焼きタコにしてあげようー！」

タコ勇者は気付いてないらしい。
なんか必死になつて火の魔法を放ちまくつてゐる。
全部効いてないけどね。

「チャージー！」

ミラが俺に魔法を掛けてくれる。

ミラはサポート魔法の専門だけあって、俺が自分に掛ける補助よりも効果が数段高い。

これで身体能力が抜群に上がったはず。

「ファイヤーストーム！！」

うわあ・・・・せっかく肉弾戦しようと思ったのに、火の渦がタコを囲んでて、むしろ俺が近づけない事態になってるし。

「このタコ勇者！いい加減気付け！にゃ！」

思わず叫び、湖の水を操つて鎮火させた。

誰でもいいから、この味方か敵かわからんタコ勇者をどつかにやつてくれ。

34・なにこれ、タ「勇者」その一（後書き）

時間をください。

家に帰つてパソコンを開く元気すら、最近は失せてきましたw

35・なにこれ、タマ勇者 その2

まざはるの船中にへばりつこむ足をなんとかしないこと。
髪を伸ばす作戦もいいけど、船！」と切りかげりぬごどくせこか
ら・・・どうしよ。

「ロロー！前足を強化したから、手刀で切っちゃえ」

手刀ってなんですか？

この短い手足でどうやって切ればいいと？
まあ、どうせ策とかないから、やってみるしかないかも。
タマは特に動くでもなく、船をギシギシと縛りこんでいつていう。
タマ勇者は腕を組んで何かを考えているようだ。
チャンスは今しかない。

「にやー！」

魔法じゃないけど、気合いが入って声が出ちゃった。
なにこれ、切れたし。

タマの足の太さよりも絶対短いはずの前足で、切れちゃったし。

「そつかーみんな聞いてくれー！」

勇者が騒ぎ始めた。

タマも痛かったようで、攻撃態勢に移りつつしている。

「このタマは魔法が効かないんだ！」

ええーー今氣付いたよ、このタマ勇者。

どんなすごい策を練つてゐるんだかと思つてたら、ものすげ
初步的なところで立ち止まつてたし。

「ソレは僕の剣技が試されるところだねー。」

誰も期待しないから。

そんな勇者にタコからの一撃。
長い足を鞭のようにしならせ、勇者を襲つた。

「どうー。」

あれ？予想外の展開だし。

てつきりこの一撃で勇者は天に召されるものだと思つてたけど。。。

相手の攻撃の力を利用して、見事に足を切り落としてた。

「はははははっ」

得意げな勇者をよそに、俺は俺でタコの攻撃をかわして体勢を整
えていた。

勇者つて南のすついで魔法が盛んなところ出身だったよね？
なんで剣技の方がすごいわけ。

普通に考えておかしいでしょ。

そんなことを考へてゐるうちに、タコが動きだした。

いつたん船から離れようとしているらしい。

その様子にも関わらず、吸盤が船の鉄の部分に張りついてやつて、自力で取れない様子だった。

「なんか・・・かわいい」

ミラが戦意を失つた。

「でもタコだよ？」

そして、勇者が吸盤がくつついたままの足を笑いながら切り落とした。

やつてることが勇者じゃなかつた。

そこは離れるまで待つてあげるのが紳士でしきゅうに。

ただ、剣技が強いのだけは認めてあげようと思ひつ。

それにもかか様子がおかしいよつに感じじる。

このタコ、もしかして……。

35・なにこれ、タ「勇者」その2（後書き）

日本には、湖にタ「勇」がいるところがあります。
それは浜名湖といつ海につながっている湖なのです。
いやあ、毎度のごとく勉強不足でしたw

36・なにこれ、タマ勇者 その3

どういうわけか、タマはタマ自身の身を守る以外で、攻撃をしてこなかつた。

「//ア、」の進路の先に何があるんじやない？」

思ったことを//アに伝える。

「例えば？」

「なんかすっぽり怪獣とか」

「タマも十分怪獣だけどね」

「獸じやないじやん？」

「口口も十分怪獣だと思つわよ？」

「あれえそれは力チンとくるなあ」

「んー？なにかまちがつた？」

「俺からしたら妖精だつて十分怪獣だよ」

「そういうこと言つちゃうんだあ」

なにこれ、ケンカになつたし。

「君たち！今がチャンスだ！」

君たちって俺たちのこと？

調子に乗つてんじやねえぞタマ勇者が。
今はそれ所じやねえんだよ！」

「いやー。」

完全にタコを敵視し、さらに俺たちの「ことかなんにも見てない勇者に、俺は電撃を食らわせた。

俺から攻撃を受けるなんて微塵も思っていなかつた勇者は、あっけなく電撃で気絶してしまつた。

「つるさいのが減つた」

「勇者ダサい」

勇者のおかげでなんか仲直りができた。

ありがとう、君は忘れない。名前忘れたけど

タコは相変わらず船の進路を妨げるようにな、水中に君臨した。

「タコー、大丈夫だから！」

なんの根拠もない。

何があるのかだつて知らない。
でもそう言つてみた。

俺たちはこんなとこひで足止めをくらつてゐるわけにはいかないんだ。

なぜなら足止めくらつて、せつかく戦闘に集中してて醒めてた船
酔いが再発したら嫌だもん。

「たのむー！タコーー！」

もはや目的は違つけどそんなの関係ねえ。

自分の身が一番可愛いよ、そりや。

だつて猫だもん。

全然動こうとしないタコにだんだんイライラしてきた。

「ほら、もういこつてばそういうの。空氣読んで」

意味わかんないって顔してゐる。顔とかよくわかんないけど。
しょうがないなあ。

「どうえー！」

大声で怒鳴つた。特大の殺氣と一緒に。
すると、タロは心配そうな雰囲気を漂わせながら、しぶしぶ進路
を空けてくれた。

「ありがと」

「この湖の先に一体何があるといふんだり?」
とんでもないモンスターがいるのか、それともとんでもない悪党
のアジトがあるのか。
はつきし言つてじつでもいいから、早く船から降りたい。
タロ勇者もあんぐりこの電撃でこいつまで寝てるんだ。早く起きろ
し。

タ」「ヒタ」顎者が「」とかや「」とかや「」になつて読みにくくなりますね。「」あんなれこ。

あー、この後どんな恐怖が待ってるか想像できませんw

37・なにこれ、エンドレスバトル？ 猫編

港が見えた。

何の変哲もない港だ。

ただ、一つだけおかしさがある。

「人がいないね」

ミラの言葉にみんな静かに頷いた。
なにこれ、すっからかん。

虚無にさらされた町は、それなのにどこか生活感が残ってる。
ゆつくつと歩く。町の中に入れば入るほど、俺はその変化に気がついた。

「！」の痕つて……

つぶやき、視線の先にあるものは、なにかの爪跡だった。
建物の外壁がえぐられてる。

「ドランのようだね」

どうやら勇者も起きて追いついてきたようだ。いらないのに。
大小の傷跡が町の中心に刻まれていた。

はっきり言う、来るんじゃなかつた。
なんでタコが止めてたかわかつたし。
ほら、もういいしょ。タネもわかつたんだし、帰ろつ？

「これはどうにかして解決しないと」

勇者黙れ。

「へへへへへ・・・」

建物の上に黒い影がある。薄気味悪い笑い声は確実にあいつからだ。

「また懲りもせぬやつてきたか。使えないタコだなあ

タコの知り合ひ?」

「お前の仕業か?！」

勇者が声を荒げる。

「やうだ・・・と言つたら?」

「ホーリーフィールド!」

容赦のない勇者の一撃が飛び出した。
珍しくかつこつけている様子はない。

しかし、先制弾は簡単にかわされてしまった。

「ねえ、もしかしてタコひてあなたの・・・」

ミリの言葉の先は言われなくてもわかった。
故郷つことでしょ、勇者の。
もう誰もいないじやん。

「怖いねえ、へへへへへ

まだ敵が一人とは限らない。
盗賊の類である可能性もある。

「しょうがない、いでよービッグキャット！」

何かのカードを掲げたと思ったら、俺たちの目の前に[5匹]のモンスターが降り立つた。

しかも俺と同類。
身体は俺の10倍はあるかも。

「これは召喚魔法？！しかも事前の仕込みありって・・・やっぱない？」

もしかして、まさかのエンドレスバトル突入ですか？

うん、無理。

ほら、まだ間に合づから帰ろ！

「ホーリークロス！」

地面から光の槍が飛び出し、すべてのでかい猫に突き刺さった。
そして追い討ちで光の矢が猫に刺さった。

呪文の名前どおり、まるで十字架のような魔法。

今までの勇者とは到底思えない。容赦のなさも半端ない。
もしかして、全部勇者がやつてくれるんじゃね？

カードに何が書かれているのかはわかんない。
ただ、頭さえも覆い隠しているフード付きのローブを着ている男
はくくくと笑つてモンスターを召喚した。

「次は・・・豚の巨人？」

「オーラクよ」

知らないよ固有名詞とか。

なんとか隙を見つけて、召喚している男を叩けば問題ないはずなんだけど。

いくらなんでも数が多く。

ぱつと見ただけで20はいるじやん。

「ホーリースラッシュユー！」

勇者は剣に光の魔法を掛けて、得意の剣技で切り裂いていく。
強い。その一言だ。今までの勇者が嘘のようだ。
でも動きが良すぎて逆にきもい。

いや、元々きもじから更に磨きがかかってる。

「何が目的なんだ？！」

男にむけて叫ぶ。

口元だけが見える男は、にやにや笑いながら何も答えなかつた。
俺が思うに、実は大した目的とかないんだと思ひ。
見た目が下品だし、どう見ても盗賊に墮ちた魔導士でしょ。
南の国は魔法の盛んな国って言ってたし、どうせ落ちこぼれだよ。

「町の人たちはどうした？！」

「ぎゃーぎゃーうるさい男だな」

「どうしたと聞いている！」

ぶんつと振るつた剣からは斬撃が光を帯びてオーラを貫通する。そして一直線に魔導士の元へ、しかし魔導士に届く直前で焼き消されてしまう。

落ちこぼれでもなかなかのものだ。

「マジックキャンセラー？」

「なにそれ？」

ミラが難しそうな単語を呟いた。

「その魔法と反対の魔法を使って相殺する技術のことよ」

「へえ」

難しそうだね。よくわかんないし。
でもこれができたら便利そうだね。

「光と闇は本来同等の力を秘めてるの。だからこそ、光が2で闇が1の魔法がぶつかった時、光が4で闇が2に膨れ上がる。つまりこの例で言うと倍のダメージになるの。逆に闇が2だったら闇が4になる。そういう関係なのよ。だから特に光と闇の魔法を相殺するのはすごく纖細で難しい技術なの。ちなみに結界魔法とはまた別の技術よ」

ミラの魔法講座でしたー。

なんとなくわかったけど・・・。

どうやって同等の魔法、魔力って見極めるのや。

俺が思案投首していると、にやにやしていた男が口を開いた。

「へへへ、なかなかやる。町の人だったな・・・もちろん男は労働。
女、子供は・・・ひひひ

「下衆がつ！」

盗賊なんてろくなもんじやない。だつて賊だもんね。

欲望に忠実なのもいいけど、俺みたいに理性を持つて行動しない
とダメだよ。

猫に言われたかねえと思つたどな。

オーラの力はなかなかのもので、攻撃を避けるたびに背後の壁や
地面にヒビが入る。

俺に攻撃が当たつたら、あっさりやられりやうんだろ
うなあ。

「ここやー！」

もちろんそういうやうに、先制攻撃を意識する。

以前戦つた巨人の方が5倍は強かつたからね。今の俺には余裕だ
が。

〃〃の補助もあるしね。

「くたばれ豚野郎」

決め台詞を吐き捨てて、それと同時にオーラを全滅させた。
息もつかずに男に攻撃をと想つたが、すでに次のカードを掲げて
いた。

「さーい。

このままだとこいつの体力が先に死んでしまうよ。

さすがの勇者も息があがつてきている。
どうにか策を考えないと。

38・なにこれ、エンドレスバトル？ 豚編（後書き）

やたら長い魔法の説明をしちゃいましたね。
わかりにくかつたら書き直しますw

39・なにこれ、ハンドレスバトル？ 鳥編

空中戦は嫌いだ。

俺自身が飛べないし、魔法も当たりにくいから。
つてか降りてこいし。

「君たちがどこまで保つかな」

それなりに高度な魔法使いつてのは認めるから、一発殴らせる。
不細工なトンビに似た鳥の魔物たちがギャー・ギャー・うるさい中、
俺は男に向かつて魔法をぶつける。

別に驚きはしなかつたが、なんとも下衆な方法で男は防御をとつ
た。

飛んでる鳥が魔法に体当たりしたのだ。

「口口君ー。ひょっと時間を稼いでくれないか？」

勇者が俺を呼ぶ。どうやら一際大きな魔法を使おうとしている様
子だ。

なんで俺が勇者の言いなりにならなきやいけないわけ？

「無理」

「二文字で一蹴。勝手にがんばれ。

あくまでも勇者には厳しくするよ。

飛んでる鳥には追尾性のある魔法が有効だ。
あいつらは大して防御に優れていない。

「いやー。」

ここは港。水はいくらでもある。

俺は自分の体の周りに水の矢をたくさん作って、自動追尾で鳥たちを一斉攻撃した。

ぱつさばつさと落ちていく。

しかし今まで通り、男がカードを掲げるだけで鳥たちがぞわぞわ現れる。

よし、俺もちょっと難しい魔法を使ってみよう。

水を額の前に濃縮させて一点に集める。直径1センチ程度の水の玉はだんだん鋭く細く形を変えていく。前に巨人戦でやったウォーターカッターの応用だ。あの時は巨大な魔法だったから雑にコントロールしても大丈夫だったが、今回はめっちゃ小さく纏めるから、ものすごい精度のコントロールが必要なのだ。

「ん~にゃーー！」

糸のように細く鋭いウォーターカッターが男にむかっていく。また搔き消されるだろうか。

光の速さレベルで放ったカッターに、男は瞬時に身を翻したが一瞬遅かった。

男の右手と持っていたカードを貫通したのだ。

「っくーーー！」

カードが撃ち抜かれたことで、そこら中を飛び回っていた鳥たちが一瞬にして消えた。

悔しそうで悲痛の表情を浮かべた男は、左手でカードを取り出した。

しかし、次の瞬間だった。

俺がカッターを使ってから2秒程度しかたっていない。

本当に瞬間瞬間の出来事だった。

「ヘブンスレイン！！」

勇者が叫んだ。

同時に光の雨が降り始めた。

男がカードで召喚した次の魔物はワイバーンだった。しかし、その姿を現したのはコンマ3秒程度。全てが光の雨によつて消されてしまった。

「うぐおお

男にも例外なく雨が当たる。

「これは・・・天空魔方陣？」

//リガツブヤク。

はい、でました。また難しそうな名前の魔法。

「ほり口口、空を見て！」

言われて見上げると、巨大な光の魔方陣が空を覆っていた。

これが天空魔方陣？

なにこれ、でかすぎるんですけど。

「はあはあ

勇者の息がマックスにあがつてゐる。しかも鳥に攻撃されて傷だらけ。

うん、ごめんな。俺のせいだよね。

「く・・・くせうーお、お、おれが負けるなんて・・・」

『ひやり生きていた男が四つん這いになつて、立てないでいた。

「盗賊のアジトを教える」

勇者が近付き、男の胸ぐらをつかんだ。

「ははは、誰が言つかよ・・・ぐふつ」

うわあ、痛そう。今、全力で殴られたよ。

なんか、その後ボツコボコに殴られた男はよつやくアジトの場所を吐いた。もはや顔の原型とか残つてなかつたし。

勇者こえー。

つてかアジト行くの?

嫌とか言つても大丈夫な空氣?・・・じゃないですよね。うん、わかつてるよ。ほひ、お宝とかもらえるかもしれないしね。前向きにいこうね。

「ね」

なんとなくそれだけつぶやいて歩を出した。

40・なにこれ、みんなの洞窟

俺つて、あんまり常識とか知らないからなんとも言えないんだけど。

アジトって大体洞窟で合ってる？

つて聞けない。

なんか恥ずかしくて聞けない。

でも目の前にあるのは紛れもなく洞窟で、紛れもなく盗賊のアジトなんだって。

「ベタだよね」

その言葉を待つてました！さすがはミリト。

洞窟の中は明かりが付いてて、どこにトラップがあるかわからぬい奇妙な感じだ。

っていうかさ、ちょっと地面がぬちゃぬちゃしてるんですけど。水分多すぎるとコレ。

崩れちゃったりとかしないよね。

あ、そういうえば盗賊相手なんだつけ。

これはまさか・・・。

「お宝はさ・・・」

言いかけた瞬間に俺の頭上を矢が通り抜けた。

もうちょっと体が大きかつたら刺さってたよね。
良かつた猫で。

「今のは足を狙った矢だね。侵入者は逃がさないらしい」

勇者の解説に、俺の場合は頭に刺さるよって言いたかったけどめんどいからやめた。

今のは一体何が原因でトラップが発動されたのかわかないし。どろどろな洞窟は、殺伐としてて先が長そう。

「つてか誰もいないじゃん」

進めども進めども人の気配がしない。

「騙されたんじゃない?」

勇者の表情は変わらない。ここだといつ確信があるみたいに頑なな表情。

広場に出た。

あれ、なんかこの部屋気持ち悪いんだけど。

「壁が・・・動いてない?」

「//も気付いているようだ。
なにこれ、酔いそう。

「これはモンスターだ!」

「土のモンスター?」

返答ないけどきっとそうなんだね。

土つていうか泥?

物理攻撃とか絶対効かなさそうで笑える。

なんか最近戦つてばっかりじゃない?

俺はお前らと違つて体ちっちゃいんだから、疲れるんですけど。

「勇者！がんばれ！」

それだけ言って、俺は地面にペとつとお尻をつけた。お尻が泥まみれになる。

剣を抜く勇者。

いや、絶対に剣は通用しないでしょ。

勇者は剣を両手で逆手に持ち、おもこつきり地面に突き刺した。そしてミラが呪文を唱える。

「ヒアリアル！」

泥まみれのお尻が少しだけ浮く。

「なにこれ」

「サンダー・ボルト！」

勇者の魔法が地面から壁へとビリビリ電撃が伝づ。土のモンスターに電気は効かないのがセオリーって以前ミラに教わったことがあるけど。

「泥だから水分をたくさん含んでるでしょ？だから電気の魔法が有効なのよ」

といつゝいらっしゃい。

つていうか勇者とミラが無言で分かり合つてる感じがちょっとむかつぐ。

「体浮かす魔法は難しいんじゃないの？」

「ちょっとだけの浮遊なら集団でも簡単なのよ。闘技場での魔法は自在に飛び回る魔法だから高難易度だったわけよ」

そういうものなのか。
ならお尻が汚れる前にかけてもらいたかったな。

40・なにこれ、やがての洞窟（後書き）

ずいぶんと期間があいてしまいました。

忙しいのでかんべんです。

少しずつですが、ちゃんと連載は続けるのよろしくお願いします

！

41・なにこれ、盗賊のお尻

こんなモンスターのいる洞窟に、人とかいるもんなのかな。
どろどろの洞窟は続く。

ねちよねちよと足音が気持ち悪い。

また開けた場所に出た。

「いじは・・・」

集合住宅的な香り。
人の気配が確実にある。

「どうやらお客人のようだな」

現れたのはボロボロの服を着た人間だった。

「お前が盗賊の頭か?」

勇者の質問にボロ人間のおっさんは頷いた。

「そう、わしがルントネ盗賊団の頭だ」

「んとね? とんねる?」

「町人はどうした?」

「そりが、あの魔術師は敗れたのか。ふん、使えない下衆だったか

今度は質問に答えない。

あ、おっさんのズボン破れてるじゃん。

「どうしたと聞いている。」

勇者の荒々しい声が洞窟内で反響した。

おっさんズボン、後ろから見たらお尻丸出しだし。
なにこれ、ぽろり。

「そう、うるさい声で喚くな。別に殺してはおりど。ちよつとばか
り働いてもらひてるだけだ」

そう言つて洞窟の奥を指差した。

つていつかさつきから俺の存在が完全に無視されてるよね。
歩き回ってるんだけど、見向きもしてもらえないもん。

「トンネルを掘らせていろだけだ。逃げないよつて魔物で道をふさ
がせてもらひたがな」

そつさんの泥のモンスターのことひっこ。

奥に行つちやおうかな。

「このトンネルの先には王都につながる。つまり交通の要になら
だよ」

「

でも奥の方なんか不気味だな。
せつぱりやめようかな。

「そうしたら交通量をとるだけで、なにもしないで生活できるじゅ
ねえか。これでわしも盗賊家業とめざしまつてわけだ」

「せつぱり行ってみよ」

頭が良いらしいおっさんの話つまんないしね。
俺が奥に歩き出すと、ミラがついてきた。

「ちょっと、行っちゃっていいの？」

「え、いいでしょ？ だつて勇者がなんとかしてくれる」

ミラを頭に乗せ、奥に突き進むと、土を掘る音や人の疲れた息遣いが聞こえてきた。

「おらー！ 働けカスがつー！」

働いてる人と管理してゐる人がいる。
これが奴隸つてやつ？ 初めて見たわ。

「ん？ なんだこの猫は」

管理をしてゐる人が、俺を見るなり近付いてきた。
気持ち悪いから倒そうと思つんだけど。

「いい？」

「うん」

ミラに確認をとつて、管理人に飛びついた。

「いやー！」

顔面に小さな火の玉をぶつける。

「ああああちちちちちーーー！」

なんて言つてるのかもわかんない。

その声に、他の管理人たちが集まつてきた。管理人つていうかただの盗賊の下つ端だよね。

「ちょうどいい練習台かも」

さつき鳥相手にやつてみた自動追尾の水の矢の精度をあげるチャンスだ。

ここぞで水分豊富だしね。

「いや！」

水の矢が盗賊たちを襲い、十秒もたたないうちに沈黙になつた。それを見た労働者どもがざわつきはじめる。これつて、めんどいパターンのやつ？

42・なにこれ、幻のお尻 その1

「おー、今あの猫……」

魔法を使う猫って騒がれるのか……。
すゞくめんぢこよ。

「……の上にいる妖精が魔法でやつつけたなー。」

はい、しましたー。
ひういうパターーん！
どうせ俺はただの猫ですよ。
どうせめんぢことか言いいつつ期待してましたよ。

「すげーぜ。妖精すげーぜ」

もう知らない。戻るつ。
ざわつく奴隸たちをシカトし、俺は来た道を戻った。
あれ？

「へり……」

あれはーなんといい光景！

「ふふふ、そんなもんかな？」

勇者がどうぞの地面に膝をついている。

勇者の田の前に仁王立ちする盗賊の頭のおっちゃん。

「もうちょっと楽しめたと思つたのじゃが・・・」
「元気まだ切り札もあるつてこいつの」

相変わらずお尻丸出しで言われてもなんにもかっこよくな。つていうかお尻丸出しに負ける勇者とかある意味伝説に名を刻んだでしょ。

「あれかな。さつきの戦いで消耗してたとかかな」

ミラのフォローが優しそう。

消耗してようが、元氣だらうが、お尻丸出しに負けちやプライドとかズタボロでしょ。

「奥の方が騒がしいな。奴隸どもはちやんと働いてるんじやろな?」

俺の方を向くおつせん。

「ん? 猫?」

あれ?今まで俺の存在って本当に気付かれてなかつたのかな?
見てみぬフリとかじゃなくて?
そつか。

「いやー!」

水の矢を一閃。

「おつせん」

確かにおつせんを貫通した。俺の肉眼で見たんだから間違いない。

しかしそこに立つてこのおつさんばかりも傷がなく、不思議でうごしている。

「おーおーあぶねえな。とんだ猫がいたもんだな

なにこれ、よゆーなのムカつく。
確かに当たった。
でも無傷。
じゃあ当たつてない？

「そりゃ、俺がその飼い主を傷つけたことを怒ってるんだな

ちげーし。

俺が勇者の飼い猫とか冗談はやめてください。

冗談はお尻だけにしてください。

「いやー！」

今度はおつさんを八方から水の矢で撃つ。
避ける場所は上しかない。
しかしおつさんは避けなかつた。

「だから、あぶねえだろ？がよ」

なんで無傷なの？

あれ、これって結構強い人じゃん。

「この猫・・・使えるな」

だろうな。そう、俺は使えるんだよ。

ただ、今はそんなことほどどうでもいい。

このおっさんができる魔術で攻撃を避けてるのかを考えないと。

「//ハージュ……かな」

ボソッと呟く//リツを見る。

なにそれ？って顔をしてみる。

「幻影っていうか、虚像っていうか……なんてことんだろ」

がんばって説明しようとしたけれどありがと。わかったよ・・・たぶん。

42・なにこれ、幻のお尻 ゼリー（後書き）

お尻を「ごつ押しドリ」めんなさい。

でも、よく考えてみましょう。

お尻丸出しの人とジャンケンして負けた時の悔しさを。

43・なにこれ、幻のお尻 その2

//ラージュってあれだよね。

//ラの「シクネームとかでしょ。//ラージュって呼ばれたいんでしょ。

おっさんには聞こえないくらいの声で俺が//ラと並ぶ。

「//ラの新しいシク」

「つまり、実物はそこにはないってこと

「ですよね」

やつーまことにそれを言いたかった。

「それか高速で動く」とによる残像の可能性も・・・ん?私のシク?

「え?ちげえし。//ラに肉球ないのがかわいそつだから新しいの買えばいいのについて思つただけだよ」

もはや無反応だった。その方が俺も助かる。

それが幻なのか、実物なのかわかれば勝てるつてことだよね。

「なんか危険な猫じゃな。上にいる妖精も怪しいしな

気付くとおっさんの気配は俺の真後ろにあった。

咄嗟に前に飛び出す。

刹那のタイミングで、剣が地面にバシャーンと振り落とされた。

「あぶなっ!」

俺は空中で姿勢を反転させ、おつせたに向を直る。

一つだけ作戦がある。

虚像だと残像だとかよくわかんないけど、幻かどうかを判断するのなんて簡単だ。

それは匂い！

って本当はかつこよべ言いたいんだけど、泥の地面でほととぎ匂いの区別ができない。

そんなことで諦める俺じやなにカズ。

おっさんこくつつけばこじやん。飛び掛つて、掘めれば実物でしょ。

「ちよこまかと動くな。しかも今あぶなつて言つたじやん。本格的にやばい猫じやな」

着地と同時に視覚で見えてるおっさんに思いつきつ飛び掛る。おっさんは不動。

もひつた！

「がはははは」

盛大に笑われてしまった。

俺はおっさんに突つ込んだつもりだったのに、それを見事にすり抜けでドロドロの地面にダイブしてしまったのだ。

もうぐらうぐらう。

三毛の由こ部分が茶色になつて一毛になつてゐる。

「甘こ甘こ。考えが浅はかじや」

こよこよもつてこのおっさんが憎らしくなつてきた。

おっさんは相変わらず一瞬で気配が移動する。

「//リ・・・これって」

「うん、テレポーテーションと//リージョのコ-ジンマジックかも」

「ゆ、ゆに？・・・つまり呑わせ技ってことでしょう。

わかんないから無駄にかつこよく言つのはやめでもらいたい。

数メートルを一瞬で移動する魔法をテレポーテーションといちらし。以前ミラに教えてもらつたことがある。自分のいた位置に//リージュで幻を置き、自分は別の場所に移動するというトリックかもしれない。

「テレポの弱点って・・・」

「連續使用が難しい」とかな

数秒間隔でしか使えない魔法ってことか。

でもこのおっさん、無詠唱で一つの魔法を一瞬でやるなんて相当なつわものだわ。

さつきの感じだと、間隔は十秒以内。

つまりもつと狭い間隔で連續攻撃をしなければいいんだ！

「よし。猫の額ひたいぐらい狭い間隔で攻撃するねー」

「やべー！思わず博識などが出た！」

「へへ、うん。ちょっと使い方間違ってるけど」

43・なにこれ、幻のお尻 その2（後書き）

猫の額・・・場所の狭さを示す言葉ですね。時間とかに適用される
かどうかは知りませんが、一般的に言わないと私はいますw
なんか今回ボケが雑かも。
あ、いつものことでした！

44・なにこれ、幻のお尻 その3

第一に氣をつかむ」とは間合い。

猫の俺の間合ことおつわんの間合いでは差がありますがね。

「いやー。」

水の矢を四方から放つ。
おっさんは躊躇わずにテレポートで移動。
ここまでは計算通り。
でも、次を予想していなかつた。
・・・そりや、どこにテレポートするかなんて予想できないでしょ。

間髪入れず攻撃しようと思つたんだけど・・・。
俺の間合いの外、おっさんの間合いの中にテレポートとかするく
ない?

咄嗟に振り下ろされる剣を避け、体勢を整える。

「どうじゃ? 攻撃が当たらなくてイライラしてきたかの?」

そりそろあの口調がつかなくなってきたのは俺だけか?
なんでお尻丸出しの奴に小バカにされなきゃならぬいの。
しかも俺の白い毛を汚しやがつて・・・。

「//ア、ひとつ提案があるんだけど」

もうこいつなつたらぶつ殺す。

おっさんが、なにこれ勝てない! って表情になるまで叩きのめす
わ。

「え・・・それは・・・できない」とはないけれど

ミラの困惑した表情なんかはや田に付かない。
俺は勇者のところに行き、顔をひっかいた。

「いたつ！――な、なにをするんだい！？」

「ミラの指示に従えタコ勇者」

怒りが頂点に達した俺は、もう腹をくくる。

「おいおいなんじゃ、逃げかけまつのかい？」

おっさんはやれやれといった表情。

へつ、今に見てろよ尻出しオヤジめ。

「ここも！」

小さな水の矢を自分の周り数百と作る。

そして十本ずつおっさんに放つ。

ことあることに、テレポートで逃げられる。

わかつているのに、ミラージュで相手がダメージを受けている錯覚に陥る。

その油断から瞬時に間合いに入られて攻撃を受けそうになる。

これがいけなかつたんだよね。

当たつてないと最初から思つていれば、間髪いれずに攻撃を仕掛けられる。

「いやー」「くつー」「くつー」

連続攻撃を仕掛けてから、三回目のテレポートがようやく失敗に終わった。

だけど、小さく威力の弱い水の矢では大したダメージは負わせることができない。

「やるなあ。じゃがこんな子供騙し程度の威力じゃワシには勝てないぞ」

知つとるわ。

もちろんこれは時間稼ぎ。さすがの天才な俺だって、通常以上の威力を維持した状態の矢なんて、大量に作れないもん。

「おっさん！ お尻出でますよ！」

「ファッションじゃボケ猫！」

ファッションって言わねえよ！

そういうの変態つていうんだよ！

「いや……」

赤い光が洞窟の空間を包む。

「な、なんじや！？」

同時に爆発する。

洞窟の中で爆発とか自殺行為だよね。

まあ、もちろん俺は死ぬつもりなんて決してないんだけど。

「ぐつ……！」

大量の煙と共にバサツと人が倒れる音がする。

「どういう神経してんじゃ……。洞窟内で爆発じゃと……？奴隸共も巻き込む気か……？」

つていうかおっさんのお尻の方がどういう神経してんだよって言いたい。

「残念でしたー。ミラは結界魔法に関してはプロフェッショナルだからね。生憎だけど爆発したのはこの空間だけだよおっさん」

つまり、この洞窟内の開けた空間にだけ結界を張り、結界内でのみ爆発が起こったということ。結界の外には振動を含めてなんの影響もないわけだ。

作戦通り！

さすが俺だよね。

「どうやって……爆発を起しした……？」

平伏すおっさんのお尻は相変わらず丸出しだった。

「え、別に超高温の小さな火を泥に落としただけだよ」

はい、得意の水蒸気爆発でしたー。

死なない程度には手加減してるんだけどね。

「おっさん、俺に主人なんていないんだぜ。そこを見誤ったことがおっさんの敗因だ」

やべえ！今のセリフ超かっこよかつた！
ちなみに、ミラたちには避難してもらつてたから大丈夫。
ちょっと無理やりな勝利だけど・・・まあ、いいよね。

44・なにこれ、幻のお尻 その3（後書き）

力技の勝利。空間を爆発しちゃつたらトレポートやらハージュやら関係ないんで。

・・・え? もつとスマートな作戦が他にもあるって?

・・・お、大雑把な性格な猫だし、いいですよね?

45・なにこれ、竜笛

力技すげて美しさに欠ける・・・。
そんなことにこだわるのは勇者だけで十分だ。
俺は勝てればいいし。

「……」

お尻がなにか言つてる。

「これが何か・・・わかるな?」

ボロボロのズボンのポケットから出てきたのは・・・笛?

「知らね」

「・・・ドリゴンホーンじゃ」

「ほう・・・それがドリゴンホーンか」

「これ、ドリゴンホーンってなんだ?」

ちょっとと見え張つて知つてる風な感じにしちゃつたし。
最初の返答通り知らないことにしておけば良かつた。

「これを吹けば・・・ドリゴンが来るつてわけだな」

「あ、ああ。そういうの」

「ふふ・・・焦つてこるよつじやな。ドリゴンといえばこの世界そのものと言われる。猫」ときが敵つ相手じゃない」

「・・・バレてないよね?」

俺が無知なことがバレるかどうかが一番焦つたよ。

で、『アーヴィングへ。あの黒こやつへ。

あ、ミリたちせもう外に出でるかな。
俺も行かなこと置いてけぼりになつちやう。

「じゃあな。ねつせん、元気でな」

「なんだと？・・・・・アーヴィングを呼ぶと感してこの辺の反応とは。
・・・」

やうに、おひからまつ伏せのままで笛を吹いた。

――――――――――――――

高音が耳障りな音だ。

アーヴィングとか呼ばれてもいい。

勇者があの状態の今、もはやここに用はないもん。
わつやどびつかに行ひ。

洞窟を出ぬと、ミリと死にやしないの勇者が座り込んでいた。

「あ、ロロー、やつたねつー！」

ミリの帽簪にソサインを作つたが失敗した。
俺の手つてそんなに器用じやなかつたのか・・・。

「なんかせ、アーヴィングが来るひじこから逃げよひへ。」「
なんだつてーへへへ、この町をやめなこと・・・ー。」

「やつー、勇者が出来しゃまつただとー。」

これだけボロボロなら出しゃまつる元氣もないと想つてたの。

「アーヴィングだよー。アーヴィングの時忘れたわけじやないでしょ。

俺ら危なかつたじゃん

「そんなことは……関係ない！僕は守りたいものを守るんだ！」

え？ なに今のは？ ッシ 「//待ちなの？ なんなの？」

なにこれ、この展開。

逃げるつていう選択肢が消えるパターンのやつじやん！

「 口口、口口」

ああ、//ラ。 まやかお前が勇者側につくとは思わなかつたよ。
まあ、せつか。 //ラは自分の森も侵略された経験を持つてるから
ね・・・。

「 じやあ・・・戦つよ」

渋々と言ひ俺に笑顔を向ける//リフと勇者。

むかつく・・・ 勇者の笑顔。

なんだかんだ言つていつも君は正義を貫くね・・・ って言わんば
かりの顔。

「 なんだかん

」

「 言ひなしつ・・・」

本当に言ひそうになつたから思わずつっこんじやつたし。
そういうえば街中にドラゴンの爪痕があつたつけ。
ああ、どんなでつかいドラゴンが来るんだろう。
・・・ やだなあ。

45・なにこれ、竜笛（後書き）

戦闘続きですね。

戦闘書くの・・・苦手なんですねけどね。

46・なにこれ、小さくて大きな戦い その1

翼のしなる音がする。

大して時間も経たず、ドラゴンはやつてきたらしい。

・・・ん?

飛ぶ音は確かにするのに、姿が見えない。

あのおっさんと一緒に幻覚とかの魔法が得意なのかな。

「ほう、久しぶりにワシが呼ばれたと思って来てみたら、ボロボロの男に小さな妖精、ちんけな三毛猫だけか」

なにこれ、俺が一番バカにされてる気がするんだけど。つていうかどこから声がしてるのかわかんないし。

「まあよい。早速食事とするか」

食事?俺たちを食べるのか?

どんだけでかいドラゴンなんだよ。

早く姿を現せし。

「口口!あれ見て!」

ミハが指差す方を見ると・・・あれ?

小さな黄色いドラゴンがこいつを見てふんぞり返つてゐる。
ちっちや!

俺よりも少し小さいくらいで、同じ田線だった。

あくまで大きなドラゴンを想像してて、上ばかり見てたわ。

「ちんけなドラゴン」

「ほそつと思つたことが口から出た。

「なん……だと？」

怒りましたよねー。怒らせましたよねー。

「猫ーお前から食してやるー。」

黄色い「ドーラ」ポンは自身の右手を上から下にひつかくように振った。

ズドン！……！

一瞬のでき」と。

俺の体がふわっと浮き上がるほどどの風圧がきて、後ろの方で音がした。

恐る恐る後ろを見ると、巨人の一振りの「じとく」で巨大な爪痕がしつかりと残つている。

なにこれ、死ぬじやん。

「な、なんで？あんな小さなからぢやつたらあんな大きな斬撃が出るわけ……！」

「ふふふ、今のは軽い挨拶だ。次は当たると思っていた方が良いぞ

あんなの喰らつたら瞬殺だ。

しかも標的が小さいから、戦いにくい。

思つたけど、俺つて自分サイズの敵と戦つたことないじやん。いつも自分よりも大きな敵が相手だったし。

「……」「あ、助けて」

ミラを見るも、恐怖に青ざめた顔を見て勝機が薄いことを悟った。

とりあえず、身体能力を最大限まで高める。

次に牽制程度に光の矢を放つ。

それに対してもドラゴンはゆっくりと右手を上げ、矢をいつも簡単に打ち消した。

「強すぎ。

「猫！ワシは遊びが嫌いだ。さつと終わらせよう！」

これは文字通り終わるパターン？

くそっ！

集中しろ！

相手には必ず弱点があるはず。

とにかく見極めて戦うしかない。

あの見えない巨大な斬撃も冷静になればかまいたちだってわかる。
かまいたちなら空気の流れを肌で感じれば避けれるはず。

本当の戦いはこれからだ！

47・なにこれ、小さくて大きな戦い その2

俺は天才だ。

猫なのに言葉を喋れる。理解できる。

魔法が使える。

身体能力が高い。

頭が切れる。

かつこいい。

そうだ、ドラゴンに負ける要素なんてひとつもないじゃん。
異常なまでのプレッシャーを『えてくるけど、威圧感で勝負がつくわけじゃない。

「こやー！」

今まで、俺は世界を象つてる力『ヒレメント』と呼ばれる6つの力を使つてきた。

火、水、風、土、光、闇。

ミラに教わったこれって、応用できるんじゃないの？

なんとなくそう思つて、深く思考する。

だつて、世界はそれだけでできるわけじゃない。

身体能力を上げる魔法とかもあるわけだし、テレポートみたいな意味わかんないものもある。

もつと細かく分類されてるはずなんだ。

ドラゴンの攻撃はかまいたち。

これは風を操る魔法。

風の流れは肌で感じれば避けられる。

「こやー！こやー！こやー！…」

頭のいい人は頭の中で数式を作るんだって。
でも元々魔法は人間の想像から創造されるもの。
まあ、猫なんだけどさ。

「ニヤ――――――――」

「つるわいぞ、猫」

ドラゴンにつっこまれた。

力が入って毛が逆立つ。

まっすぐにドラゴンを見つめ、俺はもう一声あげた。

「ニヤ――――」

瞬間、俺を襲うがまいたちを切り裂き、ひとつの弾丸がドラゴン
目掛けて飛んでいく。

そして、俺の頭にちょっととした振動が走る。

弾丸として飛んだのは俺。

テレポートとか空を飛ぶ魔法とか色々と混ぜてみた。
体を硬くして相手に捨て身タックル。

「ぐふつ――」

ドラゴンは確かに苦悶の表情を浮かべた。
つてことは効いた？

「ふんつ、猫！」ときの一撃・・・

言葉が続かない。
効いてんじやん。我慢すんなし。
着地と同時に俺は距離を取った。

自分と同じくらいの大きさのモノを正面から受けたらそりや痛い
でしょ。

「はあ・・・はあ・・・」

今の集中しすぎて息あがつたし。

あとで今の技名考えといつ。

「おのれ！」

ドラゴンが右腕を振り下ろす。

同時に出たのがさういふのである。

દ્વારા એ બનાતું અ અને-- -- --

真つ暗。

マジであるなー。」「地面のぐるみに身を隠せた」とJINはいつもの調子で呟く。

「ワシの右手の味はどうぢや？」

食べられてねーよ。

なに得意げになつてんだ。

「なあ、ちつこいドラゴン。知ってるか？」

ドランの右手を魔法で打ち消し、低い体勢から相手の田を見る。

「まあ・・・運のこにやつめ

「俺は運がいい」

「なにが言いたい・・・？」

「運がいいからさ・・・俺は絶対に負けねえんだよー」

壁つと同時に走り出で、浮遊してドリゴンとの距離を詰める。

「//ドリゴン、髭――！」

今までドリゴンのプレッシャーで毒をあてこた//ドリゴンは俺の声を聞いてハツと俺と田を合わせた。

同時に軽く頷き、すぐに魔法をかける。

うつすらと光を帯びて、髭に力が宿る。

ドリゴンは左腕を横薙ぎに振るつ。

今度は巨大な左手が俺を襲つた。

これは避ける場所がない・・・！

「ドン――！」

衝撃は俺まで伝わらなかつた。

「ロロ君、こきたまえー！」

勇者に助けられたとか一生の恥だわ。
ボロボロのくせに。

「へつ、止まるのじやせ――――！」

ドリゴンは俺に向かって抱膝をあげる。

ものか」こ^ノ圧力が俺を押し返すが、足を止めることはない。

「へへへへへへへへ

そのままドラゴンに飛びつき、横をすり抜けていく。

「なつ・・・・・

静かにドラゴンの首が飛んだ。

「勝った・・・・・よね?」

そして、ドラゴンのちんけな体は手のひらから砂が零れていくよ
うにして跡形もなく消え去っていった。
まるでそれが幻であつたかのように・・・・・。

48・なにこれ、黄色の竜

やつらが死んだ。

これ以上のことを今できる『仮』がしない。

それくらいやつらが死んだ。

「やつあるわ

現実は甘くないらしい。

俺が無敵でも、俺がかつゝよへても、俺を上回る存在はいるらしい。

「ワシに本当の力を出せるとまではな

瞬間、現れたのは巨人並みに大きな黄色いドラゴンだった。
なにこれ、ゲームオーバー？

「認めよう」

もう、ミラも勇者も戦意を完全に喪失している。

「猫よ、お主に世界を変える力を持つていろ

急に何言つてんだ、このドラゴン。
殺すなら早く殺してくれよ。

「お主にワシの力を授けよう」

言つなりドラゴンの体が金色に光だした。

まぶしつー？

「魔王を倒せ。そして世界を変革せよ」

言い残してドリーヴンの姿はなくなつた。
なんだよ、全然意味わかんねーし。
あつさり消えるなし。

「ミラ、ついでに勇者、だいじょーぶか？」

動けないほど魔力を使ってくれたこいつらにちよつと感謝してたりする。

「うん、なんかあの光を浴びたら力が出てきた感じがする」

ミラは大丈夫そうだ。
ならよしつ。

「僕は・・・」

「じゃあ行くか」

勇者の言葉は途中で遮り、俺は港の方へと歩いた。
港には商人の娘・・・名前なんだつけ？

「リュカだつてば」

ああ、そうだ、リュカが待っていた。

どうやら奴隸たち、つまりこの町の人たちも解放されたみたいで、来た時は全然違う町になつていた。

「「れか」りびつあるの?」

リュカの問いかけに勇者が答えた。

「僕たちは予定通り王都へむかつ」

らしきですよ。

あのドリーパンの光を浴びて何が変わったのかとかよくわかんないけど、まあ生きてたからいいや。ある意味奇跡だよね。

「それじゃあ私は」の町の普及に手を貸すので」「お別れです」

大して関わらなかつたけど、なんとなくまた関わつてきやうな予感がするわ。

「またね、猫ちゃん。あ、口口か。元気でね」

わざと言に直したんだつたら今」「ぶつとばす。

「ほら、行くよ口口」

ぶつとばす準備万端だったのにドリーパン耳を引つ張られて町を離れた。

王都とか絶対俺にとつてアウヨージャんか。

「あれ、勇者の故郷だつたんじやないの?こんなあつやつ出てきちゃつてよかつたの?」

俺も優しいからいちおー心配してやる。

「みんな無事そうだったからね。僕は僕の使命を果たすだけさ」

かつこひけてんじやねえよ。

結局この町を守ったのも悪者退治したのも俺だらうが。

「王都で王が勇者を待つてこる」

勇者・・・ねえ。

どつちのこと言つてゐるのか知らないけど、特に興味ないことに変わりはないかな。

つていうかこつからまた歩きか・・・。

俺にとつてそれが一番苦痛だぜ。

49・なにこれ、門前払い

王都へは意外とすんなり到着した。もつと、なんかあれよとも思ひし、なんにもなくてよかつたとも思ひ。

「ここが、魔法都市ソルビトールを」

勝手に説明しだす勇者にはもう慣れた。

つていうか王都なの？魔法都市なの？なんなの？

「南の王都と呼ばれているけどね、なんでだと思ひ~。」

王様がいるからだろ常識的に考えて。
なんか聞き方がうざいな。

「現国王がいるのは聖都シフォニシアだ。この意味がわかるかい？」

「おい勇者」

「なんだい？」

「うざい」

「つまりここは昔の王都なのさ。もちろん今は王がいる。ここは国王の弟で、南の地を任せているのさ」

なんだとー~ここ、スルースキルを身に付けやがった。

「つていうわけで、わざわざ城に行つてみよつ

都市というだけあって、ものすごい建物の数だ。

なんか、魔方陣のような町並みで、その中央に城がある。

「//リ・・・あいつの話ついでこ」

「え? なんか言つてた?」

もはや//リの耳には勇者フィルターが内蔵されているのか!?
スルースキルを超えてる・・・。

「とまれ!」

城の前で門番をしている兵士に止められた。

「なんだい? 僕を忘れちゃったのかい?」

「いえ、勇者シェルヴィ様のご帰還はよろしくのですが、お連れに
猫が混じっているのは少々問題が・・・」

「彼は口口君だ。彼も勇者なんだよ」

俺も勇者? 勇者のくせに変な説明すんなし。
つていうか入れないなら//リから入らんわ。

「俺は//リよ」

「そりもいかないだろ? 王に事情を説明しなければならない」

「//リがしてくれる」

「えー! ? 嫌だよ私」

なんかめんどいことになつた。

「とにかく、腹話術が何かは知りませんが、妖精ならまだしも、猫
を城に入れることはできません!」

なにこれ、マジ差別。つざいから俺もう行くよ。

「あつ、ロロ君待ちたまえ！」

勇者に止められたけど氣にせずに俺は歩き出した。
リリは空氣読んで勇者の方に残るみたいだ。
さて、どうかでヒマでもつぶそつ。
大体王様に会うとかめんじゅぎめるし。
勇者なんて一人で十分だ。

「あ、あなた様はっ！？」

ん？なんか聞いたことのあるようなないような声・・・。

「勇者様！――！」

変な色の髪をした神官っぽい女が俺を指差す。
指差すとかほんとに失礼なやつだなあ。
つていうか誰だし。

「勇者様で間違いないですね！？」

俺に走り寄つてくる。
こんな変人に捕まりたくないから逃げよつ。
俺は女とは逆方向へ駆け出した。
足に補助魔法をかけて一気に逃げ切る・・・はずだった。

「ホルドム！」

なんか魔法唱えやがつたぞあいつ。
瞬間、俺の体が全く動かなくなる。

あれ？

なんか手足に光の手錠がついてて動けないし。
勢い余って顔面から地面に「！」んにちは「」したじゃねえか。

「勇者様ですよね？絶対そうですね？ただの三毛猫とかじゃないで
すね？」

こわい。

「ずっとお探ししてありました」

なにこいつ。

人を縛つておいてなんで勇者扱いしてるの？
言動とやつてることと全然違つし。
もう猫扱いしてるとちゃん。

「私はバッゼルティア王国筆頭魔術師のミフリス。あなたを召喚し
たものです」

こいつ！？

俺を召喚・・・した？

した？

こいつだっけ？

やべつ、覚えてねーや。

49・なにこれ、門前払い（後書き）

第一話に登場したミフリスちゃんがここにきてようやく登場ー。

つて作者自身も名前忘れてましたwww

筆頭魔術師は王国が有する魔術師のトップのことです。
きっとすげいんですね。

あつと・・・。

50・なにこれ、ボケ殺し

あのー、いい加減に体を自由にしてほいんですけど。手足には手錠のように光の輪が絡み付いている。

「勇者様ー。わあ、魔王を倒しに行きましょー!」

「は?」

「わあー。わあー。わあー。」

なにこいつ、強引やが。

「行かねーよー。」

「えつー!?」

思わず声を出しちまつ。

そういえばこいつと初めて会つた時には喋れなかつたんだよな。

「しゃ、しゃべつたー?喋る猫・・・やつぱりあなたは本物の勇者

ー。」

すうじに思考回路ですね、尊敬します。

「そういうわけで西から回つて北のアンスピカ山脈にむかいましょ
う!」

どういうわけだし。

つていうかあの寒い雪山になんか行きたくねえよ。

そもそも魔王とか桁違いの強さだから。

絶対に勝てるわけない。

「行きませ。ミハミハセ」

敬語で反論。

なんとなく……。

「いいえ、行きます。あと私はミフリスです」

なにそれ。

勇者の意思をもつと尊重するべきじゃないの?

「俺は魔王にもひかたんだよ、ミスリルさん」

「ミフリスです」

「それで勝てないことを悟りて逃げてきた、ミーマムセ」

「興味がなかつただけでは、ミフリスです」

あれー、心の中を読まれてる?
しかもなかなか挫けないなこいつ。

「でも、魔王は強すぎるよ、ミッシュュッシュュセ」

「勇者が魔王に負けることはあしません、ミフリスです」

「どうこうことだよ、ムラムラさん」

「運命だからです。全ては決まってます、ミフリスです」

意味深な言い方だな。

猫に宗教的なことを押し付けるなよ。

運命なんて俺には関係ない。

あと、さすがの俺でも名前覚えたわ。ボケ殺しのミフリス。

「俺の道は俺が決める」

「どうしても行かないと？」

「当たり前だろ！」いや！……！」

威嚇の意味も含めて、光の矢をミフリスに放つた。
街中でこうしたこともあって、あつちは派手なことができないだろ？

「それならば仕方ありませんね」

ミフリスは杖を取り出し、俺にむけて構えた。

あつといつ間に光の矢を相殺し、さらに魔力が杖に集中する。
え？

殺される？

「よき安らぎをつ

言つや否や俺の意識がズーンと重くなる。

あつさつすぎるけど、言い訳としては体が動かないから避けられないし、対抗魔法とか教わってないから無理だし。

「運命は覆りません……」

意識を失う直前、確かにミフリスはそう呟いた。

ああ、もうめんどくさい。

ものすごい睡魔に、俺は抵抗することもなく闇に吸い込まれてい
つた。

50・なにこれ、ボケ殺し（後書き）

記念すべき50話達成です！

読んでくださった読者の方々に心から感謝の気持ちを申し上げます。
不定期連載で読みづらいかもしませんが、これからもよろしくお
願いします！

51 - なにこれ、召喚のなぞ

重たい瞳を無理やり開ける。

なんだっけ？

記憶が曖昧だ

若干曇かくで 震動を感じる

「気がつきましたか?」

ミフ・・・・・・あ、ミフリスに抱き上げられていた。
そもそもどこかにむかって歩いていな。

『日本書紀』

なんでここでいじわるすんだし。

「魔王のところに行こうとしてるんでしょ？」

- 1 -

「俺じゃああんなバケモノは倒せないよ?」

「みんなは？」

「わあへ..どなたでしょ、いへ。」

「西の峡谷レイン・エイノンです」

今度はすんなり答えた。

切り立つた岩場で、人間の歩く道なんてどこにもない。

登山というか、俺みたいに身軽ならアスレチック感覚で楽だけど

ね。

「どうしてこんな無理やりな」とすんの?」

「私の使命だからです」

「あなたの使命なんて知らないし」

「では、こう言いましょう。勇者様の運命だからです」

「・・・運命?」

「そう、あなたは私に召喚されました。その時点から運命は決まっています」

「くだらない」

「あなたは勇者。魔王を滅ぼす存在です」

「無理。あと興味ない。あとあと知つたことか」

「あなたの意思なんてハッキリ言いますと、どうでもいいのです

なにこいつ。なんか口ワカイ。

「勇者様はなすべき」と成せば良いのです

俺の意思が関係ないなんてふざけんな。

「どうして魔王を倒さなきゃいけないんだ?」

「魔王がいると、魔物が活発化するからです」

「あんた、魔物の正体って知つてんの?」

「魔物の・・・正体?」

魔王ベネルの話していたことを思い出す。

「魔物は勇者の副産物。魔王もそり」

「どういうことでしょう?」

「さあね?昔の人は勇者という絶対的な存在がほしかったんだって。

その勇者を作り上げるためにこつぱい実験して、その失敗作が魔物の正体だつて魔王は言つてたよ」

「魔王の戯言ですか・・・」

戯言・・・ねえ。

俺にはどうでもいい話なんだけどね。なんで覚えてたんだひつ。

「魔王も副産物と言つてましたが、どういうことですか？」

「勇者召喚と一緒に召喚されるのが魔王なんだつてよ」

「つまり・・・私が魔王を召喚したとこり」と・・・ですか？」

「ああ、そういえばそうなるよね」

「そんなの・・・ウソです」

「ううう、ひとつ聞きたかったんだよね」

「・・・」

「どうして俺を召喚したの？」

「・・・言こ伝えです」

また妙な単語が出てきたな。

「100年に一度、魔王が誕生し世界は混沌に陥るだひつ」

なんだそれ。

「魔王誕生と共に勇者が誕生し、世界を救うであひつ

「なんか、おかしくね？」

「おかしくなんか・・・ありませんー」

ミフリスが声を荒げる。

「そんな・・・私が魔王を召喚してしまつただなんて・・・そんな・

・

絶望つて顔をして、ミフリスは立ち止まつた。

「まあ、魔王の言つことだしねー」

「まさらフォローしたところで遅かった。
立ち止まり、俺のことを降ろし、ただ俯いて立ち去ってしまった。
え、いつこうじたらいこの？」

51・なにこれ、召喚のなや（後書き）

もうすぐ連載一年ですねー
いやあ、遅筆でじめんなさい。。。。

つこに勇者誕生の秘密につこてに触れてしましました！

仲間とはぐれちゃったし、どうせつけて呑連れせたらいいんだ・・・

w

52・なにこれ、勘つきやない

殺風景。

切り立つた岩が顔を覗かせているが、それ以外には草木もないし、街とかも見えない。

なにこい、超ブキミなんですけど。

目の前に立ち戻くしてる女の方が遙かにブキミだつてことは言うまでもないけどね。

「ねえ、ijiいてもしじうがないからどうかいijiー？」

「・・・・・・・」

「シカトすんなやつ！」

「・・・・・・・はい」

俺はどうちから来たのか、これからどうちに行きたいのかもわかんないままにただ歩き出した。

それにミフリスもついてくる。

こういつ時に役に立つのが猫の嗅覚でしょ。
人間の数倍の嗅覚をなめんなよ。

「・・・・埃っぽい」

荒れ果てた峡谷はなんの臭いもしなかつた。
まあ、あれだな。犬には負けるかんね嗅覚も。
嗅覚がダメでも聴覚があるから問題ないし。

「・・・風の音しかきこえねえ」

他の生物の気配すら感じない。

いや、でも、ほら、あと最後にはアレが残ってるしね。

「猫といえば勘つしょ」

さつきから俺、独り言喋つてるかわいそうな猫になつてない？そもそもミフリスは道わかつてるはずなんだし、むやみに動くのは得策じやなかつたかな。

「・・・・・」

思いつめた表情で、ミフリスは無言のまま俺についてくる。

そんなにシヨツクだつたのかな。言わない方が良かつたのかも。自分は勇者を召喚したと思ってたら魔王も召喚して、拳句にふつーの勇者を召喚したと思つたら猫の勇者だもんなあ。

まあ俺は超特別な猫だから召喚されても全くおかしくないし、むしろふつーの人間よりも優れてるけどね。

なんかイイ匂いしてきたつ！

「肉だつ！」

遙か前方から確かに肉の焼ける匂いがする。

俺は歩度を上げてミフリスとの距離を保ちつつ一直線にその場所へとむかつた。

ザクッ！――！

唐突に、次に俺が足を出そつと思つていたポイントに矢がさそつた。

あぶなつ！

ほんと気配もしないまま放たれたソレを見る。硬い地面にざつくりと矢は刺さっていた。

なにこれ、威力やばっ。

ああ、簡単にお肉は食えないんだろうなあ。

「誰っ！？」

あれ？この声・・・？

「この美人な私のお肉を狙つてやつてきのはっ？」

あれ？この口調・・・？

切り立つた岩の上からこちらを見下ろしてくる傲慢な態度。

逆光を浴びたその姿は影そのもので、目が慣れるまで全く誰だかわからなかつた。

あつ・・・！

「セリーヌ！？」

「ロロ！？」

52・なにこれ、勘つもやない（後書き）

セリーヌも登場！

セリーヌと別れたのが西の森で、そのあたりに西に進むといひの峡谷に出るようです。

w なにぱにロロの嘘せけ親だといひことを忘れないであげてください

53・なにこれ、変わんねえ

「ひをしづりー。大丈夫だつたの? こんなとこ今までクールビューティな私を追いかけてくれたわけ! ?」

セリーヌは俺の近くまで来て、肉を分けてくれながらそう言った。なにこの人、相変わらずすごいナルシストなんですね~。

「いや、「めん」

「ふふつ、照れ隠ししちゃつてー」

あー、うせー。

「それで、そつちのかなーり暗い顔のお姉さんはどうり様? .」

文字通り暗い顔をしてる//フリストを指差す。

「・・・魔王を召喚してしまった王国の恥です」

超ネガティブ! ?

「この人は王国のすこい魔道士さんで//フリストってこいつじゃよ」

「ふーん、口口つて女つたらしだよね」

別に俺は女たらしじゃないと思つー。

つていうか人間が相手じやどうしようもないじゃん・・・。

それとも新しいジャンルを切り開くべきなの?

「どうでもこいナビ、セリーヌはなにしてんの?」

「私？私は私の美貌を探求しつつ、心配だつたから口口を探したりしてたのよ」

なんかウソくさいなあ。

「それでいくら入るの？」

「毛猫発見者には5//ワード!!!!」

卷之三

卷之三

俺つて指名手配されてたもんね。あれなんでだつたんだろ・・・。

「あの手配書は私が発行したもののです」

ミフリスが静かに呴いた。

・・・すこしあくまでしたよ。

「中国からお金が出てるなんてどうこいつとかなって思つたんだけど、口ひになにかやらかしたの？」

「この猫様、口口様というのです

「口口が勇者？それ新しいね！今度私も使ってみよう」

いえ、新作のサザケとかじやないです」

なにこのやつと。漫才? っていうかちょっととイラフとくねじ。

「口口様は私が召喚した勇者様なのです」

「ああ、そういえば今年はヤスホイヤーだよね」

卷之三

「ほな、今日ほいれでおやすみやー・・・うて違ひわフー。」

おお、ノリシッ「ミーーー！」さすがゼリー・ヌだ。
なにヤスオイヤーつて。

「初代勇者であるヤスオを記念とした100年に1回ある年の」と
をヤスオイヤーつていつのよ」

勇者ヤスオってめっちゃ日本人じゃん！
俺も日本から來たし、友達にヤスオって猫いたからす”い親近感
だわー。

ちなみにヤスオはアメリカンショートヘアだつたけどね。

「へえ、ヤスオさんねえ」

「そうなのです。それで、筆頭魔術師である私が召喚したというわ
けです」

「口口がマジで勇者とか・・・ぶぶつ」

「こいつ吹き出しあがつた。

「んで、セリーヌは俺を賞金と換金するために探してたってこと？」
「まあ、そんなとこかな」

本人目の前にしてんだから、もう少しうつと包み隠せよ。

「でもね、こっちの方にきたのはギルドの仕事も含めてなのよね」
「ギルドの？」
「いつも通り魔物退治よ」
「あなたはギルドの方だったのですね」
「まあ、ふつーに綺麗なハンターよ」

魔物・・・退治？

若干イヤな予感がした。

「んで、もう魔物退治は終わってるんだよね？」

「いんじゃ？」

即答なんですね。その方がスッキリしますね。

「めんどくさい…」

「まあまあそういう言わないでよ。相棒なんだし、一緒に狩りに行こう」

「口口様はこれから魔王を退治しに行くので無理ですよ」

「えー、いいじゃん！勇者なら身近な敵だつて倒すべきだよ！」

うわあ、また本人の意思と関係ないところで色々言つてるよ……。

ポツツ

額に水滴が当たる感触がした。

「あつ、雨だ」

53・なにこれ、変わんねえ（後書き）

連載開始からちょうど一年が経過しました！こんな薄っぺらい内容なのになかなか更新せず、ほんとに申し訳なっています。

補足で、指名手配の額が上がってるのは、ミフリストの焦りからです。特に強い相手を倒したからとかそういうのじゃないです。あと、手配書は国全土に出回っているわけではありません。

54・なにこれ、ハゲる前に その一

雨は次第に強くなつた。

「ほんつとにこの峡谷はイヤになるわー」

セリーヌが傘をひとつ差しながら囁く。
・・・こや、ひとりですかね？

「この峡谷は、この酸性の強い雨が頻繁に降ることでできあがつた
とも言われています」

疑問の答えはミソ里斯が応えてくれた。

酸性ってなに？

「まうまう、おふたりさんとも雨にあたつてるとハゲちゃうよ？」

「なんで？」

「酸だもん」

ちょっと意味がわかんない。

けど、この雨に当たつてるとどうやらハゲるらしい。

ド「オオオオオオン！－！」

「え？ちよつとなに－？」

少し離れたところで岩の崩れる強烈な音がした。
酸で溶けて崩れたの？
ってことは俺もドロドロになつちゃうのか…？

めっちゃ怖いじゃん！
なにこれ、避けらんねえし。

「水の魔物、レベッカですね」「そうみたいね」

なんで2人だけで納得してんだし。
レベッカ？水の魔物？

「プリシア級の上位の魔物だよ。言葉も喋る上に弱点らしい弱点がないのよね。この強くて綺麗な私でさえどうやって倒すか検討しているところだつたしね」

弱点なんて電氣に決まつてんでしょ。

「ちなみにレベッカは雨の降る時にしか出現しません」「つまり電氣系の術は自分たちも焦がすかもしれないってことね」

あれ、なんかこの2人の息が合つててすゞい疎外感があるよ。
もうお前りでやつつけろし。

「あらあら、おいしそうなお肉がふたつもあるじゃない？」

レベッカは静かに姿を現した。

外見は人間の女性で、長い銀髪に尻尾が三本生えてる。
すげーな。銀髪って初めて見たわ。

なんだろう、狐っぽいかな。

つていうかお肉の中に俺が含まれてない気がするのはいつものことなのか？

「女狐レベツカってほんとだつたんだね？よかつたー、私の方が美しいだわ」

なにも良くなえし。むしろ、なんの安心感？
とりあえず挨拶代わりに水の矢を放つてみる。

雨を切り裂いて、一直線にレベツカへと放たれた。

「ふふっ」

消えた？

矢が消えた。一直線にむかっていつたはずの矢が消失したぞ。

「『』の私に水の魔法で挑むなんて、どこのおバカさんかしら？」「魔法のコントロールを奪われたのですね・・・！」

え？ ミフリスの言葉がよくわからなかつた。

「レベツカは水の魔法を得意としています。彼女よりも水の魔法に対して優れていなければ、魔法が彼女に当たる前に焼き消されてしまうでしょ？」

説明おつかれ。

相殺ともちよつと違つてことが。

これだけ雨が降つてゐるのに水の魔法がダメ。電気の魔法もダメつてなると残るのは・・・？

「『』めん、任せた」

残つてないぜ！

54・なにこれ、ハゲる前に その1（後書き）

次回はセリーヌとミフリスの戦闘が見られます！たぶん……
筆頭魔術師の実力とはどれほどものなのか……「うー」期待！……

つて今回は予告風にしてみました。

弱点なんてないと書いちゃって、自分の首絞めた代償は重すぎだ
ったかもです……。どうやってレベッカ倒そう……。

55・なにこれ、ハゲる前に その2

「デーモンスペル！！」

ミフリスの周りに黒い大きな魔方陣が現れた。
気持ち悪い。

つていうか闇の魔法とか使えるわけこの人。

「ずいぶん物騒な魔法ね」

「私はどの属性の魔法もトップクラスに扱えますので

なにそれ、自慢？

黒い魔方陣がミフリスの体内に吸収されていく。

うわあ、絶対俺はイヤだなこれ。

「ダークファンシー！」

「闇は全てを食らって呑みこみます。覚悟してください！」

一気にレベッカは闇に包まれ、そこには黒い球体がひとつ出来上がりっていた。

あ、これ、俺が前に食らった魔法と一緒にじゃん？似てるだけ？

「もー、私の出番がなかつた！！華麗で華やかで美しい閃光のような私の戦いざまを見せてあげたかったよう

でたよ、セリーヌの戯言。

なんか言葉の意味的にかぶつてる表現あるし・・・。
って言つてるそばから、球体にヒビが入つた。
そこから水が漏れ出していく。

「あらあら、やっぽりあの空間は無限ではなかつたのね、ふふ」

余裕の笑みでレベッカ登場。そんな簡単に抜け出せたっけアレ・・・。

「ど、どうやってー?」「

「簡単なことよ。闇の空間を水で満たしてあげただけなのだから」

俺がそれやつたら溺死するから無理だわ。

「私の出番つてことね！」

颯爽と矢を放つセリーヌ。

いとも簡単にレベッカの体を突き抜けていく。

「私の体は水なのよ。物質が効くわけないじゃない
「あらら、そつかそつか」

レベッカは空中に水を集め、八方に水の矢を飛ばす。

雨なんていうカワライイものじゃない。

これこそ空から槍が降つてきたって感じだね。

それがふつーの雨と混じつて、ものすごい見づらい。

「酸濃度を上げたステキな雨よ。溶けちゃいなさい」

「わお」

その攻撃を3人とも各自のやり方でかわす。

セリーヌは身軽な身のこなしで全てを避けていた。ものすごい運動神経と動体視力だね、猫顔負けかも。

ミフリスは魔法の盾を出し、全てを防ぐ。
俺はレベッカの足元で雨宿り。

「さっきからなんなのだこの猫は・・・」

超自然な動作でレベッカの近くに避難したもんだから、なんか呆れられた。

だって、ものすごい数の水の矢を放つたって、自分に食らわせるほどランダムには放たないっしょ。一番の安全地帯じやん。っていうかハゲるどころか溶けちゃうわけ? すげーな。溶けるって感覚が全く想像できないし。

瞬間、ふつーの矢がレベッカの腹部に刺さった。
こんな間近で矢が刺さるとこ見るの初体験!
うわあ、痛そう。

「ま、物質が効かない敵はあんただけじゃないってことよ」

相変わらず降り注ぐ水の矢を避けつつ、弓を構えているセリーヌ
がいた。

ちょっと待つて、セリーヌつええ!

「な、なにを・・・?」

「指定したどんなものにも触れることができる魔法、リアルナイト
メア」

「秘術だと・・・?」

なんかレベッカがすごいビビってるんだけど・・・。

「秘術つてなに？」

「秘術とは、魔法を生み出したと言われる六大賢者の遺産と言わるものですね」

あ、聞いてもないのに毎度説明どうもミフリスさん。また意味わかんない単語出てきたし。もうめんどいからなんでもいいや。

「だがつ、私はまだ負けていない！」

レベツカは次から次へと降つてくる雨を凝縮し、1つの槍を形成し始めた。
それをさせまいとセリーヌが矢を放つものの、水の壁を作られて遮られてしまう。

ミフリスの闇魔法も同様に防がれる。
こいつ強い。

2人相手に互角以上に戦つてるし。

「もつとがんばらないと負けちゃうよー！」

俺も2人の奮闘に感化されて、必死に応援した。

「じゃあ、あんたも戦いなさい！」「ならば、あなたも戦つてください！」

「うわー、すげえ見事にハモったよ2人とも。えっと、うん。」

「『めんなさい』

55 - なにこれ、ハゲる前に その2（後書き）

三毛猫の全剃り（全ハゲ）ってなに猫？って考
えてるひたすら55話
を投稿。

「なんかヤバそうな一撃がきそうだよ?」

と、助言してみる。

「全てを貫く槍を味わいなさい！ウンディーネル！－！」

極限まで水を凝縮させた槍はどう見たって危険。

p. 1 フリス。

「だ・か・ら、あんたも戦いなさいってのー！」

セリーヌが素早い身のこなしで俺の背後に回つた。
ふつーにお座りしてるので俺の背中をつかむ。

あれ! なんかイヤな予感しかしないよ

思つた瞬間、背中の皮をぐいっと引っ張られ、俺は宙を舞つてい

なんか投げられたり。

「『めんね口口！盾になつて！』

「ふざけんな——！！！」

宙を舞いながら体勢を取る。

つたく、ミラじやないんだから結界とかムリだし。
うわっ、考えてる暇なさそう。

「ハア！！」

レベッカが振りかぶつて槍を思いつき俺にむかって投げた。
いや、俺に投げるおかしいでしょーまだ一撃しかあんたに攻撃
しないし！

「こやーーー」

見よう見真似！ミラの結界だ！！

一点を集中した結界を瞬時に展開させる。

これをなんとか切り抜けたら、とりあえずレベッカよりも先にセ
リーヌを殺す。

結界と槍がぶつかる。

とんでもない重圧がかかってきた。

なにこれ、魔力で結界を維持しないと押されて終わるし。

ミラってこんなキツイ魔法使つてたのか・・・。

離れて初めてわかるお互いの事情つてやつだね。

結界を維持しつつ、水の槍に意識を向ける。
水が広がるイメージ。

「こやあーーー」

シユパーーンーーー

「なんてことつーーー？」

鋭い音とレベッカの叫びと同時に水の槍が消滅した。

「さつすが口口口ーーーの私が見込んだ猫なだけあるねーーー」

調子に乗るなよセリーヌ。

「今日は魔法のコントロールを奪つたのですね？」

「ふつふつふー」

さつきミフリスが言つてたことを意識してみました。
やっぱり俺つて天才だわ。

「わ、私の水魔法が奪われるなんて・・・」

こじぞと言わんばかりに隙ができる。
すかさずセリーヌの矢とミフリスの魔法がレベッカを襲つた。
うわっ、容赦ないねえ。

「ぐあああーーー！」

矢と魔法に打ち抜かれたレベッカが倒れた。

同時に、雨がやんだ。

なんとなく、魔力の流れやコントロールについてわかつた気がする。

自分自身の魔力の流れも感じれるようになつた。
これつてものすごい進歩だよね？

「セリーヌさん、ちょっとお話があるんですけどー」

極力優しい口調で俺はセリーヌに話しかけた。

「うん、私はないから帰るね」

「ふざけんなーーー！」

そういえば俺、ハゲでないよね？

56・なにこれ、ハゲる前に その3（後書き）

次回は番外編（//トト編）をお送りしたいと思います。

57・もう！口のバカ！ その1

偉そうな王様が玉座に座つてゐる光景つて人間も一緒になんだね。妖精族だけなのかと思つてた。

「つまり、その三毛猫の口口というのが勇者だと言つのだな？」「はい、その通りです」

堅苦しい空氣を体中から発してゐる王様。

「して、そこの妖精。名は？」

偉そうでほんつとウザイ。實際偉いのかもしれないけど、上から目線な人つて嫌い。

私だって、いたくて口口にいるわけじゃないんだから。早く外に出たいよう。

「ミラ」

「ふむ、大妖精の使いで参つたのか？」

「いいえ、私は大妖精の命で口口を守つてゐるだけです。決して王様に会いにきたわけではありません」

「その守る相手から離れてたら意味もないがな」

このジジイほんつとに嫌い！

大体、こここの門番が口口を入れないとか言つからいけないんじやない！口口の頼みじやなかつたらこんなどこ来なかつたわよ！

「口口・・・という猫はどこにいるんだ？」

「門前払いを受け、外で待つております」

それにしても淡々とよく口が回るわねアホ勇者。

「連れて参れ

「はっ」

やつと外に出れる！

今度は口口だけ中に入れて、私が外で待つてよつと。

「口口ーお待たせ！出番が来たよー」

「口口君はいるかな？」

あれ、いない・・・・？
どつか散歩してんのかなあ。

「いないねえ」

「困ったな。人に尋ねてみよう

バカ勇者がひとりで聞き込みを始めた。
私は魔力探知魔法で周囲をさがそつと。

「サーチフォース！」

この街全体をに魔力探知を張り巡らせる。

知らない魔力が数多く感じられた。

さすが魔法都市つて感じね。上位の魔道士もたくさんいるし、魔力を意図的に隠してる人もいる。私にはバレバレだけどね。

「あれ・・・」
「ふむ・・・」

「「・・・
いな
い」」

うわー コイツとハモつたー！

最悪たあ

三でいニカロリなレシ！

「どに行つちゃつたんだろう。あのキモいくらい独特で滲み出てるほど大量の魔力が全然感じられなかつたよ・・・」

「街の人の話によれば、なにせこの人と猫かじやれ合ってしたと
いう話だ」

女の人にはホイホイしていせやうな性格だ」

「・・・」飯か

〔註〕此句與前句「吾子之惠」，皆是對「子」的稱謂。

も「う！」

口のバカ！

卷之三

「その前に王様に話さなければ……」

卷之三

笑顔でバイバイしてやる。

街の外でなるとどこに行きたのか探すのが大変じゃん……

卷之三

・攫われた？

でも口口ほどの猫を攫つて相当強い人だよね。しかも女人・。

肉弾戦で口口に勝てるわけないから、口口以上に魔法が使えるつて考えるとその辺の魔道士じゃなさそ。つてことは、この街の魔道師団の上位の人とかかな。

いや、そもそも口口が勇者で普通の三毛猫じゃないって知ってる人なんているの？

風が吹きぬけて、一枚の紙がヒラヒラと私の前に落ちた。

「あつ・・・」

手配書・・・。

三毛猫の雄を見かけた人はギルドか王国軍に報告を・・・つてギルドと軍と両方！？

ギルドと軍つてそんなに仲のいい関係じゃないし、両方に精通してる人つてことは・・・どういふこと？

「ミリ君。つい先日、三毛猫の雄を南の街道で田撃したという通報があつたそうだ」

ダメ勇者がいつの間にか戻ってきて、なんか言つてゐる。

「・・・可能であれば捕獲し、ギルドもしくは王国軍へ引き渡す」と。捕獲者には報奨金5ミリドルを配当するつて

手配書の一一番下に書いてある。

つまり口口は今捕まつて、王国がギルドに引き渡されてるつてことかな。でも、王国軍の方には来てないみたいだから、ギルドに行ってみるしかないわね。

もう！

口口のバカ！

57・もう一ロロのバカ！　その1（後書き）

初めてロロ以外の視点からお送りしました。次回も//ラ編です。

ギャグ少なめですみません！

一生懸命で健気にロロを探す、そんな//ラをお楽しみください。

58・もう一口のバカ！ その2

「そもそも魔力を探索したんじゃないのかい？」

まさか勇者からこうも的確な指摘を受けるとは思わなかつたわ。

「捕獲魔法の中には相手の魔力を無効化するものがある。そういうもので捉えられた場合、索敵にひつかからない場合があるのよ。この都出身のクセにそんなことも知らないわけ？」

「まあね」

なんで偉そうなのよっ！

私たちは街で一番大きなギルドを訪ねた。

「これはこれは勇者殿」

「うそつ！？ シェルヴィ様が帰つてきてるのー！？」

「わあ、シェルヴィ様っ！！」

「あはは、元気にしてたかい？」

えつ、なにこの人気。

そういえば初めて会つた時も女の子たちに囲まれてたつけ。
私にはわかんないなあ、この男の良さが・・・。

「ねえ、君たち。三毛猫を連れた人が訪ねてこなかつたかい？」

「んー、見てないよー？」

「ふむ、どうもありがとう」

意外とヘボ勇者も役に立つものね。

でも、結局情報はゼロに戻っちゃつたけど・・・。

もう！

口口のバカ！

本当にどこに行つたのよ・・・私を置いて・・・。

「おやおや、寂しいのかい//^ヲ君？僕の肩で良かつたら貰うけど？」

え、こんな気遣いを勇者がかけてくれるなんて・・・。
そんな優しい言葉かけられたら私・・・つてなるがボケ！
あー、私表情に出てたのかな。こんな、たらし勇者にまで心配されるなんて。

「ほら、さつさと次行くわよ」

「色々な意味で素直じやないねえ君も」

「知つたよつな口で言つなかつー！」

もうこいつなつたら街から離れたと考えるしかないわね。
もしかして、私たちを置いて本当にひとりでどつか行つちゃったのかしら。

魔王退治なんて絶対イヤだつて言つてたけど、どつかせ口口のいつもの天邪鬼だと思ってたからな。

でもでも、いくら魔王退治がイヤでも、急にいなくなるほど薄情な奴じやないもん。

門前払い受けたから拗ねてどつか行つたとか？

・・・ないわね。

絶対誰かに捕まつたんだわ。

「この手配書つて誰が手配したんだろうねえ」

「知らないわよ」

「ギルドにも軍にも通じてる人なんてそつそついないもんだよ？」

「なによ、口口を見つける前にそつちから当たるうつてわけ？」

「急がば回れってね」

かつこつけながら言われても・・・。

でも、珍しくコイシの言つてることも理にかなつてゐし、私も思つてたとこだつたし。

ギルドの人人が言つには、聖都の方から回つてきたつて話みたいね。

「聖都・・・」

「シフオニシアには久しく行つてないな」

「ここからどれくらいかかるの?」

「ソルビールから真北のマルチトール川を越えたといふがシフオニシアだね」

「言葉にしたら近そうだけど、それつて結構あるでしょ・・・」

「今までの旅路を考えればそんな距離じやないわ」

口口が聖都へ行つたつて可能性もあるし、行つてみる価値はあるかも。

「ちなみに、この街から東に出れば僕の故郷方面。西に出れば峡谷レイン・エイノン方面。こつちは人が歩くよつな道じやないからね」

「その峡谷方面にはなにがあるのよ」

「んー、アンスピカ山脈へは近いかもね」

「真北に行くよりも?」

「そうだね。聖都から北に行つても死の樹海があつて、下手をすれば山脈のふもとにすらたどり着けないで死んでしまうからね」

「ふーん。ま、どうでもいいわ。とりあえず聖都に行きましょ」

「よし、じゃあ王様に話を通してくるとしよう」

はっ！

なんで私は今このウザ勇者と一緒に旅しようと思つてるんだろー！

ふたりつきりとか超ウザイに決まってるじゃん。
□□がいたら□□に矛先が向くのに！

□□がいたら□□に矛先が向くのに！

「その行い」

「 じ ゃ な い わ ょ ー ー

口のバカ！！

四〇六

59 - なにこれ、ギルドのボス

渓谷を抜けた俺たちは、とりあえず近くの村のギルドに立ち寄つていた。

ちやつかり報奨金を受け取るためだつて。

「いやあ、儲けた儲けた

上機嫌なセリーヌの横で、いまだにテンションの上がりきらないミフリス。

「あんた、ミフリスさんだよね？」

ギルドのおっさんがミフリスに話しかける。

「ええ、そうですが」「やつぱりそうか。いやあ、ギルドの大ボスがこんなところで何してんだい？」

ギルドの大ボスつてなに？

あれ? 今すつゝこゝと書いたよね?」のおつむん。

「それは内密にお願いします」

「おうど、ここに一つあすまねえな」

え!! ソ!! リス!! そんなんす!! い人だ!! たの!! ?!!

セリー又空氣謁のよ。

俺はこの世界のことはよく知らないけど、どうやら王国軍とギルドは別々の組織らしい。

規律のある王国軍では対処できないことをギルドがこなすといふことでバランスを保つてゐるミフリスが言つてた。
はつきり言つてよくわからなかつたし、どうでもいい。

「私は王国軍筆頭魔術師のミフリスです。それ以上でもそれ以下でもありません」

「この国の影の支配者の存在ねあなた」

「私は勇者様を用いて魔王を倒したいだけです」

「ふーん。つていうか魔王になんかうらみもあるの?」

「それは・・・」

意味深な間。

魔王つて俺と同時に召喚されたわけだよね。

つていうことは、俺つてなんで召喚されたわけ?

前回は深く追求せずに話をやめちゃつたけど、いへり言い伝えだからつて魔王はその時いなかつたわけでしょ?

「わかつちやつたかも美しい私が。あれでしょ、魔物!」

びくつとミフリスが微細に動く。ほんとにちょびつとだけ動搖したみたい。

「魔物・・・・・・そうですね」

「ほら、当たつたー!さすが私ね!脳みそまで美しいの!」

いや、セリース空氣読めつてば。
とりあえずギルドから外に出た。

まあ、公共の場で話すことでもないっぽいしね。

「魔物に両親を倒されたーとか?」

俺が試しに言つてみる。

なんか//ラも似たような境遇だつたしね。

「ええ、まあその通りです」

当たつたし。セリーヌより俺の脳みそのが絶対すぐーよ。大きさの比率的に。

「まあ、魔王が誕生する前も魔物はいたし、人間を襲つてたのは事実だからね」
「そうなの？」

「そつよ、ギルドって前々からあつたんだけど、やつぱり魔物退治

がメインの仕事だつたみたいだしね」

「つていうか大ボスつてなに？」

話を戻してみる。

「いえ、ただの運営資金提供者です・・・」

「そつか、ただのウンエイシキンティキョウシャカー」

「ごめん、ちょっと難しい単語でよくわかんない。

「あのね、この国にあるギルドの施設の数・・・尋常じゃないわよ？いくらなんでも個人で払える額じゃないと思つんだけど・・・」

「いえ、現在のオーナー（ボス）は私ひとりです」

「どうやら、セリーヌのお金は元々//フリストのお金だつてことまで俺は理解した。」

ま、お金についての概念がよくわからぬからどうでもいいや。

59・なにこれ、ギルドのボス（後書き）

ロロは他人の前ではあんまり喋りません。
だって、めんどう事になるかもしないでしょ？
だからギルドの中などでは大人しく心の声でツツコミをいれています
w

「ミフリスがギルドのオーナーっていうのはわかつたんだけじゃ、ギルドって他にお金稼ぐシステムみたいなのがつてないの？」
「セリースってギルド所属なのになんにもギルドについて知らないわけ？」

ま、俺にいたつてはいままだごどりこつ組織なのかすらわかつてないけどね。

「現在のギルドは、私からの資金提供と依頼者からの報酬で成り立つています。魔物退治は主に私から報酬を出すようにしているのです」

「へえ、ミフリスって貴族の娘かなにかなの？」

「はい」

「あつさり認めたわね」

「事実ですか」

「私に足りないあとひとつ要素をあなたは持つてゐてことね

お金か。

つていうかセリースはあとひとつだけじゃ完璧にはならないつしよ。

「親の遺産ですから。私がすごいわけではありません」

「いや、あんた王国の筆頭魔術師じやん。十分すごいつてば

なんでこの女はこいつも謙虚なの？

なんで普段謙虚なのに俺を拉致したりするの？

あ、そういえば・・・

「話戻すけどさ、つまつ//フリスは復讐のために魔王を倒したいってことだよね?」

「…………はい」

「へえ」

「うなんだつて。

食べ物以外で復讐とか考えたことないなー。

あ、つい最近俺を盾にした奴がすぐ横にいるけどね。

きつといつか制裁を加えてやる。

「でも、もちろんそれだけではありませんよ。私は王国の筆頭魔術師。民を守る立場にある王の意図を汲むものです。それは私の正義なのです」

「あつせ」

「私はお金があればなんでもいいけどねー」

セリーヌつて守銭奴だよね。

ミフリスは民を守ることが正義つて言つてたけど、正義つてなに?英雄=正義みたいな感じで喋つてるけどさ、猫の俺からしてみれば理念だけの正義なんてなんの意味もないと思うんだよね。ま、英雄=勝者だから一致してるつて言えばしてるのかな?

猫なら勝者=正義でわかりやすいからね。

「それでは、アンスピカ山脈へ行きましょーうー」

「おー!・・・・つて言つとでも思つたかつー。」

「今言つたじやん」

セリーヌ空氣読めしー。

「俺は嫌だつて言つてんだろー。なんで勝てるかどうかもわかんないよつな、あんな口ワイ奴んとこ行かないといけないんだよ！」

「運め　」

「運命なんかしらねー！俺は食事と睡眠と雌猫があれば生きていけるんだ！魔物なんてほんとほざひでもこいのー。」

「それでは困ります」

「口ラハロロロー・ワガママ言つたらダメー！」

セリーヌの対応はなんか違うと感づ。

「魔王を倒してへだされば……そりですね」

「ん？」

「一生困らなこぼじの食事と雌猫を用意いたしますよ」

え？

今なんて言つた？

「うわあ、マフリスえげつないねえ。口口を貰取すんの？」

「はい、お金には余裕がありますので」

うふふと笑顔で言つ。

あ、笑つたとこ初めて見たけど……こわつー

なんか怖い雰囲氣出てるよ。

「しかも口口のやつ揺れてるよー」

ゆ、揺れるものか！

こんなもので揺れる俺じゃないやー

「寝心地のこい寝床も用意しまじょー」

「こじりつかーーーー！」

「ロロ・・・あんたやすつーーーー！」

なんかじの感じ前にもあつたよつなかつたよつな・・・。
まあいこや。一生の幸せを手に入れるために魔王なとてふつとば
すぞー。

あれ？逆にふつとばされたら一生の幸せとか意味なくね？

「あ、ちゅうと待つてー今のはしごーーーー！」

なしごにはなりませんでした。

60・なにこれ、猫のニ欲（後書き）

次回はまたミラ視点に移ります！

それにして口口つて単純ですよね・・・猫ですしね・・・。

61・もう一ロロのバカ！　その3（前書き）

//リリード

61・むづーのロロのバカ！ もの3

えー、なにこの三！
すつしに荒れてるし橋ないじゃん！

「これがマルチホール川？」
「そうさ」「あう」
「どうもつて渡るのよ・・・」
「・・・船や」
「ムリでしょ」

「この荒れた川を船で渡るとか、酔いつとかそういう問題じゃないよ。
しかも結構幅もあるし。」

「雨降ったわけじゃないのになんでこんな急流なわけ？」

「まあ、マルチホール川は渡るものじゃないんだよ
「どうことよ？」
「ここから東に歩くとサンベンプール行きの船が出ているのよ
「サンベンプール・・・？」

なんかどつかで聞いたことがある地名。

「つて、元々ロロと来た道じゃないつー湖まで歩くつー」とー。?
「湖じゃないと渡れないんだからしそうがないんだ」
「じゃあなんでソルビールから北に歩いてきたのよー。」
「来た道を戻るよつ楽しいと想つてね」

おもしろくない！

ほんとに「マリ観者ね。

「口口に乗れずにずっと飛んで来たから疲れてるの……」

もう！

口口のバカ！

ん？あれ……。

「つて、私飛んで渡れるし！」

わあ、なんで気付かなかつたんだろう！

「おやおや、僕を置いてけぼりにするつもりなのかい？」

う、正直なところ、こんなダメ勇者でもいてくれると安全なのよね……。

私はこの姿ゆえに戦闘には不向きだし、ちょっとした魔物にすら食べられそうになるし……。

「……うー、わかつたわよ！飛ばせばいいんでしょう？飛ばせば」

「あつはつは。さすがミラ君だね。人ひとり飛ばす魔力のある人なんてそうそういないよ」

「褒められても嬉しくないし。私妖精だし」

「素直じゃないねえ」

「川の途中で落とすプランBでいいわね？」

「あつはつは。困ったなあ。どうせならプランYで頼むよ」

「え？Yって勇者のY？」

「どうしようもなくつまんないよこの人……。

「Yは勇者のYだよ」

自分で説明しだしたー！？

「え、う、うん。プランAのままでいいね
「そうかい？残念だなあ」

なんかこいつ殺したい。
まあ、いいわ。

とりあえずまずは勇者を回り、崖まで飛ばせり。

「フライングウイング！」

んで、私は自前の羽で渡れば万事解決！
もののすじにショートカットでシフォニシアに着いちやうわね。
今頃口口はどうしてるのかしら・・・?
まあ、どうせいろいろなことに巻き込まれてるんだろうけどね。
別に心配なわけじゃないのよ。
ただ、ちょっとだけ私がついてないと危なつかしいしね。
シフォニシアにいるといいな・・・。

61・もう！ロロのバカ！　その3（後書き）

気が付いたら夏が終わっていました。

アルファ・ポリスのファンタジー小説大賞にこの作品をエントリーしました。

ですので、9月中に完結させるようにがんばります！

62・もう！口のバカ！　その4（前書き）

//リハ 視点です！

62・もう一口のバカ！ その4

「うわっ、すーい・・・」

聖都シフオニシア。

街全体が巨大な魔方陣となつて、結界を作つてゐる。妖精の森ほど強力じゃないけど、人間の力でこれだけの結界を張れるなんてすごいわ。

「美しい街だろ？？」

「あなたの街じゃないけどね」

「国王に会いに行くかい？」

「うーん、王国軍に聞きたいことはあるけど・・・。それよりもまずはギルドに行きましょ」

ギルドも大きいね。

しかも人がいっぱいですごいなあ。

「あら、シェルヴィ様じゃない」

うそ、ここでもこいつ人気モノだつたりするの？

「やあ、元氣かい？」

「どうしたのこんなところでー。魔王退治はいいのかしら？」

「今は仲間が必要だからね。焦らずに行くさ」

「かつこいいわー！私も行くわよー！」

「君みたいなカワイイ子を危険なところへ連れて行くわけにはいかないさ」

「まあ・・・」

「うつむかせまー。

ぐだらない茶番は置いておいて、口口の「」とを聞かないと。

「あのー、三毛猫のウォンテッドについて聞きたいんだけど……」「こりゃまたカワイイ妖精さんだねえ。三毛猫かい？あー、ああ、アレか」

ギルドのおじさんが紙を持つてくる。

「これの「」だとひつ？」

「うん、これ」

「これね、もう依頼主から手配の解除が申請されてね」

「えつー…ビュ」と！？

「さてね、見つかったのか、あきらめたのか……」

見つかったの方が可能性としては高そうね。

「依頼主って軍の人よね？」

「おや、知っているのかい？」

これはカマかけたら教えてくれそうな予感。

「うん、友達なのよ。今はビューティーかわかるかしら？」

「軍の魔道師団の筆頭だからなあ。本部を訪ねてみたらいいんじやないかい？彼女は色々なところを歩き回ってるって話だからいるけどわからぬ」

「そうね、そうしてみるわ。びつもありがと」

魔道師団の筆頭？

筆頭魔術師のことよね・・・。

どうして口口を探してゐるのかしら。

しかも見つかったようだし。

絶対になにか繋がりがあるわ！

「おや、//リラ君。なにかいい情報でも入つたのかい？」

「・・・なんですよ」

「嬉しそうな顔をしてるからさ」

「し、してないわよ！」

「それじゃあ会いに行つてみるかい？筆頭魔術師の//フリスさんに」

「なつ・・・」

なんでコイツってたまに鋭いんだろう・・・。

いつものおちやうけた感じは作つてゐるのかしら？

「シェルヴィ様ばいばい～」

意外とすごい情報網なのかもしれないわね。
ようやく口口に繋がる情報が手に入つた！
口口！待つてなさいよ！

62・もう!ロロのバカ! その4(後書き)

1日2本投下!

それくらいのペースじゃないと終わらない予感なので・・・

続けられるかな・・・。

63・もう!ロロのバカ! その5(前書き)

//リハ観点--!

63・もう一ロロのバカ！ その5

軍つてどうしていつも重たい空気なのかしら？

「南の王より勇者の名を授かつたシェルヴィ・ファンタスティックだ。筆頭魔術師ミフリス・レインボウはいるか？」

ヘボ勇者はずいぶんファンタスティックな苗字を持つてるのね。

「残念ながら、筆頭は現在魔王討伐のためにアンスピカ山脈に向かっていると報告を受けています」

「討伐？魔術師団は見たところ駐留しているようだが？」

「勇者の補佐として、筆頭が勇者についているのです」

「勇者というのは・・・三毛猫か？」

「は？いや、私は勇者の詳細までは知られていないのでなんとも言えませんが・・・人間なのでは？」

「そうか、すまなかつたね。親切にどうもありがと」

紳士モードな勇者は的確に情報を集めてくれた。

つまり、筆頭魔術師であるミフリスって女がロロを拉致つて魔王を倒しに行つたってことね。

ロロが素直に言つことを聞くとも思えないし・・・。

「「Hサカ」」

だからなんでコイツとハモるわけ！？

前振りもなしにハモるとおかしいでしょー

「つまり、ロロ君は拉致られた拳銃、Hサに釣られて魔王退治に行

つたと考えるのが妥当だな

「うう、私を置いて魔王退治に行くんじゃない意味ないじゃん……」

「そんな顔は似合わないよミラフ君」

「うるさい

「なら、僕たちもアンスピカ山脈へ向かおう」

「今から行つて間に合つかなあ」

「ふつふつふ。僕を見くびらないでくれよ

安心して。存分に見くびつてるからー

「死の樹海を越えよ」

「え？」

「このまま北に進み、樹海を抜けるのさ」

「だつて、樹海は危険だつて言つてたでしょ？」

「僕がついてるよ」

だから不安だつてことを理解してください。

「でも、それしかないのよね……」

追いつかないと。

口口が魔王と戦うつて時に私がいないんじゃ大妖精様に顔向けできないし、なによりも……。

「私がいないと……！」

「そうぞ、ミラ君がいてくれたら僕も安心だよ

いや、違う違う。

あなたはむしろ関係ないから。

「死の樹海を抜けるには、ある道具が必要なのぞ」

「道具？」

「そう、たいまつが必要さ」

「・・・冒険の必需品的なもんじやん」

「樹海の魔物は狂暴だが、火の属性に弱くてね。たいまつがあれば問題なしだよ」

「結構簡単に抜けられそうね」

「・・・だといいね」

なんか意味深な濁し方じゃない?
すつごい嫌な予感してきたし・・・。
こんな時に口口がいてくれたらなあ。
もう!
口口のバカ!

63・もう！ロロのバカ！ その5（後書き）

がんばって毎日更新！！！

64・もう一ロロのバカ！　その6（前書き）

//リハ視点です！！！

「……暗いわね」

「木々が太陽を遮っているからね」

「妖精の森はもっと明るいのになあ」

「この暗さこそが死の樹海と言われるゆえんかもしねないね」

「樹海…………ことは迷子になりやすいつてことよね？」

「あつはつは。僕が迷子になるわけないじゃないか」

「……」

「……」

「……まあ、人間はたまにはミスをするものぞ」

正直者でよろしい。

ただひたすらに暗い樹海を、たいまつのはれを頼りに進んでいく。

ここ、魔力の流れがおかしいわ。

ぐちやぐちやつていうか、ランダムに流れてて本当に自分の位置
や敵の位置が掴みにくい。

ガサガサガサ

「え、な、なに？」

「噂の主つてやつかな……」

「ちょっとまつて！ そんな噂は私聞いてないわよ！」

「あつはつは。言つのを忘れていたみたいだね。すまないすまない」

もつとすまなそうにしてほしい。

「樹海の主つてなによ？」

言った瞬間にわかつてしまつた。

本当はわかりたくないなんてなかつたのに・・・。

「がつはつはつは。樹海に人間とは珍しいのう」

木が喋つた。

違う。木の姿をしたモンスターが喋つた。

「だが、ここを通すことは許さん」

「ほら、勇者の出番よ」

「そ、そつだね。ミラ君も手伝つてくれると嬉しいんだが・・・」

弱腰のかいっ！

「魔王への道はワシを、樹木王ファーブルを倒してから進んでもらおう」

妖精の森の樹木モンスターはこんなに狂暴じやないのに・・・。
木の枝が細いツルとなつて襲い掛かつてくる。

これくらいは避けられるわ！

「ミラ君。火の魔法を使えるかい？」

「え・・・えつと・・・」

「あつはつは、想定外だつたよその返答は・・・ミラ君ならどんな魔法も使えるものだと思ってたよ・・・」

火は森を燃やす。

火は森の敵だ。

だから妖精族は本来火の魔法を使えない。

火が怖いわけじゃない。

火の魔法が怖いわけじゃない。

「ファイヤーボール！」

勇者が小さな火の玉を撃ち出す。
でも明らかに苦手そうな魔法を放つ。
ファーブルは、枝を振るうだけでいとも簡単に火の玉をかき消してしまった。

「に、逃げる？」

勇者の火の魔法を見て、私の脳裏にはひとつ トラウマがよみがえっていた。

怖い・・・。

逃げたいよ・・・。

「敵に背をむけることはできない！」

「かつこつけて死んだらかつこわるいわよ！」

「大丈夫さ！僕だって近くで口口君の戦いを見てきたんだ」

口口の戦い・・・。

なんだかんだ、口口って逃げないのよね。
・・・・・うん。

わかった。

私も逃げないよ。

「ファイヤーアクセサリー！」

私は、私自身が火の魔法を使えることが・・・怖い。

でも・・・逃げない・・・！

私が妖精族で唯一火の魔法を扱える者として、この現実から逃げるわけにはいかない！

そうだよね、口口？

64・もう一ロロのバカ！　その6（後書き）

///のトラウマについては外伝でも書いたかと思います。

65・もう！口のバカ！ その7（前書き）

三回ラスト！！！

65・もう一回のバカ！ その7

「僕の剣に火が纏つた？」

「私・・・火の魔法を使うことが怖いけど・・・がんばるーいつまでも口々に頼つてちやダメだよね！」

本来、勇者は剣術に長けてるみたいだし、敵に対抗できるようになりながら、勇者をサポートするわ。

「ファイヤーウォール！」

複数襲つてくる枝を燃やし、勇者の道を作った。

「本当は！めっちゃくちゃ怖くて怖くて！火の魔法なんて使いたくないんだからね！」

ながば半ギレで勇者にむかって叫ぶ。

勇者は小さく頷いて、一気にファーブルとの距離を縮めた。

「その程度の火をワシが怖がると思つたかあ！」

ファーブルの懷に入ったところで、ファーブルが自身をゆすった。上から葉が落ちてくる。

これつて、毒の舞いじゃない！？

「ポ、ポイズリム！？」

とつとつ、勇者の頭上に結界を開拓せざる。

「助かるよ」

「助けてない」

「素直じやなこと」『いが』『ラ君だね』

「つるせー」

早く倒しなさいよへボ勇者。

「天空へ舞い上がれ、翔天斬！」

いや、ただの切り上げでしょ。

なんでかつこつけたがるのかなあ。

でも、確かに剣はファーブルの幹を真つ二つに切り裂いた。

「やるな・・・だが・・・！」

瞬間、ファーブルの身体が黒く光った。

なんか言葉が見つからぬによつた、音を消し去つていくよつた変な光り方をしたの。

嫌な予感がよぎる。

「あ・・・」

ボガーーーン！――！――！――！

爆発。

自爆。

熱い。

熱い・・・よう。

「・・・なんですか？」

身体が・・・動かない・・・?

「なんで僕に結界を張つておいて、君は・・・」

私の身体は爆発の衝撃をもろに受け、羽はぼひひこひき飛ぶことができない。

身体のいたるところから血が出てこるような感覚だった。確認する元氣すらないが、痛みは感じない。

「シフオニシアヘ戻る!」

「・・・ダメ」

「戻らないとミラ君が死んでしまうだろ!」

めずらしく勇者が声を荒げる。
らしくないじゃないの。

「・・・ダメなの」

「なにが?!

口口・・・。

「・・・口口のもとに連れて行つて」

「口口君のもとへ?」

「あんたを・・・守つたのは・・・そのためなんだから」

「口口君がミラ君を助けられるのかい?」

「・・・うん・・・もう頃合だから・・・」

「頃合・・・?」

「はや・・・く」

「・・・わかつた」

私は勇者の手のひらの上でぐつたりとする。

勇者はもう何も言わずに山脈へと足を進め始めた。

早く、私を口口のところへ連れて行きなさいダメ勇者・・・。

ああ、眠いよ・・・。

口口・・・。

・・・バカ。

65・もう！ロロのバカ！　その7（後書き）

ミラ視点はこれで終わりです！

もっと濃い内容（わかりやすく説明の多いもの、白熱の戦闘シーン）
にしてもよかつたんですが、みんなロロのこと忘れちゃうと思つて。

・・w

作者の文章力が足りないだけだろうって？

・・・・え、ちょっと聞こえなかつたつすw

66・なにこれ、魔王の城（前書き）

□□視点に戻ります！

66・なにこれ、魔王の城

先生！ 寒いのって反則だと思います！

先生！ 寒さ対策に猫にも服を要求します！

先生！ もう帰りたいです！

「やばい、今一瞬寒さぎて変な風に備えてた」

先生って誰だよ・・・。

「なによ口口～、寒さで頭飛んじゃつた？」

「セリーヌはいつも飛んでるもんね」

「美しさが飛びぬけてるのはじょうがなことね」

はいはい。

アンスピカ山脈は相変わらず寒い。

感覚器官を麻痺させるとまだできるんだけど、寒いってこののは危険信号だからねえ。

「見えました」

「おおダンジョンの番りー！」

「懐かしいなあ」

ものすじにお城！ って感じのお城が田の前にある。

えっと、いつ来たんだっけ？

っていうか外から入るのは初めてだよね。

「セリーヌつてさ」

「ん？」

「なんでついてきたの？」

「もちろんお金になるからよ」

「ああ、ミフリスに雇われてるのね」

「私の美しさで敵もメロメロだからね」

「そんな敵は見たことないけどね」

「あらあ、口口は運が悪いのね」

「そんな思考回路になっちゃってセリーヌは運が悪いね」

ダンジョン……っていうかダンジョンだし！

入り口を入れると入り組んだようなダンジョンになってる。

ここって一本道だつたじやん？

「生きる城つてところですか」

「なにそれ」

「この魔王の城は思考し、道を自在に変化させてているのだと思いま
す」

「へえ」

「私の魔法があれば迷うことはないのですが」

ミフリスつて万能だねえ。

開けたところに出た。

「待つていたよ」

「誰？」

人っぽいけど人っぽくない感じの優男が部屋の真ん中からこちらを見ていた。

「魔王直属の四天魔してんまつて言つたらわかるかな？」

「いや、知らないし」

「これから僕たちと一対一で戦つてもいい」

「はあ？」

「君たちは見たところ3人、だが問題はない」

「なにが？」

「さあ始めよ！」

ああ、「じめん。

全く意味がわからなかつたわ。

なんでそんなに自分勝手な感じで話進めるの？

おかげでついていけないんですけど。

とりあえずサシで勝負して、勝つたら次に進める一つて感じのやつかな。

じゃあこいつを袋叩きにしたらいいんだね。

「勇者口口、日本生まれの君は武士道の心を忘れちゃいけないよ？」
「ぶ、ぶし・・・？」

かつおぶし？

なんかよくわかんないけど見抜かれたっぽい。

「む・・・そちらのお嬢さん」

「あら、私から？」

「ええ、とても美しい」

「ほらね」

セリーヌにめっちゃやどや顔された。すっげえむかつく。

「あなたもなかなかイカしてるわよ？」

「それは光榮だな。ならば、僕とダンスでもいかがかな？」

「」指名いただいやつたので、いつてきまーす」

えー、すげい軽いノリで一番手が決まっちゃったし。

なにこれ、仕組まれてない？

まあ、仕組まれていうがそうでなかろうが、全部倒す相手に変わりはないんだけどさ。

っていうかこの敵、すげいあのくせつたれ勇者に似てるから戦いたくないし。

こつちまでバカになりそう。

「セリースさん、気をつけてください」

「わかつてゐるわよー」

「セリース、きもいくらい機嫌いいね」

「あらー？そんなことないわよう。ちょちょちょとひねって、私の男にしてあげるわ」

相手・・・一応魔物だよ。

66・なにこれ、魔王の城（後書き）

四天王的ななにかとの戦いつす。

ありきたりとか言つちゃダメですよつ！

だって、今まで口口ばっかり良い格好してきたし、仲間にもスポットを当ててあげたいじゃないですか！w

でも、いよいよラストダンジョンって感じがしてきましたねー。

67・なにこれ、さわれるの？

実際問題セリーヌって強いわけ？
まともに戦つてるとこひつてそんなに見たことないしなあ。
とにかく動きが速くて、身のこなしが猫並みで秘術っぽいの使え
るつて」とは覚えてるんだけどね。

「僕は四天魔のヒューロ、お見知りおきを」

「あら、『じー寧にじうも。私はセリーヌ』

「本当に綺麗な人ですね。きっと戦い方も美しいのでしょう」「もう本当のことだからって・・・もつと言つていいわよつ」

なにこれ、会話がきもい。

セリーヌが弓を構えた。

ヒューロは小型の投剣を複数構えた。

お互い遠距離タイプらしい。

「はやくやれー」

「口口様、野次を飛ばしてはいけませんよ」

あ、ミフリスに怒られた。
なんかすみません・・・。

「いきますよ」

「いくよん」

お互いがお互いの攻撃を避け、勝負は始まった。

なんか、すげーくしゃみでそつ。

どうやらヒューロの方が攻撃速度が速いみたい。

どんどん投げられる投劍を風が流れるようにセリーヌは避ける。
避けつつも弓を構えて矢を射る。

ヒューイの投劍はどうやら魔法で実体化されたものらしく、地面
やら壁やらに当たっては消滅している。

「長期戦になつたら矢がなくなつて私不利じゃーん」

セリーヌ自らが避けつつ叫ぶ。

余裕なのかよ。

「のんきに解説しないで倒せっ！」

「野次はいけません」

「めんなさい。

「さすが美しいだけあって、戦いも可憐だ」

「違つわよー超可憐よつー！」

いよいよ調子に乗りはじめやがった。

セリーヌが投劍を打ち落とそうと矢を放つ。

投劍と矢は見事に交差し、そのままセリーヌわき腹に一直線。
確かに矢と投劍は交差し、打ち落とせたハズだった。

そもそも投げられた剣にむかって正確に矢を射ること自体至難の
技なんだけどね。

でも当たらずにすれ違つた。

セリーヌは冷静に弓を振り打ち落とす。

「あれ？」

しかし投劍はそのまま一直線に、なんにも触れずにセリーヌのわ

き腹に刺さった。

直前にセリーヌが身体を捻つたことで、深い傷にはならなかつた
ようだけど・・・。
痛そー。

「君の虚像を触れるようにする魔法リアルナイトメアと、僕の実体
を触れさせなくする魔法ドリームオアイリュージョンか、どっちが
強いかな？」

「イタタタ・・・あら、おもしろい魔法を使つんじやない」

今まで実体だったものが急に幻になつて、敵の身体に触れる瞬間に
に実体に戻してゐることだよね。
最初から幻じやないから油断できない魔法だね・・・。
あ、くしゃみ出そうなの止まつたわ。

「私のリアルナイトメアの方が高性能つてことをスーパー可憐に教
えてあげるわっ！」

67・なにこれ、さわれるの？（後書き）

今思つたんですけど、勇者シェルヴィとセリーヌってタイプ似てる気がしますw
つていうかこの物語りに登場する大半のキャラは人の話を聞かない傾向にあるようですね・・・。

え、作者はちゃんと人の話を聞くタイプですよ！
・・・会話が頭に入ってるかは内緒ですがw

68・なにこれ、超美少女・・・だれ？

セリーヌの体が消えた。

いや、消えたように見えた。

一瞬にして加速し、ヒューゴの背後を捉える。

セリーヌが俺に教えてくれた身体能力を上げる魔法だ。しかも俺よりも高いレベルで加速してるよ。

「なつ・・・」

ヒューゴは背後をとられたことに気付いたのだが、一瞬遅かった。

「へへん」

得意げな顔と共に矢を放つ。

っていうか、リルナトメアイトだっけ？ 使ってないじゃん。矢はヒューゴを貫通し、そのまま壁に突き立つ。

「驚きました」

いや、むしろひいちが驚くわ。

だって、貫かれたはずのお腹が無傷なんだもん。

「自分自身も虚像になれる・・・ってことかしら？」

「名答」

「イケメンつてどうしていやらしい魔法ばっかり使うのかしら？」

「美女には特別ですよ」

「ん？ もう一回言つて？」

「美女には特別なんです」

「違つわよー超美少女には特別つて言つわよー。」

褒めてもダメなのかよ。
もうヒューゴがかわいそうだよ。

「ふふ、おもしろい方だ」

違います。変な人の間違いです。
ヒューゴは変わらずに、手の中に投劍を一本ずつ生み出しほりー
ヌにむかって投げる。

「ひおひ

セリーヌが避けたひとつが俺のすぐ横で消滅した。
飛んで来た風が俺の鼻をくすぐる。

「なーるほッビー」

セリーヌはにやりと笑い、矢を一本構えた。
投げつけられるナイフに向かつて矢を放つ。
一本の内、一本はナイフを叩き落し、もう一本はそのまますり抜
けて直接ヒューゴの元へ飛んでいった。
一方でナイフはセリーヌにむかって飛んで来ている。
お互い、自分たちの攻撃を華麗にかわした。
そして間髪入れず、セリーヌは矢を再びヒューゴが用意した投劍
の数よりも一本多く構えた。
ヒューゴは躊躇^{ためら}わざに剣を投げつける。

「ぶうわっくしょにや————!!!!」

「はい、くしゃみでた。

「くつ、どうして・・・」

なにこれ、勝負ついたの？

くしゃみで全然わからなかつたし。

鼻をすすすーっと吸つてから口を開けると、地面に這いつくばり苦しそうにしているヒコーゴの姿があつた。体中に矢が刺さつて、見るからに痛そう。なにが起きたの？

「もつとひまく隠さないとダメよん」

「・・・・・・」

「あなたの魔法は一度にひとつの対象にしか魔法を掛けられないんだから」

這いつくばるヒコーゴの背中から、一本だけ突き抜けた矢が見えている。

ちよづど胸のあたりに刺さつたやつだ。

「よく・・・核のことを」存知でしたね・・・

「魔物ハンターの私を見ぐびらないでよね」

もつもつと俺にもわかるように話をじてほしんだけど。

「ねえミフリス。核つてなに？」

「それよりも口口様、他人の戦闘中にくしゃみなどの中力を乱す行為はいけません」

はい、「めんなさい。

68・なにこれ、超美少女・・・だれ？（後書き）

あえて空氣を読まないこと それは笑いの原則である。

昔の偉い人が言つていましたね。

このことを「AKY」と呼ぶようになつてから何十年経つたのか・・・

・。

ええ、造語ですかなにか？

69・なにこれ、心臓＝マタタビ

「核とは、人間で言う心臓のことです」

「猫で言えば？」

「マタタビのことです」

「なるほど」

「すげえわかりやすかつた。」

つまり、ものすっぽい大事なモノってことだね。

「核を失つた魔物は、新たに魔力を生成することができなくなるのです」

「へえ、死はないの？」

「魔物は基本的に人間と同じで、魔力で生きているわけではありません。それに、魔法自体も魔力の貯蔵庫的なところに貯まっているため、そこが空になるまで使うことができます」

「ふーん」

ミフリスは物知りだなあ。

「僕も・・・最後の抵抗くらい・・・させてください」

ヒュー「口はようめきながら立ち上がり、小さな投劍ではなく大きな槍を具現化させた。

「大きなものの具現化は大変なんですよ」

「あらら、これじゃあ矢で打ち落とせないわね」

相変わらずのん気なセリーヌ。

おいおい、大丈夫なのかよ。

「せつかくなので、喰らってください……！」

思いつきり投げられた槍は、途中で急加速をした。
人間の避けられる速さじゃない。

「リアルナイトメア……！」

セリーヌは今まで呪文を口にしたことがない。
少なくとも俺は聞いたことがない……と思つ。
言葉にして、両手を前に付き立てた瞬間、なにかにぶつかる音を立てて槍がセリーヌの目の前で止まつた。

「なにがっ！？」
「さて、なんでしょう？」

なんだろー？

まあ考えるつもりは毛頭ないけど。

「ヒントは、触れないものを触れるようにする」と
「まさかっ・・・！」
「本当にわかつてる？ まさかって言えば解答もりえんと思ってない
？」

あ、俺はそれ思つてる。
バレたかー。

「空気を実体化したのですか・・・」
「大正解！ よくわかつたわねえ」

なるほどね、空気を実体化ね、考えたね。

・・・で、なにそれ？

「あんたの虚像にする魔法の方がひとつの中身に対しては私のリアルナイトメアを上回ってたようだけど、あんたのは対象がひとつだし、再度使う場合にほんの少しだけタイムラグがあるようね」

「お見通しつてことですか」

「私は美人な上に頭もいいのよ」

「さすがですよ・・・」

「でも、最後にその魔法から逃げた、それがあなたの敗因よ

「うお、かっけえ！

そのセリフ俺のパクリっぽいし！

「まさか何もないところから具現化させる魔法を使えるなんて思わなかつたわ。両方の魔法を使えることにびっくりしたもん」

「はは・・・あなたには完敗です。先に進んでください・・・」

「私のことを褒めてくれたのは・・・うれしかったわよ」

「当然です、セリーヌ」

「今度はもつともつと褒め上手になりなさいね」

セリーヌは滅多に見せないような照れた表情をしてヒュー、「」に背を向けた。

セリーヌって実は褒められることにあんまり耐性ないのかもね。

「ほ、ほらっ！次の部屋行くわよー！もう！刺されたわき腹が痛いんだから！」

「あーー！」

「はー！」

ミフリスは少し羨ましそうな顔をしてセリーヌの後をついていった。

人間ってよくわかんないね。

俺はミフリスの羨ましそうな表情が何に対しても何に對してなのかさっぱりわからなかつた。

70 - なにこれ、覚え・・・てるよ

「あら、3人いるってことはヒュー！」は負けちゃったのね」

次の部屋で待ち受けてたのは・・・子供?
つていうかこの声、聞き覚えが・・・?

「覚えてないの? 猫さん」

えっと・・・あ！

「リュック……」「……」

セリーヌとミフリスは誰こいつつて顔してる。きっと俺も誰こいつつて顔してたんだと思う。

「商人の娘のリュカだよ！」

「ほんとう?」

「モチロン」

つていうかなんでJ-みんなJ-J-J-C-H-E-I-N-W-E-K-E?

「もしかして、まだロロちゃんは気付いてないの？」

۷۰

「私、魔物なんだよ？」

卷之二

だつて最初に拾つてケージに閉じ込めた親子の娘の方でしょ？

「一番最初、召喚されてまもなく捕獲したのは私だよ」

「初耳です」

ミフリスが口を開く。

「寝てたつて猫を捕まえるのが容易なわけないじゃん。ミフリスのお姉ちゃんの元から引き離すために魔法を使って捕まえたんだよ」

「聞き捨てならないですね」

「あれあれ怒っちゃつた？私悪い」としてないもんつ」

まるで挑発するよつこ、リュカはにんまりと笑つてみせた。
そこでもうひとつ聞いてみた。

「湖の港町で会つたのも偶然じゃないってこと？」

「もちろん。山賊の事件も私が企んだ作戦だよ。タロのお馬鹿さんが想定外だつたけどね」

それつて勇者の方？魔物の方？
まあどつちもどつちだけど・・・。

「なんのために？」

「それは・・・言えないよ

「なんで？」

「乙女の秘・め・ゴ・ト・」

可愛らじく言えばなんでも許されるとでも思つてんのかクソガキが。

つていう顔を隣のミフリスがします。怖いです。コワイです。

「 ハハは私が行きまー」

ミフリスが一步前へ踏み出した。

「 ここの魔物がいなければ、もつと早くこ魔王を討伐できていたかも
しれないのに・・・」

「 リュカって名前があるよつー」

「 魔物は魔物！私はあなたたちを認めませんー」

「 やだー、おばさんが怒ったー」

「わあ、面つよいの娘。

さつさまでお姉さん扱いしてたのに急におばさん扱いとかあんまりすぎでしょ。

別にミフリスだってまだおばさんだなんて言われる歳じゃないだろつこ・・・。

髪の色は変な色だけ♂。

「 じゃあおばさん。勝負しよう」

「 おばさんじやありませんし、負けませんーー」

「 こんな殺氣めいたミフリス見るのは初めてだわ・・・。
マジで怖い・・・。

70・なにこれ、覚え……てるよ（後書き）

リュカちゃん登場！！！

まさかの四天魔でしたー。

だって、出番があれだけだとかわいそつだつたし……w

71・なにこれ、俺の質問に答えてくれる人がいない

「私がおばさん」ときに負けるわけないしー」「

ミフリスの顔がピクピクっと動く。
よくわかつてないけど、ミフリスってなんか筆頭まじゅちゅしとかいうやつで強いんでしょ。
ならそりそり負けないでしょー。

「私は魔物に負けないために強くなつたので、負けるわけにはいきません」

両親を魔物に殺されたから恨んでるんだっけ?
俺には、気付いた時から親なんていないからよくわかんないけどなあ。

でも、ミラとかが目の前で殺されるのは見たくないかも。野良猫時代にはよくあることだつたけど・・・。

「ブルームーン!」

ミフリスが魔法を唱える。

人の頭くらいの大きさの青い球体が静かに現れた。

「アンチマジック!」

青い球体に変化が起こる前に、リュカが魔法を放つた。
つて何も起きないけど?

「なるほど・・・」

なにが？

すると、青い球体は一瞬にして消滅した。

魔法が碎けてなくなるとことが初めて見たし。

「相殺ではなく・・・反魔法秘術ですね」

なにそれ。

また難しいの出てきたよ。

「よく知ってるのね」

「魔物の分際で秘術なんて使わないでほしいです」

「何が魔物で何が人間かなんて、決めてるのはいつも人間なのよね」

「なにが言いたいのですか？」

「べつにー」

ミフリスの体の周りに球体状の魔方陣が描かれる。

「ダークファンシー！」

闇に包まれ、すーっとミフリスの体の中への消えていく。

「前にも使ってなかつたつけ？」

俺の質問に答えてくれる人はいませんでした。

セリーヌは前の戦いで刺されたお腹をさすりながら座り込んでる。

「インデイグネイションー！」

急に雷のような電撃がリュカに降り注ぐ。

「アンチマジック！」

それも消滅する。
どうやらあの魔法は魔法を消すことができる対魔法使い用の魔法らしい。

今魔法って何回言った？

「困りましたね・・・」

「私からも仕掛けちゃうみん」

リュカは思いつきり跳躍し、一気にミフリスの懷までもぐりこんだ。
そして一閃。

「くつ・・・!」

拳を振り上げる。

ミフリスはなんとか身を反らして避け、距離をあけようとバックステップするが、それをさせまいとリュカが距離を詰めてきた。

「魔道士は遠近両用で戦えるモノが多いなんて言ひつけども」

リュカがにんまり笑う。

「結局は魔法頼みなヤツが多いのよ、ねー！」

左フックがミフリスの頬を捉え、ミフリスは大きく飛ばされる。

「痛いです・・・」

立ち上がるミフリスの右頬は・・・無傷だった。
確かに殴られてたよね？

「ちょっとーーどうこいつことなのー!？」

リュカの右頬が赤く腫れあがっている。
どうこと？

自分のダメージを相手に移せるのか、与えてきた当人に對して反
射しているのか・・・。

なんか、最強の防衛魔術保持者同士の戦いって感じだね。
長引きそうで眠くなってきた・・・。

71 - なにこれ、俺の質問に答えてくれる人がいない（後書き）

小説を書く時間と気力をください！ w

リュカとミフリスの戦いは色々な意味を含めています。

正直、ギャグ小説には不似合いなほど深いので、考えなくて結構です w

72・なにこれ、死んじゃダメ！

女同士の醜い拳と拳の戦いが始まつてゐるよー。
醜いとか口に出したら俺が醜い姿になる可能性があるから絶対に
言えないけどね。

「てあつ！」

リュカの下段蹴りをその場で飛び上がってかわすミフリス。
そのままに上段回し蹴りを放ち、リュカを吹っ飛ばす。

「なんか私の方が不利な気がしてむかつくな

リュカが頬を膨らませた。

確かに、リュカが与えたダメージはなぜだかリュカに帰つてくる。
一方のミフリスが与える物理ダメージはそのままリュカにいく。
なんかこんがらがつてよくわかんないけど、ミフリスがなんらか
の魔法で優位に立つてるってことだよね。

「ロットウォーターアローー！」

複数の細かい水の矢が出現し、リュカを襲う。
俺がよく使う水の矢と似ている。
ミフリスにパクられたー。

「アンチマジック！」

瞬間、全ての水の矢が崩れて消滅した。

「やはり、ダメですか・・・」

「うん、ダメだよ」

「では・・・」

ミフリスがなにかを言つと、ものすごい速さでココカとの距離を縮める。

たぶん身体能力を上げる魔法を使つたんだと思つ。またパクられたー。

「アンチマジック！」

一瞬で速度が落ち、近付ききる前にミフリスはブレーキをかけた。そこを見逃さず、リュカの方から距離を詰めてミフリスにボディーブローを食らわせた。

「うつ・・・なるほど・・・」

「あれ、特に私にはダメージないし。もしかして見破れたってこと？」

「どうでしょうね・・・」

この時点では俺なら戦い方のレパートリー少ないからギブアップするね。

でもミフリスは迷わず懐から短剣を取り出し、渾身の力でリュカにむかって投げた。

「//アーティム！」

短剣が複数に分裂する。

「アンチマジック！」

だが、分裂している途中で偽者の短剣は消滅し、結局投げた一本のみがリュカにむかっていた。

それをリュカは片手でキャッチする。

投げられた剣をキャッチするとか異常でしょ。

つていうか魔法がどれも効かないことに加えて、相手の体術が半端ないとか弱点なくね？

「武器くれてありがとー」

「いいえ、どういたしまして」

あくまでミフリスは冷静だ。

でも武器持ったリュカとか絶対危険だと思つんだけど・・・。

「ていつ！」

今度はその短剣をミフリスにむかって投げた。

「うそつー！？」

思わず俺も声が出た。

だつて、ミフリスがなにもせずに胸の位置で短剣を受けたから・・・。

もう諦めちゃったの？

つていうか死んじゃうのミフリス？

なんか・・・ソレは見たくないなあ・・・。

変な髪の色だけど、色々と説明してくれていい人だつたし。

俺の目の前で仲間が死ぬなんて・・・許せない！

72・なにこれ、死んじゃダメ！（後書き）

ちょっと、ハードな戦いすぎてギャグを盛り込むことができませんでした。次回はさらにシリアスーな笑いなしーな展開になってしまいそうです。

73・なにこれ、策士

「これだからおばさんて・・・嫌いなのよー。」

その場で崩れ落ちたのはリュカだった。
どうこと？

ミフリスの胸にはまだ短剣が刺さつたままだ。

「ぐつ・・・・!」

ゆつくりと自分で短剣を抜く。

「私の核・・・壊れちゃつたじゃない！」

リュカが怒りの目でミフリスを見るが、ミフリスは辛そうな顔をしている。

つていうか本来死んでもおかしくないんだけどね。

「もう怒ったよー! 粉々の塵になっちゃえぱいいのよーーー!」

そう言つて大きな魔方陣を展開する。
発動にこれだけ時間掛けてるのに、ミフリスはそれを止める動作すらできぬいでいた。

「ミフリス! ムリしちゃダメだぞ!」

「大丈夫です・・・私は絶対に負けません・・・!」

「あの子・・・すごいね」

今まで黙つてたセリーヌが口を開いた。

結構セリースもさつきのダメージが辛いのか、変に汗をかいている。

なんか、満身創痍な奴らばっかりだ・・・。

俺だけ超元気なんだけど。

「メテオゼロ！…！」

核が壊れたって言つてたから、最後の魔力を振り絞つて使う大技なんだと思う。

ものすごい大きな火の玉が頭上から降り注いでる。ここからでも熱いし。

「くつ・・・・」

ミフリスはその火の玉を辛そうな顔で見ているしかできない。
やばいよ!!これは!

「ミフリス！」

俺が魔法を使おうとして、

「ダメです口口様！…！」

今までで一番大きな声で怒られた。
なにがダメなんだし。
死んじゃうじゃんミフリスが！

「私は・・・必ず勝ちます・・・！」

でも何かをする気配はない。

「もう死んじゃえー！」

リュカが満面の笑みでマフリスを見下す。

「ぐう・・・！」

火の玉はそのままマフリスにぶつかった。
ウソだろ・・・。
あれじゃあさすがに生きてるなんてムリだよ。

「あっ、あ、あ？ああああ！…！」

リュカの声が響く。

え？ なんで？

「私の・・・体が・・・焼ける！？」

ちりちりとリュカの肌が焼けていく。

「ハッ！？そ、そつのね・・・？あんたが使った魔法・・・」

ほぼ同時だつた。

「バブルウォーター！」

「アンチマジック！」

水の泡によつて火は一瞬で消え去り、出てきた水の泡も一瞬で消えた。

「私の……かわいい顔が少し焼けちゃつたじゃない……」

「…………ダークファンシー」

ミフリスがボソッと呟く。

「あああああああああ……！」

「うううううううううううううう！」

同時にミフリスとリュカの声が木霊する。
なにが起きてるのか全然わかんないし。
そこに立っていたのは……ミフリスだった。

「私は……負けません！」

リュカは氣絶し、その場で倒れている。

「なにが起きたの？」

素直にミフリスに聞いた。

「ダークファンシーという魔法が鍵だったのです

「うん？」

一番最初に自分に掛けてた魔法だよね。ものすごい魔方陣が出てたけど。

「あの魔法は、外傷のみを相手に返す魔法なのです」
「リュカの攻撃でリュカの頬が赤く腫れたアレ？」
「そうです。骨折や、出血など、外傷のみを返すのです。自分では気付かぬままにダメージを負うことになります。しかし、この魔法

は痛覚自体は相手に返されません

「ミフリスは散々痛い思いをしたってこと?」

「・・・はい。これは精神との勝負でした」

「俺なら絶対にすぐギブアップするわ。そういうえばリュカの核が壊れたのつて外傷を返せるからなのかあ」

「そうです。そして、リュカの魔法アンチマジックは、術者が認識する魔法を全て消滅させる魔法です。なので、気付かれないように動く必要がありました」

「ふむふむ、敵の攻撃避けたりしてたのはそのためね」

「はい。最後に、ダークファンシーのもうひとつ効果は、自分の受けたダメージ(痛み)をそのまま相手に返すこともできるというものです」

「だから、最後その痛みでリュカが氣絶したってこと?」

「ただし、そのまんまのダメージが術者にも施されます」

「え!~?ミフリスはリュカの二倍のダメージを受けて、まだ立つてられるだけ余裕があるわけ?」

「・・・余裕はありません。これほどの痛みを伴ったのは初めてです・・・」

「復讐・・・?」

「いえ、復讐もそうですが・・・口口様のために・・・魔王を撃ち滅ぼすために・・・」

きつと、仲間のためにって言いたかったんだろうね。

そのままミフリスはその場に倒れてしまった。無傷の体で・・・。

「口口君!~」

うわっ、どつかで聞いたことのある声が急にしてきた。

幻聴だよね!?

気にしなくていいよね!?

つて、いつか幻聴であつてくださいー！

「やつと見つけた！……」

あの勇者が走つて俺の元へ来る。
カンベンしてよ・・・もう。

73・なにこれ、策士（後書き）

今回はいつもより文字数が多くなってしまいましたへへ；

説明しながらの戦いにしたいのですが、今回は敵にバレてしまうと
全く意味をなさなくなってしまうような戦法だったのです・・・
まあ、いつも通り無理やりな戦いってやつですねw

74・なにこれ、封印

「お前……一緒にいたのに守ってやらなかつたのかよー?」

なんだよウソをこなあ。

「……口口?」

つて、え?

なにこれ、//セモ死にセウジヤン。
どうしたの?なんで?

「お前……一緒にいたのに守つてやらなかつたのかよー?」

思わず観者に当たつてしまひ。

「……すまない。僕が不甲斐なかつたせいだ」「……口口……お願い……私の近くにきて」

勇者がしゃがみ、//の乗つた手のひらを俺の皿の前に置く。

なんで?死ぬ?
なんかさ、ずっとこんなばっかりじやん。

どうしてなの?

なんでみんな笑つてないの?

俺が……悪いのか?

キューイーンー

「つまつー」

瞬間、俺の首から提げている赤いお財布が光った。つていうかお財布を首に提げてたのとか忘れてたし。

「口口、ありがとう」

あれ？

どちら様？

「ミラだよーあからわまにあんた誰?つて顔しないでくれる?」

田の前には普通サイズの妖精族の少女が座っている。

ミラ?

うん、確かに容姿はミラだ。

どう見ても妖精族の子供なんだよね。

「大きくなつても小さいね
「つるつるー!」

いてつ、頭叩かれたし。
勇者は呆然としている。

「みんな辛そうね・・・少しだけなら楽にさせあげられるよ」

ミラは自分の手のひらを広げ、なにやら呪文を唱え始めた。
柔らかい風が通った気がした。

「あれ、痛くない?」

セリーヌの傷から血が出なくなつたらしい。

「//」

ミリスが目を覚ました。辛そうな表情はしていない。

「//君・・・なのか」

相変わらず勇者は呆然としている。
さつきまで大怪我をしていたミリスは、すでに元気だ。

「俺のお財布の中つて何が入つてたの?」「自分で見たことないわけ?」

「自分の首元のものを自分で取れるほど器用な生き物じゃないので
「いーい、口口?頭を使えば猫だつて取れるはずよ」

「そゆのいいから教えてよ」

「もつ。えつとね、赤い魔石を入れてたのよ」

赤い・・・?

「闘技大会の賞品だね?」

勇者が答える。

あーあー、あつたあつた。

「あれには、まだ魔力がちゃんと充填されてなかつたのよ。元々私
とプリシアを封印した石だつたんだけどね」

「それで?」

「口口からは魔力が滲み出てるの。だから、口口の首元で石に魔力
を充填させてもらつたつてわけ」

「なんか・・・俺つていよいよに使われたわけ?」

「やつる

納得いかねえ。

「なんだよソレー。俺は封印されたままの//ツを//あげたのー。」「だから・・・」こんどは・・・
「ん?」「

ゼンツゼン聞き取れないし。

「だからー。今度は私が守つてあげるー。って言つたのー。」

「・・・・・誰を?」

「・・・・・口口を」

「・・・・・」

「・・・・・」

「断る」

「なんですよー!」

だつてたぶん俺の方が強いしー。

「封印を解いた私は妖精族で一番の魔法使いよ
「知らないよ」

「もうー。口口のバカー!」

「あれ、そういうえばプリシアはどうなつむやつの? 封印解いたんで
しょ?」

「プリシアはもう口口が倒したじやない?」

「ああ、そつか。この世界に来て初めての恋の相手だったなあ・・・

「なつ・・・!」

ミラの表情が歪んだ。

なんで？

つて、ミラが俺を持ち上げる。

「ほ、ほらー次行くわよー。」

74・なにこれ、封印（後書き）

小さな妖精だつたミラが子供サイズくらいの妖精になりました。
ミラは小さな子なんです！！でもいちおう大人だと思いますw

75・なにこれ、//リ無双？

「よく来ましたね」

次の部屋に入ると、すごいオーラを放つたお姉さんがいた。
なんか見たことある気がする。

「女王様……やつぱつ」

ああ！妖精族の女王だ！

「//リにはバレてしまつていましたか」

「私はもう、全てわかつてゐるつもりですよ」

「ならば、私の相手をしてくださいませ、//リなのですね？」

「……はい！」

あれ、そういえば、なんで勇者たちは//リに来れたわけ？

「ねえ、結構迷つたでしょ？//リまで」

「いや、一本道で驚いたくらいだよ？」

「どうじと？」

「先ほども言いましたが、この魔王の城は生きているのです」

さすがミフリス先生！

それで？それでー？

「私たちが通つた後、道が変わつて一本道になつたのでしょうか？」

「おかげで追いつくことができたんだよ」

「ふーん。ずいぶんうまくいくんだねえ」

「・・・そうですね」

ミフリスはなにかを考え始めてしまった。
まあ、俺にはどうでもいいことだね。

「ミラ、がんばれー」

「言われなくともがんばるわよっ」

「ふふつ、とても良い仲間に恵まれたようでなによりです」

「会つたことない人が二人ほどいますけどね」

「大地の精霊よ、木の精霊よ、緑の精霊よ、我の元に集い、我的力となれ」

なんか難しい呪文みたいなのを女王が唱え始めた。

「グリーンウッズファームー！」

なにもない質素な石造りの部屋が、木々に覆われ始める。
なにこれ、急にょきにょきしたし。

「さあ、木々よ、敵を殲滅しないでい」

「私の相手は木ばっかりだなあ」

木々が奇妙に動き、ミラを襲う。
ミラは動かずに両手を広げた。

「ねえ、女王様」

「なにでしょうか？」

「私、封印が解けてから間ないので、力の操作が曖昧なんです」

「そうですか」

「だから、もしかしたら一瞬で勝負がつっちゃうかもしれませんよ

？」

言つなり、木々の動きが止まる。

その場よりも先に行けないといつよつた動作になる。

たぶん結界が張つてあつていけないんだと思つ。

「さすがミラですね。でも、私も魔王より授かつた力があります」
「そつ?…じゃあ先に使つてください」

うわ、ミラが挑発的だ。

女王の眉間にピクンと動く。

「ならば…・グランドバースト…」

ミラの結界の中の地面がうねり出す。
そして、地面がミラを埋めよつと襲う。

「//…・終わりです…」

地面がミラを囲み、そして

ボオオオオン…!…!

爆発した。

反則でしょアレ。

「それだけですか?」

ミラの声。

埃の煙の中にミラのシルエットが見える。

埃が晴れ、傷ひとつないミラが、女王を睨んで立っていた。
あれで無傷つて・・・ミラ強すぎ。

75・なにこれ、//ツ無双？（後書き）

//ツ強こよ//ツ。

ロツ＝最強は素晴らしいですよー。

76・なにこれ、青い炎

「なんと・・・」

女王は動搖を隠し切れないでいた。
いや、ふつーは死ぬでしょ。

「女王様、私は妖精族です」

「私もそうです」

「妖精族としての誇りがあります」

「私にだつてあります」

「魔王の手先になる」とのどこに、誇りがあるというのですか！？

さすがに怒つてるなあ。

「何もわかつていな」ようですね//。妖精族だつて、魔王が生み
し種族なのですよ？」

「ちがうつ！」

「違ひません」

「それでも、私は口口を討つことなんてできない！」

ミラの口調が荒くなる。

確かに、妖精族つてどういう立ち位置なのか微妙だよね。
人間を襲うわけじゃないけど、人間じゃないし。

「ならば、私を倒してみなさい！」

「言われなくとも・・・そうするわよつ！..」

ミラが手を振りかざし、魔力を込める。

「ブルーフレア！……！」

なにこれ、青い炎？

女王が召喚した全ての木々が焼き払われる。

そして、その青い炎は女王を焼こうと意思を持ったように動き回る。

「火……ですか。忌々しい……」

「私は火に負けない！負けないって決めたの！」

突然地面からツタが生え、ミラの体中に巻き付く。

「うつ……」

ツタは枝となり、みるみるうちにミラを取り込んで木になろうとしている。

同時に、青い炎は女王の身体を蝕むしばみ、その身を焦がしていった。

「ミラ……！」

「ロロロ……」

俺の名前を叫ぶと、ミラは自身を発火させた。

ミラを縛る木も一緒に勢いよく燃える。

熱そうとかそういう問題じゃないし。

大火事もいいところ。火傷で済んだら猫もびっくりだね。だんだんと炎は弱まり、ミラが膝についてその場に座り込んだ。なんか見た目は傷がない。

「お……おのれ……！」

青い炎せすゞへ苦しみつめく女王を、跡形もなく焼き飛べ
た。

なんで//トは無事なの?

「結果のプロをなめないでほしごわね」

「//ト……す」「こじょん…」

なんとなく褒めてみた。

「えへへ」

へへ、//トって素直に笑う」ともあるんだねえ。

「や」や俺が//トを見っこると、

「これへりご当然でしょー」

なんか怒り始めたし。

よくわかんないねー。

結局妖精族とかもよくわからなかつたし。

あの女王から魔王倒せとか言われてたのこさ、一体なんだつたわ

け?

あーもう。

いろいろ考えるのがほんとこめんどくくなつてきたわ。
つことで、次の部屋へ行つちやおー。

76・なにこれ、青い炎（後書き）

ラストへむけて、いよいよ最後の四天魔ですね！
もちろん戦うのはあの・・・。

77・なにこれ、スルー

「次は、僕の番だね」

勇者がいきなりしゃしゃり出でてきた。

「どうぞ」

俺は素直に譲る。

「ぐふえふえふえふえ！お前が相手かー！」

なんかすごくバカそうなヤツのいる部屋にきちやつたし。
勇者もバカだから、ちょうどいい対決になりそうだね。
団体がものすごい大きな魔物。

「俺は四天魔最後の大ボス、キングオーケのジョルジューだー！」
「僕はシェルヴィ。君を倒す者さ」

さつてと、俺は次の部屋にでもいこつかな。
勇者の戦闘とか興味ないしねー。

剣と剣のぶつかり合づ音が木霊する中、俺はふつーに横切る。

「口口君！先に行くんだー！」
「え？うん」

わかつてんじゃんか！

めずらしく空気の読める発言をした勇者に感動しつつ、俺は次の
部屋へ向かう。

死んだら俺が火葬してやるからな・・・。

適当に思いつつ、ミリハ、セリーヌ、ミフリスに気づかれないようここにそりと次の部屋へ入つた。

「やあ、よく来たね勇者口口」

「久しぶりだな！魔王ハゲル！！」

かつこよくキメた。

「いや、ベネルだから」

冷静につっこまれたし。

覚えてたけどあえてボケてみた俺つてかつこいいよね。

「口口。少しば強くなつたかい？」

「まあ・・・ぼちぼちね」

「僕の用意した道を通りてきてくれたみたいだね」

「は？」

「妖精の森の巨人、闘技場のゲート、盗賊の一件、渓谷のレベッカ

「なんで知つてんの？」

「全部僕が部下に命令して実行したことだからだよ」

「リュカとかに？」

「そうだよ」

「なんで？」

「口口に強くなつておひるのために」

「どゆこと？」

「僕を倒してもらつためだよ」

「ドムなの？キモいんですけど」

「・・・・・・君は勇者だね？」

「さあ？」

「以前、勇者のシステムについて話したことがあったたね。覚えてるかな？」

「…………うん」

すいません、ほとんど寝てました。

「この世界の魔物は勇者の出来損ないさ。動物から培養したもの、植物から培養したもの、人体実験の結果生み出されたもの・・・様々さ」

「それで？」

「バカバカしいけどね、勇者は魔王と魔物を倒して初めて勇者、英雄なんだよ」

「だから？」

「君は勇者にならなければならぬ。だから、僕を倒さなければならぬんだ」

「ちょっと理屈がよくわかんないんだけど」

「よつは、戦おうってこう話だよ」

よつはよつはよつはよつ」とね。

俺は体勢を低くし、身体能力を上げる魔法を自分に掛けた。

魔王の言つてゐる意味はよくわからぬけど、とにかく戦うしかな
いっぽい。

77・なにこれ、スルー（後書き）

「うぞうたい勇者」ショルヴァイの戦闘は割愛します。w

だって口々の興味がなかつたんですからしづがありませんよね。
ついに魔王との戦いですが、戦いながら歴史の話を盛り込めたらいいなと思います。

78・なにこれ、魔王強すぎ

相変わらず子供の姿の魔王は、片手を振り下ろしただけで俺のいたところに穴を開けるほどえげつない。

「君はイレギュラーな部分が多すぎるみたいだね！」

言いつつ魔法攻撃を絶やさない。

「僕は目覚めてからすぐに状況を把握せざるを得なかつた。なぜなら、魔王には魔王という役割を担うための知識を頭に植え付けられるからや」

俺はミリの結界を真似しつつ、極力避けるように上下左右に飛び跳ねる。

「六大賢者というのを聞いたことがあるかい？ その六人の魔法科学者が僕たちのシステムを作り出したんだよ」

なんか聞いたことのあるようないような単語がでたし。時折光の矢で反撃するも、全て相殺されてしまつ。

「君のイレギュラーな要素のひとつ、まずは猫といふこと」「うつさいわ！ 存在否定すんなし！」
「そして二つ目、弱い」

「うえ、俺つて弱いの？
結構ショックだし・・・。」

「弱いが故に、強くしなければならなかつたんだよ」

「さつき言つてた道つてやつ？」

「やつさ、全て僕が用意した道だよ」

「リラたちに会つことも？」

「そうだね、ほとんどほシナリオ通りだね」

そんなわけあるかっ！

「最後に、魔王に勝てないこと・・・だよ」

「は？ やつさ自分を倒せ的なこと言つてたじやん」

「君が元の世界に戻りたいのなら、つてことだよ」

「意味わかんないし。別に俺は戻りたいわけじゃないけど・・・」

瞬間、魔王が両手を自身の上にかざして闇の魔法を凝縮する。

「でも俺が負けるわけないじやん！」

俺も光の魔法を凝縮する。相殺狙いじやない。

お互いが魔法を放つた瞬間、俺は後ろに飛び退いた。

「ほら、自分でわかつてゐるじゃないか口口

うん。今のはさすがにわかつたわ。

とてもじゃないけど勝てない。

俺のいたところの床は綺麗にえぐれでいる。完全に力負けをした。

「僕が強すぎるのかな」

「言つてみよ」

でも・・・ムツツモセツだし。
やつぱり帰るつかなあ。

「特別に教えてあげるよ。勇者の役割はね、魔王を倒して『』の研究施設にある勇者システムをリセットすることなんだよ」

「リセット?」

「やべ、やつする」とまた百年後に一定の魔力を糧としてシステムが発動するようになる

「召喚の儀式ってやつ?」

「そうや。勇者ならわかるはずなんだよ本来はね

「俺はわかんないけどね」

「イレギュラーの塊だからね」

イレギュラーラーイレギュラーラー「るわいなあ。

そもそもイレギュラーラーってどいつの意味なんだよー。

よくわかつてないけどわかつてゐフリして会話しちゃつたじやないか!

いか! た、食べ物じゃ・・・ないよね?

78・なにこれ、魔王強やあ（後書き）

やつぱり魔王強い！――！

79・なにこれ、イレギュラー？

「ううええす、俺が勝てない現状にある」とはわかったわ。

「ああ、結着をつけよつ。僕が勝ち、僕が勇者を召乗り出であげるよ」

「なんださ」

ふと、疑問が浮かぶ。

「なんで、システムのすぐ近くにいるお前はすぐにシステムをリセットしなかったわけ？」

「簡単なことだよ」

「なに？」

「システムをリセットすると勇者は元の世界に戻れるのを」

「じゃあなんで・・・？」

「ただひとつ問題なのが、それはひとりだけってこと」

「つまり、勇者か魔王かひとりしか帰れないってこと？」

「そう」

「じゃあさつさと帰ればよかつたじゃん」

「この世界にいる勇者と魔王が共存している状態だとね、強制的に一人とも送りうとシステムが働くから」

「そうするとどうなるん？」

「ふたりとも時空の狭間で永遠をすうすことになるだらつね」

「なるほどね」

つまり、魔王ベネルは自分の家に帰りたいとか。

「やつぱぱ子供なんだね？」

「僕がかい？」

「うん、家に帰つてお母さんに会いたいんでしょ？」

「ははは、そうだね。そつだよ。元の世界に帰りたいに決まつてゐ
じやないか」

「そうなんだね・・・。

「だからーだから僕たち魔王は勇者を倒そとがんばるんだ！」

「じゃあどうして最初に会つた時に俺を殺さなかつたの？」

「元の世界に戻るシステムの魔力は、倒れた方の勇者が魔王から搾

取されるからだよ」

「ああ、あの時点じや俺の魔力だとシステム発動には足りなかつた
つてことね」

「それもショックだなあ。

「今なら大丈夫だ。だから・・・死んでくれ口口！」

軽く千本くらいの闇の槍が出現し、四方から俺を射貫こうと向か
つてきた。

うはっ、これは避けられないわ。

思わず目を瞑つた。

「ダークシールド！！」

あれ？ 生きてるっぽい？

肉球を開いたり閉じたりしてみる。
生きてるよ俺。

「もうー口口のバカ！！！」

あれへ//の声？

「いや、そり行つちやうとかびりこつ神経してゐるのよ。」

「ほらほら、お姉さんが華麗に綺麗に助けてあげるよ。」

「魔王討伐のサポート、お任せください」

「ああ、三人とも来ててくれたんだ。」

せつかく、巻き込まないようこいつをやり来たのこそ。

「あれ、クソ勇者は？」

「まだ戦つてゐよ」

見捨ててきたんだね。

「君たちも僕にとっては十分イレギュラーなんだよね」

ベネルがくくくと笑う。

「よくこんな強くて良い仲間を手に入れたよね
「シナリオ通りじゃないの？」

「彼女たちは、口の影響を受けてさらなる強さを手に入れてるつてことに気付いた方がいいと思つよ」

俺の影響？

「さうか、おもしろいね口。やっぱ君はイレギュラーだよ

イレギュラーはおもしろいものなの？

79・なにこれ、イレギュラー？（後書き）

口のわかる単語とわからない単語の差はまつわってあります
ん！

なんとなくわかる単語とわからない単語があります。

80・なにこれ、黄色い光

力が湧く。
なんで？

「私の美しい魔法で口口をスーパーな猫にしてあげるよん」

セリーヌの強化魔法らしい。これはすごいね。

「私は後方支援をつ！」

言つなり、ミフリスがベネルにも負けないよつた無数の魔法の玉をベネルにむかって放つ。

「ロロロ…！」

俺がその魔法に乗じてベネルに近付き、ミラの魔法で髪を伸ばす。そしてそのまま、ベネルの横を通り過ぎた。

「どうだ！？」

「なにかな？」

あれ？今確かに攻撃できたよね？

「その程度の魔法で勝とうっていうのかい？魔王を舐めすぎだね」

まじっすか。

確かに伸びた髪がベネルを貫通したはず・・・。感触もあつたし。

「もう一回！」「

「リアルナイトメア！！」

セリーヌの魔法で絶対に当たるハズ……

「だから、遊びならもひめにしよう！」

うそでしょ。

ここまで実力差があるとか反則でしょ。

「ふんっ！」

ベネルは魔法の剣を作り、一瞬で俺の目の前へ現れ、そして俺を薙ぎ払った。

「うひや……！」

広い部屋の壁まで飛ばされる。

「私の結界で防げない……？」

ミラが瞬時に結界を張ってくれていたらしい。
おかげで死なずにすんだ。

「こんなもんか」

ダメだね……。

ベネルが強いのはわかつてたけど、ここまでつてのはないよ。
ハア、奇跡でも起きないかな。

「口口口諦めひやだめだよー」

ミラが俺に駆け寄る。

回復魔法で俺の傷を癒し、青い炎でベネルに牽制する。

「私は負けたくないよー」

俺だつて負けるのは嫌だし。

でもさ、でもさ、どうせつって挽回するの?

圧倒的すぎるじやん。

『せ・・・を・・・・せよ』

ん?
なに?

『世界を・・・変革・・・せよ』

頭の中に響く声。

『勇者よ、世界を変革せよ!』

突如、黄色い光が俺を包み込んだ。

「なんだ?」

ベネルが目を細める。

俺だつてなんなかわかないし。

『自分の道を信じろ。勇者の道がいつも一本道とは限らない』

あ、思い出した。

あの盗賊の時の黄色いドラゴンの声だ。

「まさか、黄竜の力！？」

え、なにそれ。

「最初の勇者、ヤスオが作り出したと言われている最大のイレギュラー的な存在」「作り出した？」

「以降の勇者には力も貸さず、静かにしていると聞いていたんだけどね・・・」「

よくわかんないけど、わかんないままでもよくなつてきたし。

『魔王を倒す』ことが全てではない。お前のやり方を示してみせる』
ものすうじい力が湧いてきたんですけど。

「いやーー！」

さっきの一発の何倍にも魔力が凝縮された光の玉を百個以上つくり出す。

「おやおや、これはいい勝負になりそうだね」

笑つてられるのも今のうちかもね、ベネルーー！

80・なにこれ、黄色い光（後書き）

最初の勇者の名前をヤスオにしたことに本当に後悔しています・・・。
外人の名前つければよかつた・・・w

力を手に入れたロロがどういう答えを見つけるのか、次回必見です
よつ！！

81・なにこれ、三毛猫の口口

ものすごい爆発が起る。

城の壁が崩れ、隣の部屋が見える。

「いやー。」

まばたきをする間にベネルに近付く。

早すぎて頭がついていけなさそうだし。

強化した爪でベネルを切り裂くが、ベネルもタダでは受けくれない。

おもいつきりお腹にグーパン喰らった。

「おもしろいじゃないか。どこまでもイレギュラーを貫くなんて」「でしょ？おもしろいことは取り柄のひとつなんだよ」「勇者が魔王に倒されるというイレギュラーが起きててもおかしくなさそうで嬉しい限りだよっ！」

嬉しそうに笑いながら、強烈な魔法を放つてくる。

「フォースシールド！！！」

「いやー。」

ミラの結界で弱まつた魔法を相殺する。
続けざまにベネルが俺の懷に入り、魔法を放つた。

「うひゅー！！！」

俺は崩れた壁を飛び越え、隣の部屋に入ってしまう。

いってえーし。

あれ? なにこい、研究室みたい?

足元には魔方陣があり、その周りには魔法科学の研究施設が並んでこる。

「リ・・・セット?」

あ、リセットボタンあつたし。
すっげえわかりやすいここにある。

これを押すと、俺と魔王は時空の狭間に閉じ込められちゃうんだ
つけ?

つていうか文字読める猫とか本格的にすげーくね?

「えーっと

壊しちゃおひ。

うん、壊しちゃおひ。

「こやー。」

ベネルに向かってではなく、研究室のよつなかの部屋を破壊するよ
うに魔法を放つ。

ボンッ!!

「な、なんて」とつづく。

ベネルが血相を変えて俺に近付く。

「だつて、壊しちゃえばこいじゃん。勇者システム? なにこれおい

しいの？って話だもん

「システムの破壊なんて、なにが起きるかわからないんだぞ！？」

「知ったことじやないよ。俺は自分勝手に生きる猫だもん」

揺れる。

城が揺れている。

同時に、地面にある魔方陣が光っていた。

「ああ、元の世界に戻る道が・・・」

「この魔方陣が？」

光ってる。発動してるってことかな？

「！」の世界の魔力がこの魔方陣に集まっている・・・？

よくわかんないけど、今がチャンスだわ。

「！」や！――

魔方陣に夢中になつているベネルに向けて、特大な魔法を放つた。もちろん、ベネルは反応に遅れ直撃する。

「くつ・・・・！」

死んでない。まあ、死ぬほどやばい魔法は撃つてないんだけどね。それでも気を失わせるには十分だつたっぽい。

「ばいばい、元気でね」

ベネルに言ひづ。

魔方陣の上で倒れている少年は、静かに魔方陣と共に消えていった。

「口口！大丈夫！？」

「ミラ……」

ミラが傍に来る。

「ねえ、もしかしてさ……もつ口口は自分の世界に帰れないんじゃないの？」

「うん」

「なんで、魔王を元の世界へ帰したのよ」

「偶然システムが壊れて、偶然ひとりだけ帰れそうな感じになつたんだもん。いいじゃんそれで」

「なんでそんなに優しいのよ……猫のくせに」「どうせ帰つても、帰る場所のない野良猫だよ」

「……もう」

「ねえミラ知ってる？」

「え……？」

「三毛猫の雄はさ……」

三毛猫の雄はさ

長生きしないんだよ。

「なによ？」

「いや、なんでもない」

「いい？ 口口！ 隠し事なんてダメなんだからね！」

「ほらほら、行こうつづきも言つたけど、帰るといひなんてないんだもん。だから一緒にどうとか行こう？」

「口口……」

小さく頷いて、ミラはまた小さな妖精に戻り俺の頭に乗った。
あ、小さくなれるんだね。なんか懐かしい感触。

道はひとつじゃない。自分で作ればいい。

ひとつことなんでしょう？ 黄色いドラゴン。

勇者システムを破壊して、全ての魔物を勇者といつ呪縛から開放する。

ひとつして世界にはなんにもなくなつたわけだけどさ、勇者なんて
いなくたつていいじゃんか。

だつて、この世界の事情なんて俺の知つたことじゃないし。
自分勝手？ 褒め言葉だよ。
自己中心？ 当たり前だろ。

傍若無人？ えっと、どゆ意味？

まあ、なんでもいいけどさ、俺はとにかく自由なんだよ。
なぜなら俺は三毛猫の口口なんだから。

なにこれ、俺かつこいいし。

81・なにこれ、三毛猫のロロ（後書き）

ほぼ最終回です！！

次回はエピローグ的ななにかです。

作品的に、ここで読み終えるのもひとつかもしません。
次回は作者的にはおまけな気持ちです。
気になる方はぜひ読んでみてください。

82・なにこれ、ヒューローク的な

「うそつと、うそつと、ミラを頭に乗せた俺は魔王の城の外に出る。

「ロロー？ ラー？ オー！ オー！ 綺麗なお姉さんの元へ帰つていいでー！」

「ロロ様！？ まさか・・・これが勇者システム・・・？ 破壊・・・されてるのですか？」

セリースとミフリスが探してるっぽいけど無視無視ー。

だって、俺はもう勇者じやないんだもん。

あ、勇者といえば、あのアホ勇者はどうじ・・・

「おやおや、こんなところにいたのかい？」

余計なこと考えたから本物が現れたし。
ずいぶんボロボロじゃんか。

「これから新婚旅行かな？ それなら南のリゾート、アスパルーム
がオススメだよ」

言つなり俺の首から下がつている赤い財布に旅行券を無理やり押し込んだ。

「し、新婚旅行ってなによつーば、ば、バカ勇者！」

頭の上にいるミラは顔が見えないけど声が焦つてた感じだった。

「んじゃ、行つてくるわー」

シェルガイ

勇者つて結局なんだかわかんない奴だつたな。

アホでバカでどうしようもないってことだけはわかってるけどね。

「口口も否定しなさいよー！」

え？ なにを？ 新婚旅行つて意味がちょっとわかんなかったし。
旅行つていうか旅じやん？ ジャあ合つてるんじゃないの？

「もうー！ 口口のバカーー！」

頭をつねられた。

でも、なんでだか痛くない。

ようやく、勇者というしがらみから開放された。

俺は猫だ。猫は自由だ。だから俺は自由だ。

これから勇者システムのこととかギルドのこととかせミフリス
とセリーヌに任せちゃえばいいよね。
頭使うところは仲間にパスするわ。

勇者システムから開放されたのはなにも俺たちだけじゃない。
この世界そのものだ。

自由つてものすごく難しいものだけど、まあなんとかなるっしょ。
この世界がなんとかならなくても俺には関係ないしねー。

力つて使うためだけにあるんじゃないんだと思うんだ。

時には使わないということもひとつの中肢なんじゃないかな。
魔王を倒せるだけの力を黄色いドラゴンはくれたけど、俺の可能
性を広げてくれたんだと思う。

もちろん、俺の勝手な解釈だけだね。

猫つてか、死に際に姿を消すって言われてるじゃんか。

一説には、病氣の痛みとかからの恐怖から身を隠すって言われてる。

一説には、飼い主に迷惑にならないよつこつて言われている。

一説には、死体を晒したくないって言われている。

一説には、安全などいろへ行つて生きよつとするつて言われてる。

俺はどれだらうね。

どれでもないのかな。

旅に出て、いろんなところに行つて、いろんなことしたいじゃん？
残り短い命でもさ、笑つて笑つて笑わせて死にたいじゃん？
きつとそんな感じ。

ベネルはお母さんに会えたかな？

なにこれ、ハッピー・ハンド。ばいばい！

82・なにこれ、ヒューローク的な（後書き）

「」まで読んでくださった読者の皆様、本当にありがとうございました。

口口の旅はまだまだ続くようですが、「」のお話は「」で終わりとなります。

作者自身この作品には思い入れが強く、とても勉強になつた作品でした。

ギャグファンタジーというジャンル、初めて書かせて頂きました、とても難しいと実感しました。

なんかマジメでつまらない話も「」までつまつと書いています。

感想や、評価やアドバイスやお待ちしております！

余談ですが、二毛猫の雄の寿命が短いといつのは相対的に雌と比べた時の話です。希少価値の高い猫なので、幸運を呼ぶと言われているらしこのですが口口はどうだったでしょうかね。

それではまた次回作でも・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3072h/>

勇者＝三毛猫？？

2010年10月10日12時31分発行